

平成28年度 大学教育再生加速プログラム
テーマV 「卒業時における質保証の取組の強化」 報告書

体育系大学における学修成果の可視化と 卒業時における質保証の取組の強化

：鹿屋体育大学における4年間の教育改革の取組みと今後の課題

令和5年3月



かのや
国立大学法人 鹿屋体育大学
NIFS NATIONAL INSTITUTE of FITNESS and SPORTS in KANOYA

はじめに

本報告書は、文部科学省における大学改革推進等補助金「平成 28 年度大学教育再生加速プログラムテーマ V『卒業時における質保証の取組の強化』」の補助を受けて行われた、「鹿屋体育大学体育系大学における学修成果の可視化と卒業時における質保証の取組の強化」の 4 年間の取り組みをまとめたものです。

本取組の実施に際しては、元学長の福永哲夫先生、前学長の松下雅雄先生のご指導のもと、学内外の多くの関係者のご協力やご支援、ご示唆を得て実施することができました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。ありがとうございました。

「大学教育再生加速プログラム」は、高等学校や社会との円滑な接続のもと、入口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、先進的な取組を実施する大学等（短大、高専を含む）を支援することを目的として実施されたものです。その詳細は、日本学術振興会の「大学教育再生加速プログラム（AP）」で確認することができます（https://www.jsps.go.jp/j-ap/sentei_torikumi.html）。本学は、体育・スポーツ系大学で唯一採択され、平成 28 年度からの 4 年間、教育の質保証の充実に取り組んできました。

本報告書の原稿が作成された令和 2 年から既に 3 年が経過しようとしています。その間に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るい、まだ油断できない状況ですが今ようやく収束へと向かいつつあります。この間に教育は「対面（面接）授業」から「遠隔授業」への扉を開き、デジタル化へと大きく舵をきりました。本学もこの大きな変革・改革に従い、現在も新たな模索と挑戦をしています。今改めてこうした大きな教育の変革や改革を振り返るとき、コロナ禍前に取り組んでいた本事業、特に学修成果の可視化とその活用の意義や価値を実感します。コロナ禍のどんな状況でも、学修の質を担保しようとした教職員と学生達の取組は、本事業で醸成されていたものだと考えます。そのような意味で、教育の質保証の取組は、不断より意識的にチャレンジしていくことが重要と考えます。それ故、教育の質保証に取り組んだ本事業の軌跡や成果をデジタル版でお知らせするとともに、冊子媒体で作成・配布して広く知って頂くことも重要と考えました。特に体育・スポーツ系大学の参考になればと考え、配布させていただきます。

鹿屋体育大学では、入学前・直後、在学中および卒業時・卒業後に、機関、教育課程および科目の各レベルにおける学修到達度を評価・検証を目的として、令和元年に「鹿屋体育大学教学アセスメント・ポリシー」を定めました。また、2050 年を目標年とする大学の長期ビジョン「NIFSNEXT30」を令和 4 年 10 月末に公表しました。「NIFSNEXT30」では、本学が担う使命として「教育・学生支援」「研究」「国際化」「社会連携・社会貢献」の 4 領域におけるミッションを設定し、そのなかで「教育・学生支援」領域では、A.C.E.Kanoya【活気ある（Active）独創的な（Creative）精鋭（Elites）】をスローガンとする人材育成を掲げています。（p49 参照）その基盤には「スポーツ、武道、体育及び健康づくりの各領域における、先導的かつ即戦力となる人材の育成」があり、今後も学修成果の可視化と卒業時における質保証の取組の強化をより一層推進し、ミッション実現に向けて努力する所存です。

今後ともご高配のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

2023 年 3 月

鹿屋体育大学 学長 金久 博昭

はじめに

<目次>

I. 取組実績の概要	3
II. PLAN：構想・計画	5
1. 事業の概要	5
2. 大学全体の改革方針における本事業計画の位置付け等	6
3. 達成目標と事業計画の具体的な内容	8
4. 事業計画実施体制	11
5. 年度別の計画	12
6. 補助期間終了後の継続性	13
7. 事業成果の普及	14
8. 本取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組	14
III. DO：取組	16
1. 平成28年度から令和元年(平成31年度)までの進捗状況の概要	16
2. 本事業における達成目標と事業内容の状況	19
3. 各年度の取組内容・成果	21
IV. CHECK：評価	42
1. 外部評価委員会における議事の概要	42
2. 外部評価委員における本事業に対する評価結果	43
V. ACTION：今後の検討	46
1. AP助成期間終了後の本取組の継続について	46
2. 学生が主体的に学修改善できる新たな指導者像の検討	47
3. 今後の課題	48
<別添資料>	
・平成28～31年度の外部評価委員会等	53
<付録>	
・AP-News Vol.1～Vol.11	59
謝辞	95

I. 取組実績の概要

本事業は、「卒業時における質保証の取組の強化」を全学的に行うものである。特に、ディプロマ・ポリシー（DP）を担保する「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」及び「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力（汎用的力）の養成」の状況を、学修行動や学修成果の可視化から確認し、継続的に教育改善が行える教学システムを確立することを目指した。

その結果、以下の4点について実現した。

- 【1】科目群毎やDPで目指す12の資質・能力に関する授業科目毎のGPAを可視化すること
- 【2】標準化された「汎用的能力テスト（PROGテスト）」を柱とした学修成果を可視化すること
- 【3】基礎的なスポーツ指導力の学修成果を可視化すること
- 【4】学修行動等を可視化すること

これにより、令和3年度からの新教育課程の構築に向けた改訂作業を、学生の実情を踏まえたエビデンスベースで行えるようになった。例えば、4年次の11月から2月の卒業研究を仕上げる学びを通じて、学生の課題解決力等の急激な成長を確認し、卒業研究における学修効果や課題について把握できた。加えて、卒業時及び卒業後（卒業後3年と10年）の学生に対しても、学修成果に対する満足度等のWeb調査を継続できる体制を整備するとともに、その情報を基に継続的に教育改善が行える教学システムを確立した。

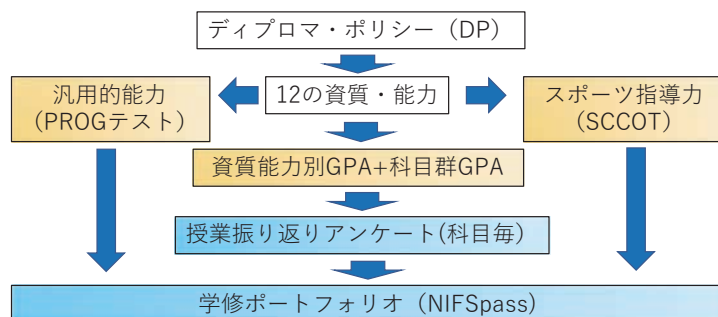
また、可視化した学修成果を学生自身で振り返る学修ポートフォリオの構築（NIFSpass）やDPを意識した授業振り返りアンケートへの改編作業は、学生及び教員へ授業科目とDPで目指す学修成果との関係を強く意識づけさせることに繋がった。改編した授業振り返りアンケートからは、各科目のDPの学生自身が評価する理解度や達成度等も明らかにし、教員間で共有できるようにした。さらに、その評価を用いて教員の授業力に対する顕彰制度も令和元年度より実施し、教育改善が積極的に推進されるようにした。

一方、本事業の評価を行うために、専門知識を有した大学教員やスポーツ指導者養成団体関係者、「スポーツ指導実習」の受入先のステークホルダー（民間団体・産業界等）を外評価委員として委嘱し、事業計画に基づく進捗状況の確認・評価、教育の質保証に向けた取組に対する示唆を得た。なお、外評価委員会は、平成29年度に1回、平成30年度に2回、令和元年度に1回実施した。

今後も「教育の質保証」の観点から、学長傘下の教育企画・評価室が中心となり、学生の学修行動や学修成果の可視化を図り、継続的な教育改善に関する情報提供や提言を行う。そのためにも、令和元年度に、AP、CP（カリキュラム・ポリシー）、DPの達成状況を全学レベル、教育課程レベル及び科目レベル別に測る「教学アセスメント・ポリシー」を整備した。まだまだ達成すべき課題や改善課題は残るが、以上のようにAP事業を通じて「卒業時における質保証の取組の強化」を継続的に実施しえる環境や体制を整備でき、大学改革は加速している。

なお、本事業における本学の教育の質保証の取組は、他の大学等で参考になる事業成果として、スポーツ指導力の可視化の一環として「スポーツ指導力に関わるプロフィール型テスト（通称：SCCOT：Sports Coaching Competency Testの略）」を開発したことである。SCCOTは、現在日本のスポーツ界が目指して

【卒業時の質保証のための学修成果の可視化と学修改善の取組の概要】



いる「プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断スキル」を測るものである。このスキルが高く判定されるほど、昨今スポーツ界で問題視されている体罰等について、「体罰は指導に有効ではない」「スポーツ指導に体罰は必要ない」という態度を強く持っていることがわかるようにしている。本学では、この行動・判断スキルをスポーツ指導力（者）の基礎力として捉え、学生の学びの成果や教育効果としてテスト結果を提示している。現在は、他の体育系大学やスポーツ競技団体等と協力して、本テストの試験的实施やスポーツ指導者のための適性判断などにも活用できるように、環境整備を進めている。SCCOTの普及により、スポーツ指導者の資質・能力の可視化、さらには、倫理観のある（暴力・体罰等を行わない）スポーツ指導者の研修や養成が可能となると考えている。

開発した「スポーツ指導力基礎力テスト（SCCOT）」は、現在日本のスポーツ界が目指している「プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断スキル」を測ろうとしている。このスキルが高く判定されるほど、昨今スポーツ界で問題視されている体罰等について、「体罰は指導に有効ではない」「スポーツ指導に体罰は必要ない」という態度を強く持っていることがわかるようにしている。

これまでの試験的運用により、右図のようにスポーツ指導者の指導者であるコーチデベロッパーの得点は高く、開発したテストの妥当性を強化することが出来ている。

また、SCOTT は、指導プロフィールを明らかにするばかりでなく、テストに回答することで学生自身のスポーツに対する倫理観や価値観について自己反省や啓発を促せることも明らかにしてきている。

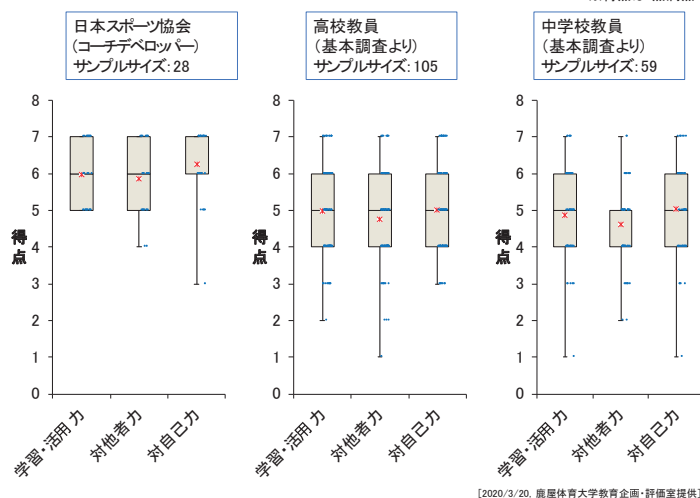
そして、社会人の SCCOT 受験者の満足度等のアンケートからは、以下のような高評価を得ている。

本テストの他大学への普及の取り組みとしては、平成 30 年度より、本学以外の体育系大学での継続的な試行を続け、令和2年度からは有償での実施へと繋がっている。

現在は、体育系大学や指導者養成を担うスポーツ競技団体での普及に向けての環境整備を図っている。特に、テストの効率的な運用ができるようテストのWeb化や事業化に向けて進めている。

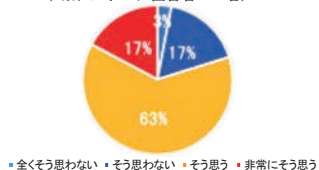
2019年度までの結果(学外・社会人)

※得点は7点満点



満足度

Q. SCCOTの結果について、総合的にどのくらい満足していますか？
(※アンケート 回答者134名)



社会人・大学生ともに

約80%の満足感

[受験者の声]

- ・ 自分自身の姿を客観的に見ることができました。
- ・ 自身の考え方の傾向を知る上で参考になりました。
- ・ 自分の変化を実感したいので、定期的受験してみたいです。
- ・ 今後の指導に役立つと感じました。

II. PLAN：構想・計画

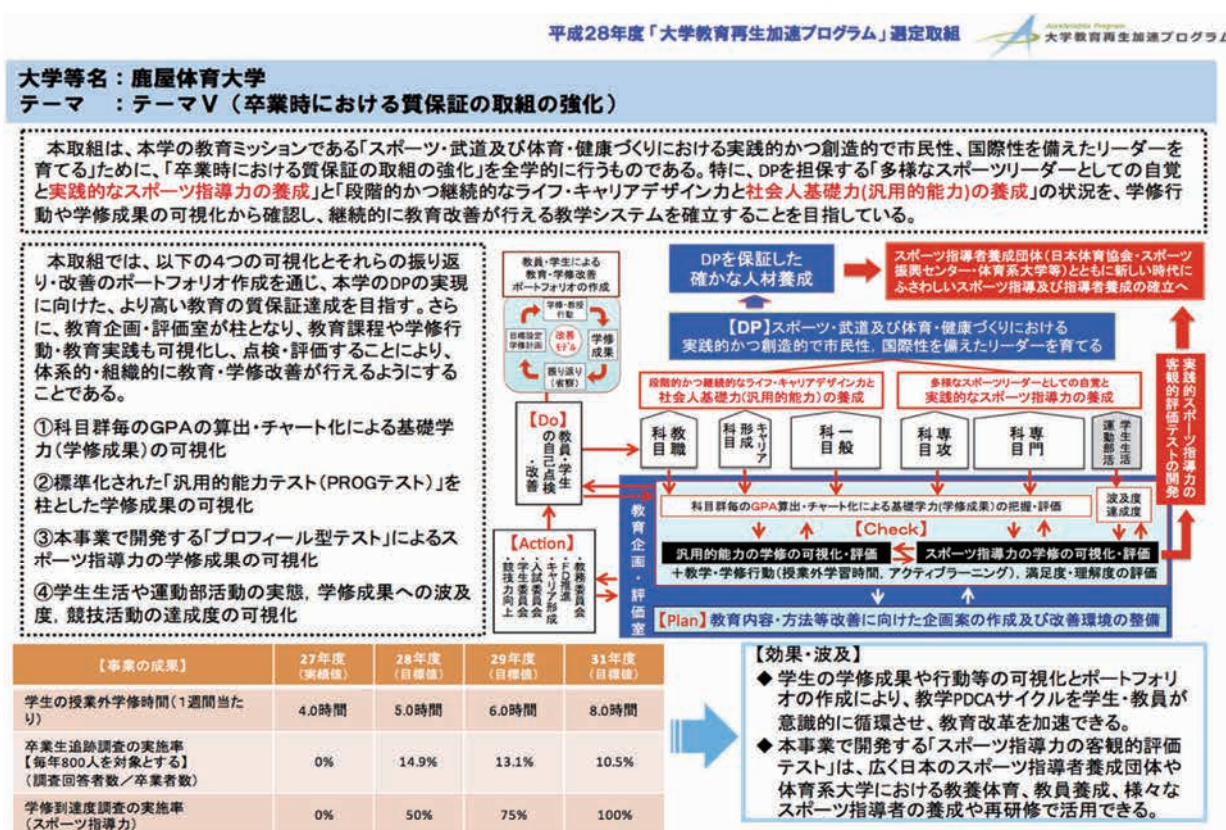
(出典：平成28年度大学教育再生戦略推進費 大学教育再生加速プログラム（AP）「高大接続改革推進事業」計画調書より）

1. 事業の概要

本取組は、鹿屋体育大学の教育ミッションである「スポーツ・武道及び体育・健康づくりにおける実践的かつ創造的で市民性、国際性を備えたリーダーを育てる」ために、既存の教育企画・評価室を柱に「卒業時における質保証の取組の強化」を全学的に行うものである。

特に、ディプロマ・ポリシー（DP）を担保する「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」と「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力（汎用的能力）の養成」の状況を、学修行動や学修成果の可視化から確認し、継続的に教育改善が行える教学システムを確立することを目指している。

さらに、本事業で開発を目指す「スポーツ指導者の指導力等の客観的評価テスト（理想的な指導者を基本としたプロフィール型テスト）」は、広く日本のスポーツ指導者養成団体や各大学における教養体育、教員養成、様々なスポーツ指導者の養成や再研修で活用できるものを目指している。



(出典：<https://www.n-fukushi.ac.jp/ap-portal/summary/?mode=detail&entryID=9>)

2. 大学全体の改革方針における本事業計画の位置付け等

鹿屋体育大学では、体育・スポーツ、レクリエーション、武道及び健康科学の科学分野において、真理の探究を図るとともに、我が国におけるスポーツ・健康科学分野の先導的役割や鹿児島県を中心とした九州地域における課題解決の役割を果たすべく、教育研究を実施してきた。学士教育課程においては、スポーツ・健康科学分野の教育研究を通じて、国民のスポーツ・健康を適切に指導し得る知識、スポーツ・健康に関する実践力・実技力や指導力を有する人材を養成することをミッションとして再確認している。

本学における教育改革の取組として、「体育・スポーツ学分野の教育の質保証における参照基準（平成 23 年 10 月）」を手がかりに、平成 26 年 3 月までにディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）を明確にした（資料 1）。同時に教育課程の改訂も進め、平成 26 年 4 月より新教育課程を開始した。平成 26 年 8 月には、DP や CP の達成状況を把握し、教育の質保証に向けた検討を行う組織として「教育企画・評価室」を設置した。そして、ファカルティー・ディベロップメント（FD）を FD 推進専門委員会と連携し、全教員の参加を促すべく、授業評価、授業参観、新任研修等の充実を図ってきた。平成 26 - 27 年度に教員を対象に実施した授業の取り組み状況の調査では、約 9 割の教員が DP を意識した授業を行っていることを確認できた。また、学生のキャリア教育及びキャリアガイダンス強化のため、大学改革補助金の支援を受けながら、学長下に「キャリア形成支援室」を設置し、その実現に向け積極的に取り組んできている。

しかしながら、本学の DP や CP で目指す「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」と「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力（汎用的能力）の養成」が行えているかについては、汎用的能力の学修成果の把握に向けた調査を一部開始したものの、専門スタッフの不足から十分に把握できていない。特に、専門教育が大きく関わる前者の学修成果の可視化作業では、重要な役割を果たす評価テストの開発やループリック作成が停滞している。

そこで、本事業では学生が「スポーツ・健康に関する実践力・実技力や指導力を有する人材」として卒業までにどれだけの力を身につけたか、また、どのように学んできたかについて客観的に評価する仕組みを開発し、学生の学修行動や学習成果等の可視化を実現することにより、DP の実現に向けた、より高い教育の質保証の達成を目指す。

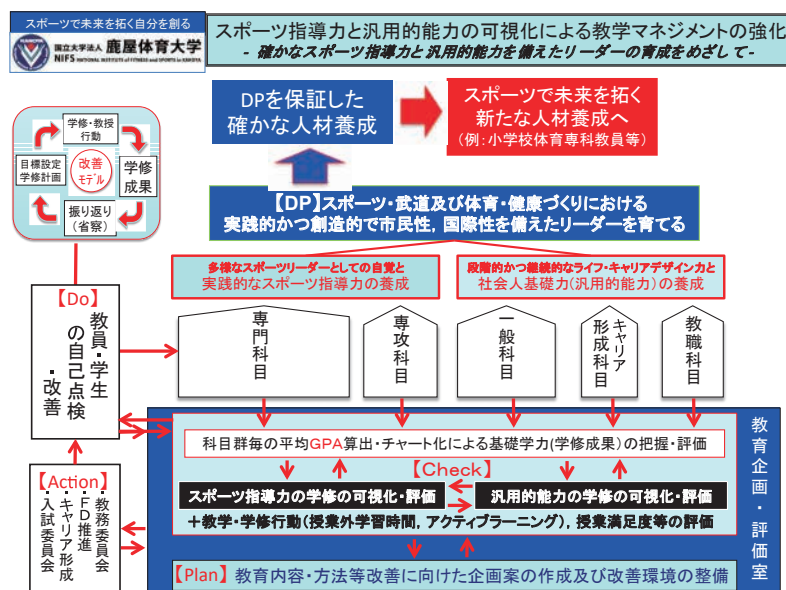
特に、本事業で開発しようとしている、スポーツ指導者の指導力等を客観的に評価するためのテストは、2013 年に発表された、新しい時代にふさわしいコーチング及びコーチを確立するための提言（「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書」平成 25 年 7 月）でも求められているものである。そして、平成 26 - 27 年度の「コーチング・イノベーション事業」でも検討されてきた事項である。残念ながら、先の事業では、スポーツ指導者の資質や能力の評価指針等が示されたが、本学が目指すようなスポーツ指導力等を具体的に評価するための評価テスト（理想的な指導者を基本とした「プロフィール型テスト」）の開発には至っていない。それ故、国立唯一の 4 年制体育大学である本学としては、スポーツ界のコーチ養成の変革を促進するためにも、スポーツ指導力に関する「プロフィール型テスト」の開発をスポーツ指導者養成団体（日本スポーツ振興センターや日本体育協会〔現 日本スポーツ協会〕等）と協働し、さらに本学の教育プログラムが社会的な要請に込んでいるかを点検・評価したいと考えている。そして、新しい時代にふさわしいコーチング及びコーチの確立に寄与したいと考えている。

本事業は、本学の DP を担保すべく人材養成の学修行動及び学修成果が学生及び教職員に可視化でき、それを支える教育課程や教育実践を点検・評価し、教育・学修行動の改善が体系的・組織的に行えるようにする取組であり、本学の教育改革の中心のかつ極めて重要な役割を担うものである。

3. 達成目標と事業計画の具体的な内容 (全体像と達成目標)

本事業では、学生が卒業時に「スポーツ・健康に関する実践力・実技力や指導力を有する人材」としての力をどれだけ身につけたかを客観的に評価する仕組みを開発することにより、学生の学習成果の可視化を実現し、本学のDPの実現に向けた、より高い教育の質保証の達成を目指す。また、本学のDPを担保するための学修行動も学生及び教職員に可視化するとともに、教育課程や学修・教育実践を点検・評価し、教育・学修行動の改善が体系的・組織的にできるようにすることを目指す。本事業は、本学の教育改革の中心かつ極めて重要な役割を担うものである（右図参照）。

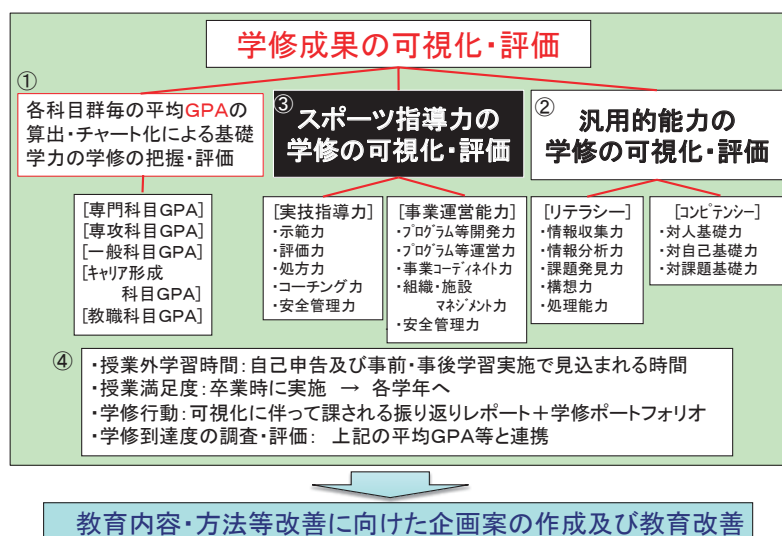
本事業では、次の4つの事項で学修行動及び学修成果の可視化と教育改善を行う。



①科目群（科目区分）毎の平均GPAの算出・チャート化による基礎学力（学修成果）の可視化と教育改善

このために、まずFD推進専門委員会と授業担当教員との連携を図りながら、教育課程全体及び授業科目群毎に修得すべきミニマムな学修課題を明確にし、基礎学力の水準を確認する。そして、修得すべき課題を学生に周知し、主体的な学修の方向付けを支援する。さらに、学修の成果である科目群（科目区分）毎の平均GPAの算出・チャート化により基礎学力（学修成果）の可視化を図る（下図参照）。同時に、科目群（科目区分）毎のルーブリックを作成し、学修行動と成果との間を効果的に振り返ることができる学修ポートフォリオの仕組みを構築する。平成27年度には、すでに「体育専攻学生における実践的指導力の養成を目指した『実技実習の学習課題』」を整理し、学生に周知し、実技実習における学びの方向性を示している（資料2）。

なお、修得すべきミニマムな学修課題を明確にすることで、編入学試験や大学院入学試験におけるアドミッション・ポリシー（AP）の要件をより明確にできるとともに、授業科目間の系統性や体系的性をより確かなものへと整備することができる。と考える。



体育専攻学生における実践的指導力の養成を目指した『実技実習の学習課題』

本学の実習目標を参考にすると、関連実技科目や専攻科目等の実技実習で学ぶ学習課題は、以下のようものが挙げられます。

1. 運動技能の習得・改善（示範・デモンストレーション力）

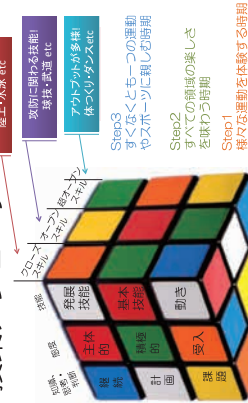
指導の際にその運動種目の示範（手本）が出来る程度に（できるようになる）こと、あるいは（学習の見本となるような記録や動きが達成できること）は、学習者や選手の学習目標となる運動を伝える上で重要な役割を果たします。

また、実技実習を通して、なかなか（できない）ことから（できるようになる）ことは、生徒や選手を指導する際に、出来ない生徒の気持ちや理解（共感）し、動きのコツ・カン、指導のポイントを深めるのに非常に役立ちます。ですから、運動技能の習得あるいは改善には一生懸命挑戦してください。

なお、学校体育の教師（保健体育科教育法）の場合、下図のように、運動の領域毎に指導内容の具体例が示されています。従って、それを示し、生徒全員ができるよう指導することが必要です。例えばゴール型の球技（バスケットボールなど）の場合、中学・高校生は（守備者がいない）位置でのシュート）のように、ディフェンスがないクレーンな状況でシュートを打てるようにするための技術を指導します。サッカーなどでは、トラップをしてからのキック、ダイレクト・キック、インサイド・キックやアウトサイド・キックなどのボールのとりえ方や体の向け方、全身の使い方などが考えられます。実際には1時間で一つの技術を指導する程度ですが、各段階で示範できることが期待されます。

ゴール型の球技（バスケットボールなど）		高校3年生・専攻学生	高校3年生の専攻学生
小・中・高	バスケットボール	・守備者がいない位置でのシュート ・フリーの状態でシュートを打てる ・ドリブルでのシュート ・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル	・守備者がいない位置でのシュート ・フリーの状態でシュートを打てる ・ドリブルでのシュート ・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル
小・中・高	サッカー	・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル	・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル ・パスやドリブル

授業アプローチ



こうした診断・評価が出来るためには、技能レベルに応じてどんな動きのタイプがあり、何が不足して次のレベルに行けないのかについて知る事が重要となります。ですから、実習中の動きの観察やそれにまつわる議論は大切になります。

なお、学校体育の教師（保健体育科教育法）の場合、意図的でない生徒も授業を受けるという想定があり、学校体育の教師（保健体育科教育法）については、技能レベルの把握の他、生徒のモチベーション、経験、集団の様相、発達段階等の視点で、授業設計段階で位置づけられています（生徒の自己効力感、有能感の保証・・・好きになる、楽しくなる指導なども評価することになります）。

技能については、（手だて）という項目で形成評価を授業途中で計画的に行い、できない生徒をできるようにすることの重要性の観点で、知識の再確認（感覚表現、比較表現による指導言語のストック

や教材、教具、場の工夫など）の想定を考えさせます。前述の図のように領域の特性と発達段階によっても指導アプローチが異なるので、その上で技能の指導が中心が、関わり合いのグルーブづくりが大切か、戦術的理解が大切かなどを踏まえて指導を検討することが重要になります。

3. 運動指導に必要な教材間の関係についての把握（処方・教材力）

実際の指導では、生徒や選手の運動技能を診断・評価した後、目標とする運動に向かって、生徒や選手が（わかる）（できる）（できるような気がする）（できる）といった過程を効果的に展開できるような教材を系統的に配置し、そこで生徒や選手へ適切にアドバイスできることが重要となります。このことは、どれだけ生徒（選手）と生徒（選手）のからだ（動き）の間での積極的な対話を発生させられるか、橋渡しが出来るかといったことにもなります。

例えば、クラウチングスタートの授業で「地面をしっかりと押して走る」ことを伝えたい場合、生徒がそのことを（わかる）（出来る）（出来るような気がする）（できる）には、一つの方法としてスクラムマシーン押しながら始めて、タイヤ引きダッシュ、クラウチングスタートという順序で教材を配置する、といったことを考えることです。

つまり、こうした教材間の関係を把握するためには、（運動種目や教材同士が、どれほど似ているか）といったことを的確に把握することが重要になります。実習で展開される学習手順の意味、あるいは何が似ているかを授業後、再考・省察（レポート）することが、よりいっそう教材間の意味の理解につながるでしょう。

なお、学校体育の教師（保健体育科教育法）の場合、①技能、②態度、③知識、④思考・判断の関係をバランスよく指導することが重要になります。その上で、教材の簡易化、ねらいに応じた簡易化の観点で実際に使う教材を考えることになります。



4. 指導時における安全で、効果的な実技実習が行える運営・管理能力の習得（クライシスマネジメント・リスクマネジメント力）

運動の指導場面では、自然環境の急激な変化や災害の発生、運動自体が必然的に持つ危険性、生徒や選手が技能の未熟さから引き起こされる怪我、さらに路面が滑りやすいことで起こる事故等、様々な場面に危険が散在しています。学習者や選手が安全で、安心して学習が行える環境を整えることは、効果的な指導を行う上で非常に重要となります。

例えば、走幅跳の授業で、跳躍後に砂場を整理し、踏み切り位置が滑りやすいかを確認すること、それを生徒や選手に行わせることを知らずして、危険からの回避はできないのです。実習で展開される教員の安全配慮に対する行動を注意して観ているとよく分かるでしょう。また、万が一の環境の変化に対する事前想定、事故直後の処理、事故発生後の対処方法についてもよく理解しておくことが大切です。

5. 運動種目の発生から現在に至るまでに関するルール・記録等に関する人文・社会的な知識の獲得（スポーツの文化的享受力）

例えば、ラグビーはフットボールより発展し、ラグビーのゲームの終わりを知らせる（ノーサイド）の笛とは、お互いに敵サイドと味方サイドに分かれてゲームをしていたもの同士がゲームの終了とともに（サイド（敵味方）がなくなる）といったことを示す言葉であるとか、スポーツの多様性や文化的意義などを知らなければならないことは、よりスポーツの実践で必要とされる精神や行動をより意味あるものとして理解し、指導できることにもなります。ですから、こうしたことを文献学習によって深めておくことが大切になります。

なお、学校体育の教師（保健体育科教育法）の場合、体育理論と各領域での知識の学習に分けられています。体育理論の指導については、別途、保健体育科教育法Ⅲ・Ⅳ等で学ぶ必要があります。

（資料提供：金高宏文・佐藤 豊）

②汎用的能力の学修成果の可視化と教育改善

「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力（汎用的能力）の養成」を確認するために、標準化された「汎用的能力テスト（PROGテスト）」を柱に学修成果を可視化する。当該テストは平成26年度入学生から実施しており、在学中の学修やキャリア形成の指導資料として効果的に活用されている。

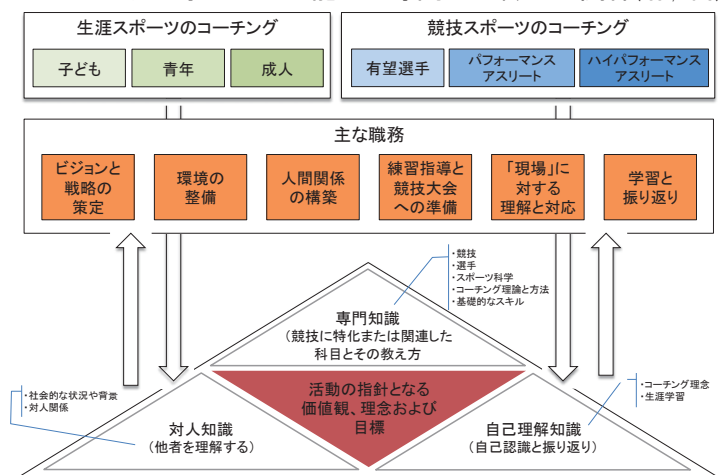
なお、汎用的能力等の学修成果の可視化は、大学入学時に求めるAPの要件をより明確にできるとともに、キャリア形成をより確かなものとし、退学率、就職率、離職率等における問題等の改善を導くことができると考える。

③スポーツ指導力の学修成果の可視化と教育改善

「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」を確認するために、まずはスポーツ指導者養成団体（日本スポーツ振興センターや日本体育協会〔現 日本スポーツ協会〕等）と協働して、スポーツ指導力に関する「プロフィール型テスト」の開発を行う〔下図は、国際的コーチング連盟が提案する専門職の能力と知識との関係を示したものである。（JSC 報告書より）〕。スポーツ指導力の学修成果の可視化は、既に本学で開発した自己・他者評価による評価方法（平成16～18年度の補助金事業「学生のスポーツボランティア活動の支援事業」で作成）で行っている。しかし、新「プロフィール型テスト」の開発により、本学のスポーツ指導者養成の教育プログラムが社会的な要請に込えているかを点検・評価・改善できるものとする。

また、「将来のスポーツとの関わり方」についても振り返り、ライフ・キャリアデザイン力を改善できる学修ポートフォリオを整備する。なお、その際には小クラス担任教員や小クラス学生やゼミナール学生とのメンタリング共同作業が促進される仕組みを検討する。

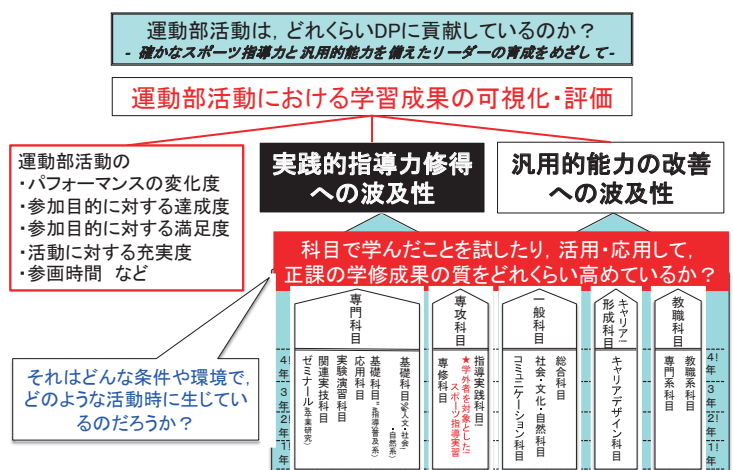
コーチングで求められる能力と専門的知識との関係（ICCE, 2013）



④学修行動の可視化と教育改善

本学独自で行う学修行動調査だけでなく、日本大学生調査（JCSS）や日本版新入生調査（JFP）も導入し、他大学との比較を行いながら、前述の学修成果の評価項目と合わせた教育改善を行う。

なお、本学は体育系単科大学ということもあり、90%以上の学生が正課外で積極的に運動部活動を行っているため、この点も正課での学修を補うものとなっている可能性がある。そのようなことから、正課外の運動部活動の取組状況や学習成果、正課の学修成果との関連性も把握し、教育課程や教授行動の改善に繋げたいと考えている（右図参照）。



5. 年度別の計画

(1) 平成 28 年度

当該年度は、教学マネジメントの IR 機能を有している既設の「教育企画・評価室」の機能強化を図る。これにより、学内の教育関連の情報の集約が体系的・組織的に可能となる。さらに、これらの情報の収集・分析・評価のために、特任助教、プロジェクト研究員及び非常勤の事務職員を雇用する。特任助教は、教員に対する教育改善の支援と学生の学修ポートフォリオ作成の指導等にあたる。プロジェクト研究員は、教育関連データの分析・資料作成を行っていく。非常勤の事務職員は、プロジェクト研究の分析作業を補佐するものとする。

なお、取組に関する学内周知のための説明会は 9 - 10 月に実施するとともに、3 ヶ月に一度のペースで進捗状況を「鹿屋体育大学教育改革ニュース（現 NIFS-AP News）」や学長懇談会等を通じて報告し、教育改革に関する学内理解を深める。

また、外部評価委員会を設置するために、関係機関等との連携を図り、12 月中に第 1 回目の会議を開催し、教育改革を点検・評価する指標や取組に関する示唆等を得て、本事業の取組へ反映させる。なお、外部評価委員に高い関心を保持してもらうために、学内同様に 3 ヶ月に一度のペースで「鹿屋体育大学教育改革ニュース（現 NIFS-AP News）」や会議録等により進捗状況のメール報告を行い、当該取組に対する理解を深めてもらう。

学修行動及びその成果の可視化の検討では、まず履修状況、単位取得率、学修の到達度評価、GPA 等の、既存の教務システム等から得られる情報を、可視化に向けてデータ加工するための仮の情報データベース（エクセル等の既存のソフトウェアにも対応するもの）の構築を図る。そして、まだ未実施の教育改革の指標調査である、授業科目の満足度調査や学修行動調査の調査項目や実施方法についての検討も行う。調査時期の問題もあるため、調査は試験的に行うこととし、全学的に過剰な負担とならないようにする。

さらに、本事業で新たに開発する「スポーツ指導力に関する可視化・評価」のための「プロフィール型テスト」作成の準備を行う。スポーツ指導者養成団体（日本スポーツ振興センターや日本体育協会等）のスタッフの協力を仰ぎながら、テストのフレームワークの構築と試行錯誤が当該年度の課題である。

一方、汎用的能力の評価に関しては、本事業以外の経費で、1 年次生と 3・4 年次生を対象に調査実施とフィードバックを行い、学生へのフィードバックの仕方や学修ポートフォリオシステムについて基礎的な情報を得ることとしている（平成 28 年度 1 年生へは既に実施済）。この中で、本学学生に適した学修ポートフォリオシステムのあり方を検討する。

併せて、大学教育改革を学外へ情報発信するための簡易版のホームページを開設し、取組の告知を行う。

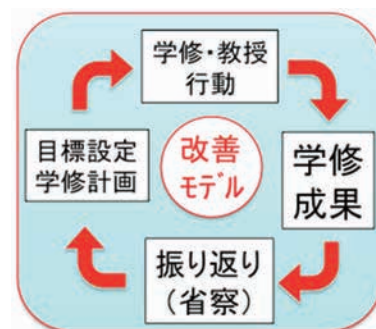
(2) 平成 29 年度

当該年度は、学修行動の可視化、つまり学修行動の調査を本格的に実施する。当該年度のポイントは、全学や学年毎等の各自の評価視点により調査結果が学生－教員にもフィードバックされ、学修の振り返りにより、新たな気づきや修学に対する目標設定、計画の立案が行える学修ポートフォリオシステム（振り返りレポート等の書き込み等）を構築することにある（p31 参照）。当該年度では、完成した学修ポートフォリオシステムとしての構築よりも、まだ試行錯誤が可能な形での運用形態を目指す。

「スポーツ指導力に関する可視化・評価」のためのプロフィール型テストは、「スポーツ指導実習」で用いることができるように、3・4 年次生及び卒業生に対する試験的運用を行いながら内容等の整備を行い、第 1 版を完成させる。

汎用的能力の可視化・評価は、本事業以外の経費で、全学生を対象に調査実施とフィードバックを行う。当該年度では、汎用的能力と開発する「スポーツ指導力」との関連性も分析・検討し、各能力との関係性や科目群（科目区分）の到達水準との関係も明らかにする。

取組の進捗状況を適切に評価するために、外部評価委員会を8－9月期に開催し、取組に関する示唆等を得て、本事業の取組へ反映させる。



（3）平成 30 年度

当該年度は、「学修行動やその成果の可視化の完成年度」と位置づけ、全学での定常的な学修ポートフォリオシステムを完成させる。そして、平成 26 年度に行った教育課程改訂の一応の成果を評価する年度と位置づける。なお、補助金終了後を見越して、当該年度以降はプロジェクト研究員の雇用を行わない。

当該年度では、大きなシステム構築ではなく、より特殊な事例（国際スポーツ競技大会出場者、学業不振者等）への個別対応ができるよう、教学マネジメントと全体システムの軽微な修正を行う。

取組の進捗状況を適切に評価するために、外部評価委員会を8－9月期に開催し、本事業での次年度以降の取組へ反映させる。

なお、大学教育改革を学外に情報発信するため、ホームページに取組成果を掲載する。

（4）平成 31 年度（令和元年度）

最終年度である当該年度は、前年度までに構築した学修ポートフォリオシステムの軽微な改善と運用を行う。同時に、前年度までの教育成果や教育・学修行動の可視化情報を手がかりに、2020 年の東京オリンピック後を見据え次世代に向けた新たなスポーツ指導者像の設定や、人材養成に向けた教育課程の編成についての検討を開始する。そして、新たな人材像養成に向けた方向性を提示する。

また、外部評価委員会を8－9月期と2－3月期に開催し、これらの取組が多種多面からの示唆を得た提言となるようにする。

なお、大学教育改革を学外に情報発信するため、ホームページに4年間の取組成果と未来への提言を掲載する。また、今回の取組全般を報告書としてまとめ、大学改革の成果を広報する。

6. 補助期間終了後の継続性

教育企画・評価室の専任スタッフである特任助教に関しては、DP を担保する学修成果の可視化や学修行動の把握を行うとともに、学内教員や学生への教育改善を継続的かつ円滑に行うために補助期間終了後も継続雇用する。非常勤の事務職員については、特任助教を補助するため、補助期間終了後1年間のみ継続雇用する。さらに、機能性を高めるために、教育企画・評価室を全学の IR 組織へと改組してより強化するための検討を平成 32 年度に行う。

学修ポートフォリオシステム及びスポーツ指導力の可視化・評価システムは、小規模大学である本学の特徴に合わせて、構築時に既存の教務システムの改修とデータベースソフトや WebClass も活用しながら作成することから、これらの補修費用等は、学内経費で賄うことが可能である。

汎用的能力の可視化・評価については、既製のテストを用いて実施するが、費用は年間 200 万円程度であり、かつ本事業開始時より当該補助金以外の経費で対応するので継続実施が可能である。

7. 事業成果の普及

本事業で開発する「スポーツ指導者の指導力等の客観的評価テスト」（理想的な指導者を基本としたプロフィール型テスト）は、2013年に発表された新しい時代にふさわしいコーチング及びコーチを確立するための提言（「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書」平成25年7月）でも求められているものであり、平成26－27年度の「コーチング・イノベーション事業」（日本スポーツ振興センター）でも検討されてきたテストである。先の事業では、スポーツ指導者の資質や能力の評価指針等が示されたが、本学が目指すようなスポーツ指導力等を具体的に評価するテストの開発までには至っていない。

本事業の成果物である新たなテストは、広く日本のスポーツ指導者養成団体（日本スポーツ振興センターや日本体育協会〔現 日本スポーツ協会〕等）でも用いることができるばかりでなく、各大学における教養科目としての体育や小中高の体育を教える教員養成、様々なスポーツ指導者の養成や再研修の場で用いることによりスポーツ指導力の現状や変化を知ることができるため、新しい時代にふさわしいスポーツ振興や指導者養成に寄与することが期待できる。

8. 本取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

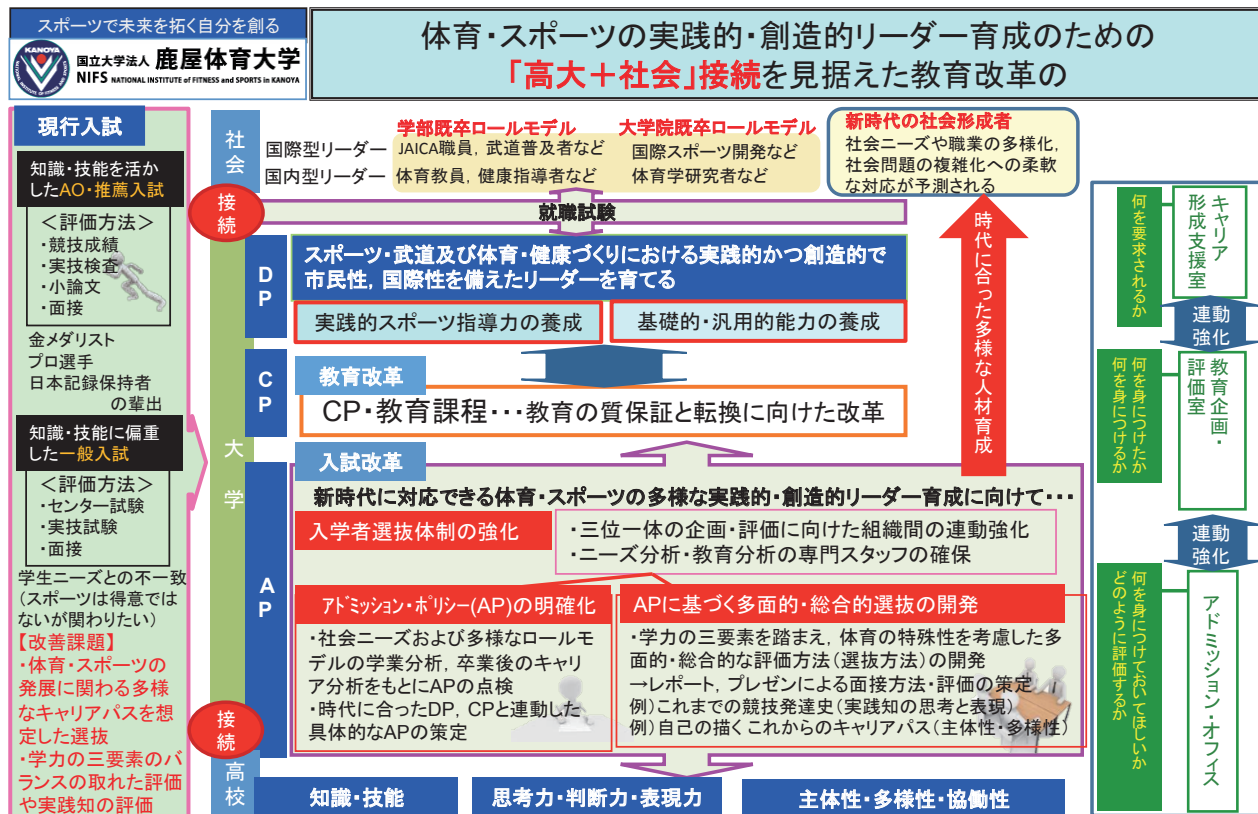
申請する事業計画は、本学のディプロマ・ポリシー（DP）に基づき、入口から出口まで一貫した「実践的かつ創造的なスポーツリーダー」の養成を目指した学士課程教育の構築を軸に、卒業時に身につけられるべき学修成果の可視化及びその教育の質保証の担保を計画するものである。

本学が掲げるアドミッション・ポリシー（AP）は、平成30年度までにディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーとの整合性や連動性の観点から見直す。そのために、在学生・卒業生の学修や教育効果の分析や教育課程及び教授行動の改善を図ることにより、本公募テーマが求める大学卒業時の確かな人材養成を達成できると考える。既に、入試改革・高大接続の改革に関しては、下図のように展開する予定である。このことについては、スポーツ指導力や汎用的能力の学修成果に着目し、本事業で開発する新「スポーツ指導力テスト」や「基礎的・汎用的能力テスト（PROGテスト）、スポーツ関連資格の取得率、多様な職業選択状況、授業満足度及び学修行動（授業学外学修時間等）を指標として設定し、成果を測定していく。

現状では初年次教育は、キャリア教育や就職支援とも連動させながら、1年次よりキャリアデザイン科目の中で系統的に展開している。しかし、卒業時を見据えた専門教育への導入ガイダンスにはまだ改善の余地がある。特に、大学1年次前期における授業科目の選択に関するオリエンテーションについては、学生の理解度が不十分で、授業改善（1年次4月期に開設科目群（科目区分）で共通のオリエンテーション授業を展開すること等）が急務となっている。そこでは、これまでも実施してきたアクティブ・ラーニングをより推進する観点から、小クラス授業の実施、大人数授業におけるチームティーチングやそのためのFD研修、上級生の授業参画を促す取組を進める。なお、本学の第3期中期目標・中期計画では、指定する授業科目について平成31年度までに100%のアクティブ・ラーニングの実施を目指している。

またテーマⅣについては、まずはオリンピックをはじめ長期の国内外での国際スポーツ競技大会出場者を想定し、その学修支援のあり方や体制を平成30年度までに検討し、2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピック大会に向け準備を進める。一方、既に「スポーツ・フォー・トゥモロー」事業の一つである国際的な人的・学術交流として進めている「国際スポーツアカデミー事業」や筑波大学との連携活動であり国内一時留学である「Tsukuba Summer Institute（2週間）」に、授業期間中でも学生が参画できる仕組みや支援体制も整備する。そして、英語力検定や国際人として教養や態度を適宜評価する仕組みも検討する。

以上の教育改革の取組について、申請する本事業では、学生の学修成果の可視化を柱に、総合的に点検・評価、そして改善できるように学長のリーダーシップの元、計画的・継続的に進め、社会に寄与できる実践的かつ創造的なスポーツリーダーを輩出する。



Ⅲ. DO：取組

(出典：大学教育再生加速プログラム（AP）平成 28 – 31 年度実施状況報告書より)

1. 平成 28 年度から令和元年（平成 31 年度）までの進捗状況の概要

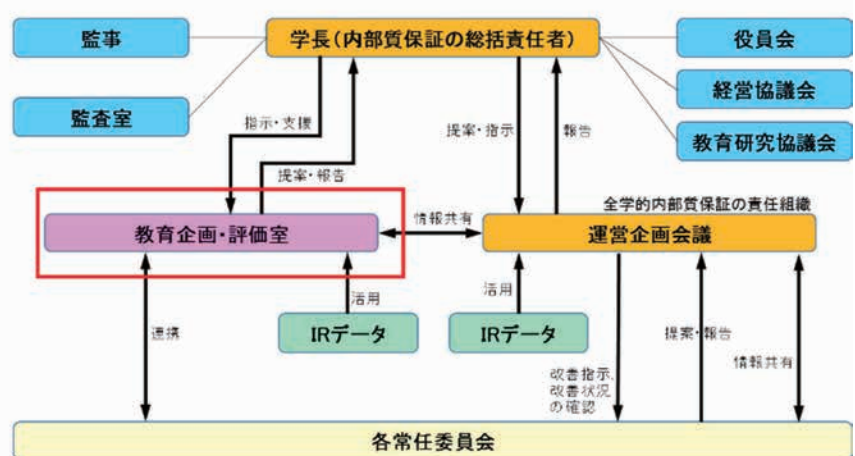
(1) 大学改革の加速

本事業では「卒業時における質保証の取組の強化」を全学的に行うものである。特に、DP を担保する「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」と「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力（汎用的力）の養成」の状況を、学修行動や学修成果の可視化から確認し、継続的に教育改善が行える教学システムを確立することを目指している。

本事業の取組の中心は、教育企画・評価室が担い、関係委員会等と連携しながら教学担当副学長の傘下で進めてきた（p17 参照）。これまでの取組や教育改善の素早い意識決定をするために、令和元年度からは学長の傘下とすることを検討し、教学の内部質保証に関わる組織として位置づけられることとなった（右図参照）。

また、教育の質保証を確かなものとするために、下記の取り組みを行ってきた。

鹿屋体育大学内部質保証体制図



- 【1】 科目群毎や DP で目指す 12 の資質・能力に関する授業科目の GPA を可視化すること
- 【2】 標準化された「汎用的能力テスト（PROG テスト）」を柱とした学修成果を可視すること
- 【3】 基礎的なスポーツ指導力の学修成果を可視すること
- 【4】 学修行動、学生生活や運動部活動の教育的効果を可視すること

これにより、令和 3 年度からの新教育課程の構築に向けた改訂作業を学生の実情を踏まえたエビデンスベースで行えるようになった。例えば、4 年次の 11 月から 2 月の卒業研究を仕上げる学びを通じて、学生の課題解決力等の急激な成長を確認し、その卒業研究の学修効果や課題について把握できた（p32 参照）。

また、可視化した学修成果を学生自身で振り返る学修ポートフォリオの構築（NIFSpass）（p31 参照）や DP を意識した授業振り返りアンケートへの改編作業（p24 参照）は、学生及び教員へ授業科目と DP で目指す学修成果との関係を強く意識づけさせることに繋がった。

加えて、卒業時及び卒業後（卒業後 3 年と 10 年）の学生に対しても、学修成果に対する満足度等の調査を継続できる体制を整備するとともに、その情報を教育改善にも反映させるようにした（p38 参照）。

まだまだ達成すべき課題や改善課題は残るが、以上のように AP 事業を通じて「卒業時における質保証の取組の強化」を継続的に実施しえる環境や体制を整備でき、大学改革は加速している。

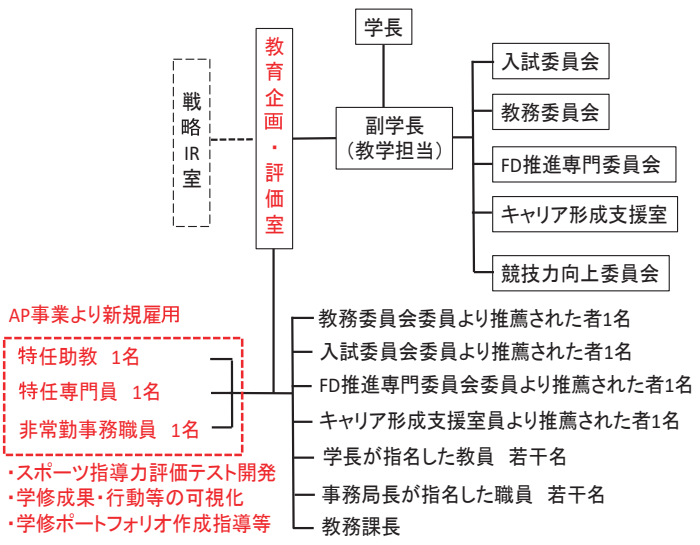
(2) 事業の実施体制

本事業は、教育企画・評価室が中心となり、教務委員会等の既存委員会との連携で教育改革を進めるようにしている。構成員は、関連委員会の委員長を柱に構成している（別添資料参照：構成員一覧）。また、学長懇談会等を通じて多くの教員に本事業の取組やその成果についても報告し、理解を得ている（学長懇談会の実施）。同時に学修成果の可視化作業においても協力を得ている。

なお、令和元年度より「運営企画会議」が全学的な内部質保証の責任組織となることにより、本事業の推進役を担う「教育企画・評価室」が学長の傘下で、継続的に教育改善が行える体制を検討・整備した（前頁の図）。

一方、本事業の評価を行うために、専門知識を有した大学教員やスポーツ指導者養成団体関係者、及び「スポーツ指導実習」の受入先のステークホルダー（民間団体・産業界等）を外部評価委員として委嘱（別添資料参照：外部評価委員一覧）し、事業計画に基づく進捗状況の確認・評価、教育の質保証に向けた取組に対する示唆を得ている。また、外部評価委員会は、平成 29 年度に 1 回、平成 30 年度に 2 回、平成 3 年度（令和元年度）に 1 回実施した（別添資料参照：外部評価委員会会議録）。

AP事業の実施体制：教学IRの強化



(3) 事業の実施計画・継続性

今後も「教育の質保証」の観点から、学長の傘下で教育企画・評価室が中心となり、学生の学修行動や学修成果の可視化を図り、継続的な教育改善に関する情報提供や提言を行う。そのためにも、令和元年度内に、「教学アセスメント・ポリシー」を策定した（下表）。

鹿屋体育大学 教学アセスメント・ポリシー 令和元年7月29日 学 長 裁 定		教学アセスメントにおいて評価及び検証する指標や調査等 令和元年7月25日 運営企画会議決定	
鹿屋体育大学体育学部では、「ディプロマ・ポリシー」に即した学生の学修到達度の向上のために、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシー）に基づき、入学前・直後、在学中及び卒業時・卒業後において、機関レベル、教育課程レベル及び科目レベルの3段階で、学生の学修到達度を評価・検証する。 評価・検証する指標及び調査等の詳細は、全学的内部質保証の責任組織である運営企画会議において別途定める。 教学アセスメントの結果は、本学の特色や現状把握、全学的な教育改革・改善、学修支援の改善、外部評価対応及びベンチマークの検討等のためにも利用する。			
アセスメントレベル	入学前・入学直後 アドミッション・ポリシーを満たす人材かどうかの評価・検証	在学中（単位認定・進級判定） カリキュラム・ポリシーに即って学修が進められているかどうかの評価・検証	卒業時（卒業後） ディプロマ・ポリシーを満たす人材になったかどうかの評価・検証
機関レベル	・新入生アンケート ・入学試験	・学生在籍状況（進級率・退学率・休学率等） ・学生生活実態調査 ・課外活動状況	・学位授与状況 ・卒業時進路状況 ・卒業時満足度調査 ・卒後調査（3・10年）
教育課程レベル	・汎用的能力テスト（PROG）[1年次] ・スポーツ指導者基礎力テスト（SCCOT）[1年次] ・英語ブレイクテスト（CASEC）	・単位修得状況 ・汎用的能力テスト（PROG）[3年次] ・スポーツ指導者基礎力テスト（SCCOT）[2, 3年次] ・英語アチーブメントテスト（CASEC） ・授業振り返りアンケート ・学修ポートフォリオ（NIFSpass）	・単位修得状況 ・汎用的能力テスト（PROG）[4年次] ・スポーツ指導者基礎力テスト（SCCOT）[4年次] ・資格・免許取得状況
科目レベル	個々の授業で行われる教育や育成される資質・能力の評価・検証	・成績評価 ・学外実習評価（学外者が付ける評価等） ・授業振り返りアンケート	

継続して可視化する事項は、【1】DPで目指す資質・能力、【2】教育に対する満足度等、【3】授業時間外での学修時間を含む学修行動（授業の取組を含む）、【4】卒業生（卒後3年、10年の者を対象とする）における大学教育の短・長期的な教育効果や満足度とする。

また、学生自身で学修成果を振り返り、改善策を考えるために構築した「学修ポートフォリオ（NIFSpass）」（p31 参照）や授業毎に行われる「授業振り返りアンケート」も継続して運用する（p24 参照）。

新たに「授業振り返りアンケート」における学生の理解度、達成度、関心度、習得満足度、全体満足度を手がかりに、令和元年度より優れた教員の授業を表彰する取組も実施する（下図参照）。

授業得点の算出手続き	
Q4.「授業理解に関する質問」 この授業の内容はよく理解できましたか。 1.大いに思う 5 2.そう思う 3 3.そう思わない 1 4.全くそう思わない 0 Q4:理解度	Q8.「授業成果に関する質問」 授業を通じて、特に身についた力がありますか（3つまで可）。 1.実技力 2.実技指導力 3.事業運営力 4.指導者基礎力 5.コミュニケーション力 6.リーダーシップ 7.キャリアデザイン力 8.課題解決力 9.一般教養・倫理 10.科学的支援力 11.科学的表現力 12.専門的な知識・教養
Q5.「達成度に関する質問」 シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。 1.十分に達成できた 5 2.ある程度達成できた 3 3.あまり達成できなかった 1 4.達成できなかった 0 5.到達目標がわからない 6.シラバスを読んでいない	Q9. 問8で選んだ身につけた能力について満足していますか。 1.十分満足している 5 2.満足している 3 3.あまり満足していない 1 4.全く満足していない 0 Q9:修得満足度
Q7.「授業への興味・関心に関する質問」 授業を通じて、この科目に関連する分野への興味や関心が高まりましたか。 1.大いに思う 5 2.そう思う 3 3.そう思わない 1 4.全くそう思わない 0 Q7:関心度	Q10.「総合評価（満足度）」 総合的に判断して、この授業は意義のあるものでしたか。 1.大いに思う 5 2.そう思う 3 3.そう思わない 1 4.全くそう思わない 0 Q10：全体満足度
各要素を合計した平均得点を求め、その25点満点中の割合を求めて、授業得点とした。	

また、これまでの教育成果や教育・学修行動の可視化情報を手がかりに、令和3年度からの新教育課程の改善・編成についての提言を行った（p38 参照）。加えて、卒業時に学生の学修成果を総括する「卒業時学修到達レポート（仮称）」を作成・配布するために、令和2年度を通じて検討する。

なお、本取組で必要な経費（学外テストの実施や専門職員の雇用等）の一部は、学内予算を活用し、補助事業打ち切り後の経費確保の準備を進めている。

（4）事業成果の普及

本事業における本学の教育の質保証の取組は、定期的にホームページ等を通じて公表している。他の大学等で参考になる事業成果としては以下の二つがあげられる。

一つは、開設授業科目と DP で目指す資質・能力の対応関係を明らかにしたことで、DP で目指す資質・能力の修得度を授業科目の成績評価を手がかりに可視化したことである。これにより、教育と学修とを密接に往還させ、学修・教育の改善を円滑に図ることが出来た（p21 参照）。

もう一つは、スポーツ指導力の可視化の一環として「スポーツ指導力に関わるプロフィール型テスト（通称：SCCOT）」を開発したことである（p25 参照）。SCCOT は、現在日本のスポーツ界が目指している「プレイヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断スキル」を測るものである。このスキルが高く判定されるほど、昨今スポーツ界で問題視されている体罰等について、「体罰は指導に有効ではない」「スポーツ指導に体罰は必要ない」という態度を強く持っていることがわかるようにしている。本学では、この行動・判断スキルをスポーツ指導力（者）の基礎力として捉え、学生の学びの成果や教育効果としてテスト結果を提示している。現在は、他の体育系大学やスポーツ競技団体等と協力して、本テストの試験の実施やスポーツ指導者のための適性判断などにも活用できるように、環境整備を進めている。SCCOT の普及により、スポーツ指導者の資質・能力の可視化、さらには、倫理観のある（暴力・体罰等を行わない）スポーツ指導者の研修や養成が可能となると考えている。

なお、最終年度には、これまでの取組と成果、今後の改善点を報告書にまとめ、情報発信する。

(5) 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

本事業では「卒業時における質保証の取組の強化」を図るために、入学時から卒業時までの学生の学修成果（満足度・修得度を含む）や学修行動の可視化とそれを手がかりにした学修・教育改善を中心に取り組んできた。その結果、教学の内部質保証を確認・改善できる体制や環境を整備することができた。令和元年度には、AP、CP、DPを手がかりに全学レベル、教育課程レベル、科目レベルを考慮した教学アセスメント・ポリシーを整備した（p17 参照）。

今後は、教学システムの大規模な更新作業を通じて、手作業による教学データの集約を少なくし、より学生個人データの管理を効率的かつ分析・評価できる体制・環境整備を行う予定である。

2. 本事業における達成目標と事業内容の状況

① 3つのポリシーに基づく教育活動の実施

テーマにおける必須指標 (各大学等の任意指標)	H28		H29		H30		R1	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
学生の授業外学修時間	5.0h /週	5.2h /週	6.0h /週	2.8h /週	7.0h /週	6.3h /週	8.0h /週	6.6h /週
事業計画に参画する教員の割合	90% (56人 /62人)	97% (60人 /62人)	90% (56人 /62人)	90% (56人 /62人)	90% (56人 /62人)	93.2% (55人 /59人)	90% (56人 /62人)	97% (57人 /59人)
「大学教育に満足している」 学生の割合	60% (464人 /773人)	87.7% (678人 /770人)	70% (541人 /770人)	93%以上 (61科目 対象)	80%以上 (618人 /770人)	96.2% (213科目 対象)	90%以上 (696人 /770人)	96.3% (216科目 対象)
学修ポートフォリオの利用率	50% (387人 /773人)	0% (0人 /773人)	75% (578人 /770人)	81.8% (455人 /556人)	90% (693人 /770人)	90.1% (675人 /748人)	95% (732人 /770人)	93% (710人 /766人)

- ・注1：「大学教育に満足している」学生の割合は、1回の一斉調査での把握を見直し、教育改善の状況は把握するために授業科目ごとの満足度「総合的に判断して、この授業は意義のあるものでしたか」という問いに変更して調査することとした。平成30年度授業科目の「授業振り返りアンケート」よりデータを収集した。講義・演習科目で前期95%・後期96%、実技科目では前期99%・後期99%が「そう思う」「大いにそう思う」と回答していた。
- ・注2：学修ポートフォリオの利用率は、平成29年度後期の学修成果に対して、平成30年4～6月期に在学生2～4年生が回答したものと、平成30年度前期の学修成果に対する平成30年後期の回答を集計したものである。

② 卒業段階でどれだけの力を身につけたのかを客観的に評価する仕組みの構築

テーマにおける必須指標 (各大学等の任意指標)	H28		H29		H30		R1	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
学生の成績評価 (GPA)	2.58 (平均)	2.58 (平均)	2.60 (平均)	2.62 (平均)	2.65 (平均)	2.64 (平均)	2.70 (平均)	2.72 (平均)
学修到達度調査の実施率 (汎用的能力)	75% (580人 /773人)	48% (372人 /773人)	100% (770人 /770人)	79.8% (614人 /769人)	100% (770人 /770人)	86.5% (493人 /570人)	100% (770人 /770人)	84.9% (488人 /575人)
学修到達度調査の実施率 (スポーツ指導力)	50% (387人 /773人)	25% (193人 /773人)	75% (578人 /770人)	60% (462人 /769人)	100% (770人 /770人)	67.3% (517人 /768人)	100% (770人 /770人)	90% (687人 /767人)

- ・注3：汎用的能力に関する学修到達度調査は、1・3・4年次の3学年を対象に実施した。しかし、4年次の回答者が少なく、100%とならなかった。
- ・注4：スポーツ指導力に関する学修到達度調査は、1～4年次までの全学生を対象に、本事業で開発したテストにより実施した。これも4年次の回答者が少なく目標を下回った。

③学生の学習成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発

テーマにおける必須指標 (各大学等の任意指標)	H28		H29		H30		R1	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
進路決定の割合	92% (175 人 /190 人)	92.5% (184 人 /199 人)	93% (177 人 /190 人)	96.9% (189 人 /195 人)	94% (179 人 /190 人)	95.8% (184 人 /192 人)	95% (181 人 /190 人)	95% (178 人 /187 人)

④学外の多様な人材との協働による助言・評価の仕組みの構築

テーマにおける必須指標 (各大学等の任意指標)	H28		H29		H30		R1	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
質保障に関する FD・SDの参加率	90% (56 人 /62 人)	97% (60 人 /62 人)	90% (56 人 /62 人)	90% (56 人 /62 人)	90% (56 人 /62 人)	93.2% (55 人 /59 人)	90% (56 人 /62 人)	100% (57 人 /57 人)
卒業生追跡調査の実施率	15.0% (60 人 /400 人)	0% (0 人 /400 人)	13.0% (52 人 /400 人)	18.3% (52 人 /284 人)	16.5% (66 人 /400 人)	22.6% (68 人 /308 人)	20.0% (80 人 /400 人)	22.7% (66 人 /290 人)

・注5：卒業生追跡調査は卒業後3年と10年の卒業生（400人）を対象に実施しており、調査対象者に対して郵送で案内を送付し、Web上で回答する方法での調査を実施した。

また、卒業生追跡調査の実施率について、申請時には調査の実施率を指標として設定していたが、検討した結果、調査の回答率を指標とした方が望ましいとの結論となった。これを受けて本報告書においては、卒業後3年目及び10年目の卒業生を調査対象とし、その調査回答者数を同調査対象者数（卒業後3年目及び10年目の卒業生数）で除した回答率を指標として設定したものである。

一方で、申請時に指標として記載していた同調査の実施率については、指標の継続性を考慮し、任意指標として引き続き以下のとおり設定する。

テーマにおける必須指標 (各大学等の任意指標)	H28		H29		H30		R1	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
卒業生追跡調査の実施率(a)	15.0% (800 人 /5,341 人)	0% (0 人 /5,341 人)	—	—	—	—	—	—
卒業生追跡調査の実施率(b)	—	—	6.5% (400 人 /6,111 人)	5.5% (334 人 /6,111 人)	5.8% (400 人 /6,881 人)	4.5% (308 人 /6,881 人)	5.2% (400 人 /7,651 人)	3.8% (290 人 /7,651 人)

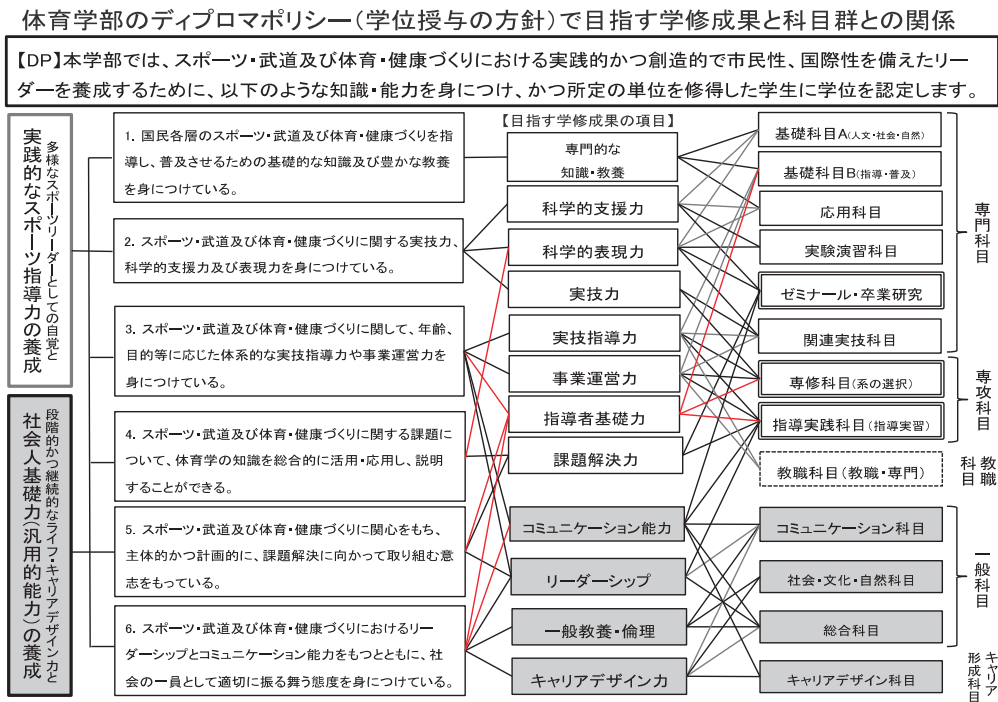
(a) 調査対象者数（卒業後3年目、5年目、7年目、10年目の卒業生数）を各年度時点における全卒業者数で除して算出した実施率

(b) 調査対象者数（卒業後3年目、10年目の卒業生数）を各年度時点における全卒業者数で除して算出した実施率

3. 各年度の取組内容・成果

(1) 平成 28 年度の取組内容・成果

本年度の成果は、教育企画・評価室の構成員増や I R 機能の強化を図ったことで、ディプロマ・ポリシーやカリキュラムマップを教職員及び学生により理解できるように再整備することができた。特に、学生が理解しやすいように、本学のディプロマ・ポリシーの 6 項目を、学生が身に付けるべき 12 個の資質・能力（学修成果の項目）と関連づけて下図のように再整理した（下図表参照）。



DPで目指す12の資質・能力

DPで目指す資質・能力	解説
専門的な知識・教養	スポーツ等の指導者やリーダーに求められる基礎的・応用的な知識ならびに幅広い教養のこと。
科学的支援力	アスリートへの科学的サポート、生涯スポーツにおける健康科学的サポートを行うことができる仮説・企画力、実験・調査力、分析・考察力、説明力を総合した資質・能力のこと。
科学的表現力	スポーツ等の専門的な知識・教養を総合的に活用し、論理的にレポート・論文等を作成できるとともに、他者に伝えるように表現できる資質・能力のこと。
実技力	スポーツ、武道、健康づくりの運動等を自ら学び、その習得・改善過程を理解しながら目指すパフォーマンスを達成することができる(模範できる、身体表現できる)資質・能力のこと。
実技指導力	スポーツ等の指導を行うことが出来る示範力、評価力、処方力、コーチング力等を総合した資質・能力のこと。
事業運営力	市民の健康・体力づくり等をコーディネートし、スポーツクラブ等の事業運営やプログラム開発を行うことができるプログラム等開発力、プログラム等運営力、事業コーディネート力、組織・施設マネジメント力を総合した資質・能力のこと。
指導者基礎力	指導をする相手(プレーヤー)の意思を尊重しながらも、プレーヤーの人間性・関係性・有能さ・自信を育てる指導をするための基礎的な資質・能力のこと。
課題解決力	本質的な問題を発見し、解決策を考え、計画し、それを実行、成果がでるまでPDCA サイクルを円滑に回し、課題解決に向けた取り組みを実施できる資質・能力のこと。
コミュニケーション力	「一方的に意思を伝達する」だけでなく、異なる意見や感性を持つ人々と交わり、耳を傾け、柔軟に自らの意見を変容させる「対話をする」資質・能力のこと。また、英語でのコミュニケーション力も含む。
リーダーシップ	集団に何らかの目標を設定し、集団を統率しつつ、人々の意欲を高め、成長させながら、その課題を遂行・先導する資質・能力のこと。
一般教養・倫理	社会で必要とされ、身につけていることが望ましい基本的な知識や物事の良し悪しを判断し、人として守るべき秩序を守る資質・能力のこと。
キャリアデザイン力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関係を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に拾捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく資質・能力のこと。

また、教職員及び学生に対し NIFS-AP News 等で周知したことにより、本学が目指す教育改革の方向性に関する情報を共有できるようになった（別添資料参照）。

本事業により、日本体育協会〔現 日本スポーツ協会〕や日本スポーツ振興センター、日本体育大学とともに検討（別添資料参照）した結果、次年度に新たな「スポーツ指導者の指導力等の客観的評価テスト」を開発する目処を得た。これにより、学生が大学で身につけるべき実践的スポーツ指導力の構造をより具体的に明示することができるようになった。

（2）平成 29 年度 of 取組内容・成果

① 3 つのポリシーに基づく教育活動の実施

本年度の大きな成果は、DP で目指す 12 の資質・能力と授業科目との紐付け作業を行った点である（下図参照）。これにより、各授業科目の学びと DP で目指す 12 の資質・能力との関連付けを、授業者である教員がより意識するようになった。

大分類	中分類	科目	実技力	実技指導力	事業運営力	指導者基礎力	コミュニケーション力	リーダーシップ	キャリアデザイン力	課題解決力	一般教養・倫理	科学的支援力	科学的表現力	専門的な知識・教養
記入例 運動学概論						●				○				●
一般科目	コミュニケーション科目	英語Ⅰ（基礎①）					●				●			
		英語Ⅰ（基礎②）					●				○			
		英語Ⅰ（初級A）					●				○			
		英語Ⅰ（初級B）					●				○			
		英語Ⅰ（初級C）					●				○			
		英語Ⅰ（中級）					●				○			
		英語Ⅱ（基礎①）					●				○			
		英語Ⅱ（基礎②）					●				○			
		英語Ⅱ（基礎A）					●				○			
		英語Ⅱ（基礎B）					●				○			
		英語Ⅱ（基礎C）					●				○			
		英語Ⅱ（中級）					●				○		●	
		上級英語					●				○			
		英語コミュニケーションⅠ（基礎①）					●				○			
		英語コミュニケーションⅠ（基礎②）					●				○			
		英語コミュニケーションⅠ（初級A）					●				○			
		英語コミュニケーションⅠ（初級B）					●				○			
		英語コミュニケーションⅠ（初級C）					●	○			●			

また、平成 30 年度からの授業科目シラバスで、DP で目指す 12 の資質・能力うち、主にどの資質・能力が身に付くかを表示し、学びの方向性を提示できるようになった（資料 3）。

さらに、成績評価の通知書で、DP で目指す 12 の資質・能力の各 GPA を算出し、学修成果の可視化を図れた点といえる（下左図：成績評価の通知表、下右図：各資質・能力等のポイントの算出方法）。

ID:82811

令和5年03月23日

科目群ごと・DPで目指す学修成果ごとのGPA

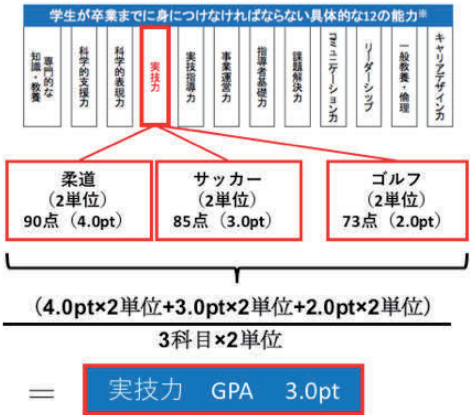
学生番号	●●●●●●	所属	学部	体育学部	スポーツ総合課程	入学年月日	平成22年04月06日
氏名	●●●●●●	入学年度	平成27年度			卒業	平成31年03月25日
		指導教員	●●●●●●				

区 分	累積GPA		
	個人平均	学年別平均	課程別平均
一般科目			
コミュニケーション科目	1.83	0.00	0.00
社会・文化・自然科目	2.62	0.00	0.00
総合科目	2.25	0.00	0.00
キャリア形成科目	3.50	0.00	0.00
専門科目			
基礎科目①	2.33	0.00	0.00
基礎科目②	3.00	0.00	0.00
応用科目	3.00	0.00	0.00
実験実習科目	2.00	0.00	0.00
関連実習科目	2.50	0.00	0.00
ゼミナール（卒業研究）	3.50	0.00	0.00
専攻科目			
専修科目	3.27	0.00	0.00
指導実習科目	2.33	0.00	0.00
教職科目			
教職	4.00	0.00	0.00
専門	0.00	0.00	0.00
全 体	2.73		

DPで目指す資質・能力	累積GPA		
	個人平均	学年別平均	課程別平均
実技力	3.08	0.00	0.00
実技指導力	3.00	0.00	0.00
事業運営力	3.33	0.00	0.00
指導者基礎力	3.16	0.00	0.00
コミュニケーション力	2.45	0.00	0.00
リーダーシップ	3.60	0.00	0.00
キャリアデザイン力	3.50	0.00	0.00
課題解決力	3.33	0.00	0.00
一般教養・倫理	2.56	0.00	0.00
科学的支援力	2.83	0.00	0.00
科学的表現力	2.79	0.00	0.00
専門的な知識・教養	2.63	0.00	0.00

● 個人平均GPA
 ○ 学年別平均GPA
 ■ 課程別平均GPA

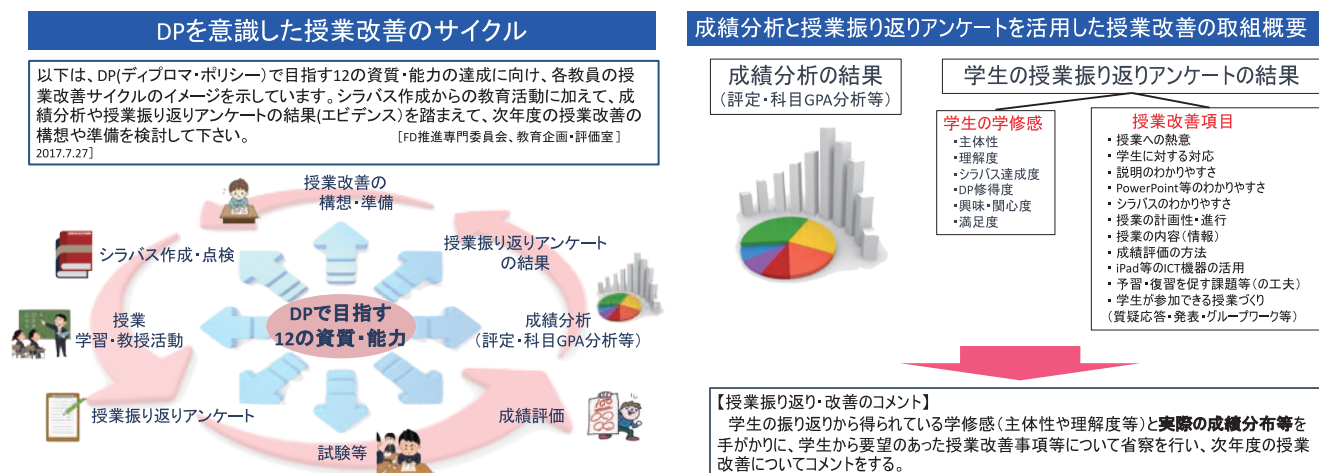
● 個人平均GPA
 ○ 学年別平均GPA
 ■ 課程別平均GPA



(資料3)

授業科目名	運動学概論		授業形態	講義		授業科目区分	専門科目 (基礎科目B)		
担当教員名	金高 宏文					補助担当者名			
単位数	1 単位		履修年次	2 年次		受け入れ人数	160名程度		
授業の概要	運動を教える者と学ぶ者とが共有する場の現象は、自然科学の客観的な方法だけでは捉えられない。運動の世界は、人間の視覚や聴覚、体性感覚などが融合された共同主観性世界（動感）と物理・生理・生化学的な客観的事実として形成されている。運動学とは、感覚（主観）的な運動意識現象を現象学的に動感と動感形態の省察から捉えようとしたものであり、効果的な運動指導のために欠くことのできない実践的な運動理論を提供している。本講義では、運動学の主な内容を概括するとともに、受講生自身が発生・習熟した運動技能を振り返り、かつ今後の運動の発生・習熟を展望しながら、運動を理解し、指導するための実践能力の基礎を育成する。								
授業の到達目標 及び成績評価の 方法	授業の到達目標			成績評価の方法					
	DPで 目指す 資質・ 能力	実技指導力、指導者基礎力、専門的な知識・ 教養 (課題解決能力)	授業期間				定期 試験	その他	割合 %
			授業	テスト	レポート	発表			
				○	○				
				○					
■認知的 領域	・運動の発生・習熟に関する理論の概略について説明できる。 ・自分自身の動感の構造分析、発生分析できる。		○					68	
■情意的 領域	・運動に関わる事象や理論について興味・関心を持ち、それを積極的に受講生同士で協力して探求する。		○					32	
□技能的 領域									
成績評価の基準	毎時間、WebClassを用いて、授業ワークを行う（学修カルテに入力する）。そのため、iPadもしくはPCを持参すること。ワーク課題は、書き込み度で評価する。また、授業内容等の理解は、2回の課題レポートに対する達成度を基に評価する。								
テキスト、教材 参 考 書	iPadを持参すること。授業に必要な資料は、「WebClass」よりダウンロードすること。参考図書として「教師のための運動学・運動指導の実践理論（金子・吉田・三木編：大修館，1996，@2,060円）」、「新しい体育授業の運動学（三木四郎：明和出版，2005，@2,000円）」、「スポーツ運動学-身体知の分析論（金子明友：明和出版，2009，@3,400円）」「器械運動の動感指導と運動学（三木四郎：明和出版，2015，@2,200円）」「スポーツ運動学入門（金子一秀：明和出版，2015，@2,200円）」を推薦する。								
履修条件・ 関連科目	講義室収容人数の関係から1年生の受講は認めない。トレーニング科学概論、スポーツトレーニング実践論を履修しておくことが望ましい。		備考(教員メッセージ含む)		・将来、スポーツや武道に積極的に関わろうと考えている学生の受講を望む、 ・毎時行なう作業問題は、授業開始と同時に実施するので、遅刻しないこと。				
オフィス・アワー	火曜日 15：00-16：00 大学院棟3 階 教員室4								
授業計画									
回	担当教員名	授業内容				授業時間外の指導等 (予習、復習、レポート等課題の指示)			
1	金高 宏文	オリエンテーション：運動指導に求められる理論を知る。運動、運動学とは…				WebClassで授業内容の復習（15分）			
2	〃	運動構造論：運動学習の段階・位相論-運動の動作と動感／運動の発生と習熟				WebClass で授業内容の復習と1回目レポート作成に向けて準備（30分）			
3	〃	運動分析論1：動き（動感）を分節し、構造分析する。				WebClassで授業内容の復習と1回目レポート作成に向けて準備（30分）			
4	〃	運動分析論2：運動形態（フォーム・動作等）の図形的違いを比較分析する。				1 回目レポート（20点）提出とWebClass で授業内容の復習（15分）			
5	〃	運動分析論3：運動質の評価カテゴリーを用いて動感形態（フォーム・動作等）を分析する。				WebClass で授業内容の復習と2 回目レポート作成に向けて準備（30分）			
6	〃	運動転移論：新たな運動感覚（動感）を導く練習・指導の組立て方				WebClass で授業内容の復習と2 回目レポート作成に向けて準備（30分）			
7	〃	運動発達論：誕生から大人になるまでの運動発生と習熟の軌跡				WebClass で授業内容の復習と2 回目レポート作成に向けて準備（30分）			
8	〃	補足及びまとめの小テスト（8点）と授業評価				2 回目レポート（40 点）提出			

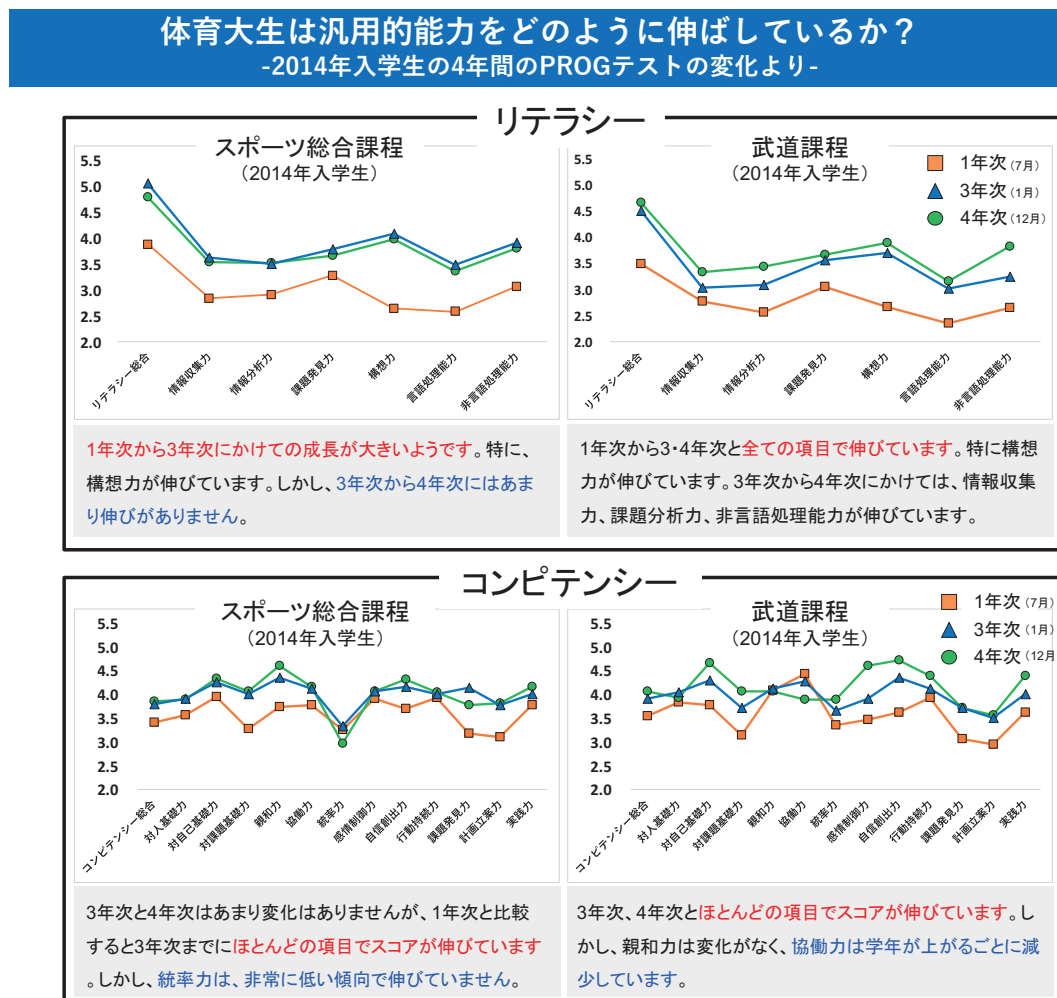
一方、学生行動等の調査法の問題についても検討した。これまで学生の大学教育の満足度や授業外の学修時間の調査は、年1回の一斉質問紙調査で行っていた。しかし、その数値の信頼性が担保できないことと改善事項が漠然としていることから、教育の最小単位である授業科目を基本に学生の学修行動等を把握するように調査方法を変更した。具体的には、授業法を専ら評価してきた「授業評価アンケート」を学生の主体的な学び、理解度、達成度、満足度と教員の授業法の改善事項をも含む「授業振り返りアンケート」へと改訂し、その科目における授業外学修時間や満足度から全体的な把握をするようにした（下図参照）。



用的能力ルーブリックを用いて自己評価することで可視化することとした。

一方、スポーツ指導力の可視化については、本取組で開発を目指している「スポーツ指導力に関わるプロフィール型テスト」等により進めている。

(注) 平成 30 年度に「卒業研究」の教育効果を把握するために実施時期を見直し、4 年次 2 月に実施することとなった。



(出典・NIFS-AP News VOL.3 より 2018.5)

③学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発（資料4、5、6参照）

本取組ではスポーツ指導力の可視化の一環として「スポーツ指導力に関わるプロフィール型テスト」の開発を外部評価委員とも連携しながら進めている。テスト開発では、本学学生 500 名と学外の大学及びスポーツ指導関係者 500 名にテスト開発の調査を実施した。そして、質問項目等の精選等を行い、スポーツ指導者基礎力テスト（通称 SCCOT: Sports Coaching Competency Test の略）を試作した（次頁の図、資料6参照）。

本テストは、現在日本のスポーツ界が目指している「プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断スキル」を測ろうとしている（資料4参照）。このスキルが高く判定されるほど、昨今スポーツ界で問題視されている体罰等について、「体罰は指導に有効ではない」「スポーツ指導に体罰は必要ない」という態度を強く持っていることがわかるようにしている（資料5参照）。本学では、この行動・判断スキルをスポーツ指導力（者）の基礎力として捉え、学生の学びの成果や教育効果として提示する予定である。また、その他の体育系大学やスポーツ競技団体等においても、本テストがスポーツ指導者のための適性判断などにも活用できるよう、環境整備を進めている。

SCCOT

SPORTS COACHING COMPETENCY TEST

問題・解答用紙

1. 利用目的
SCCOTを別に記し、提供された個人情報の利用目的は以下のとおりです。利用目的以外では、使用しません。
・ SCCOT予行試験の配布
・ SCCOT受験案内
・ 採点業務
・ SCCOTの品質維持・商品開発のための基礎資料
・ 採点・作成に関する研究の基礎資料
・ 本試験の成績を算出するための成績簿の作成、またそれに関する開示分析

2. 個人情報の取扱い
個人情報の提供は任意です。ただし、ご提供いただいた個人情報がある場合、上記の利用目的に記載の通り適正に活用させていただきます。また、ご提供いただいた個人情報は、あらかじめご了承ください。

3. 個人情報の訂正・削除
ご提供いただいた個人情報の内容について訂正・削除を希望される場合は、その旨を下記のお問い合わせ先までお知らせください。
ただし、一度提供されたSCCOTの予行試験の解答内容は訂正および削除できません。

4. 個人情報の第三者への提供
受験者の個人情報について第三者に提供することはありません。ただし、以下の場合は関係者等に提供し、必要に応じて個人情報を提供することがあります。
・ 本人に同意を得た場合
・ 法令上、本人または関係者の同意を得るために必要である場合で、本人の同意を得ることが困難な場合
・ 本人の生命・身体または財産の保護のために必要である場合で、本人の同意を得ることが困難な場合
・ 公衆衛生の向上のために特に必要である場合で、本人の同意を得ることが困難な場合
・ 本試験の成績を算出するための成績簿の作成、およびそれに関する開示分析を目的として提供することを受ける者が同意している場合

5. 個人情報の取扱いの委託
本試験の品質維持・商品開発のために、個人情報の取扱い・管理を外部委託する場合は、個人情報を適切に管理し、漏えい防止のために必要となる取扱いを徹底し、漏えい防止のための取扱いを行います。

6. 個人情報の取扱いに関するお問い合わせ先
〒100-8302 東京都千代田区千代田1-1-1 鹿屋体育大学 教育企画・評価室
電話：03-6446-5862（受付時間：10:00～17:00）（土日・祝日は受付を行いません。）
メール：kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp（SCCOT個人情報の停止を求めた場合はメールしてください。）
お問い合わせの際は必ず個人情報を記載し、お問い合わせの旨を明記する必要があります。

【問題・解答用紙は次頁からです】

【事務作業欄】

鹿屋体育大学
〒100-8302 東京都千代田区千代田1-1-1

Q10. 普段のあなたの行動、姿勢、考えは、AとBのどちらに近いですか？「Aにあてはまる」「ややAにあてはまる」「ややBにあてはまる」「Bにあてはまる」の中から1つを選んで、数字に○をつけてください。

No	A	Aにあてはまる	ややAにあてはまる	ややBにあてはまる	B	Bにあてはまる
1	起こった事実を冷静に分析して原因を考える	1	2	3	4	積み上げた経験とイメージに基づいて対応策を考える
2	目標や計画に対して効果的・生産的に時間が使えたかを振り返るより、次の練習にすべきことを考える	1	2	3	4	目標や計画に対して効果的・生産的に時間が使えたかを、定期的に振り返り評価する
3	スポーツでは、訓練を重視し、禁欲的に努力するべきだ	1	2	3	4	スポーツでは、楽しみや喜びを重視し、自発的に努力するべきだ
4	学生の特性の変化に合わせて指導方針を見直し、スタッフ全体で共有する必要がある	1	2	3	4	学生の特性の変化に左右されることなく、個々の指導者が理想とする指導方法を貫くことが大切だ
126	コーチングが上手いかわからない時は、どこに問題があったかを振り返る	1	2	3	4	指導の失敗の原因を振り返るより、次のことに目を向ける
127	過去の経験に頼って同じ指導を続けることは、指導法の進化に等しい	1	2	3	4	プレーヤーが勝手に流行のトレーニング情報を収集することはできれば避けた
128	部活動では、コーチが決めた目標をトップダウンで伝える	1	2	3	4	部活動の目標は、基本的には部員同士で決めさせるが、必要なら修正をかける

(資料 4)

本テストは、大学教育再生加速プログラム テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」の一貫として作成されたものです。[2019.2.22]
★本テストに関する問い合わせは、鹿屋体育大学 教育企画・評価室 (Mail: Kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp)

演中良・近藤亮介・金高宏文、2019/2/22作成

Sports Coaching Competency Test : SCCOT

スポーツ指導者コンピテンシーテスト：コーチング行動・判断力を可視化する

SCCOT (スコット) は、日本のスポーツ界が目指している「プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断力」を可視化するテストです。体育・スポーツに関連する教育機関や指導者養成団体では、多様で複雑なコーチング活動の中で状況に対応しながら、適切な行動判断を行える資質・能力の育成に力を注いでいます。一方で、コーチングの資質・能力の変化を把握することや、育成プログラムの改善に役立つ情報を得るための測定・評価方法については、十分に整備されていないため、本テストを開発しました。



(資料5)

SPORTS COACHING COMPETENCY TEST
SCCOT

スポーツコーチング・コンピテンシーテスト(SCCOT) 個人結果分析表

テスト	受験番号	所属	氏名	開始日時	終了日時
第●回 SCCOT定期調査 (オンライン・選択式)	●●	●大学	カノヤ サクラ	2021年2月11日 12:00PM	2021年2月11日 12:40PM

(1) コンピテンシー全体傾向

領域	No.	領域内容	今回のあなた	前回のあなた	グループ平均	領域得点(7点満点)
対課題力	1	対象とするスポーツ指導に関する知識(ルールや戦術、スキル、技術、体系的・心理的な特性なども含む)やそれに付随するスポーツ科学の知識、指導法に関する知識、スポーツの意義と価値、コーチの倫理観・規範意識等について学習・理解し、活用することができる能力のこと。	7	5	4.7	
対他者力	2	コーチとプレーヤーの関係のみならず、コーチ同士や上司との関係、プレーヤー同士の関係、プレーヤーの保護者との関係、ファンとの関係、他チームとの関係、メディアとの関係、スポンサーとの関係、協会との関係などの人間関係を円滑にしていけるために必要とされる能力のこと。	6	4	4.9	
対自己力	3	自らを適切に評価する自己認識の能力や自分の知識やスキルを向上させ続けていく能力のこと。	6	4	4.7	

(2) コンピテンシー要素別傾向

領域	No.	要素	要素内容	今回のあなた	前回のあなた	グループ平均	要素得点(7点満点)
対課題力	1	スポーツ指導の知識力	単に勝敗だけでなく、マナーや楽しみの要素、健康増進等にも価値を見出す基礎的能力のこと	7	4	5.0	
	2	情報収集・選択力	プレーヤーの状況に応じて必要な情報を収集・選択し、目的や意図を明確にし、分かりやすく伝える能力のこと	7	6	4.9	
	3	学習に関する知識力	種目や分野を限定しない幅広い情報収集、アイデアの記録、迅速なトライ&エラーの反復等の学ぶ能力のこと	5	5	4.6	
対他者力	4	自律性支援行動力	プレーヤー個々人の取り組みに対して適切な評価・対応を行い、プレーヤーの主体的な行動判断を促す能力のこと	5	4	4.9	
	5	自律性制衡行動力	プレーヤーの多様性を尊重し、個々人のニーズに応じて自律したプレーヤーへと育成する能力のこと	7	4	4.8	
対自己力	6	自己認識力	プレーヤーを幸福へと導くため、自身の指導方針を必要に応じて変化させる能力のこと	5	5	4.8	
	7	省察力	感情に任せることなく、起こった出来事を分析したり、課題を解決するためにできることを考える能力のこと	6	4	4.7	

(3) コンピテンシー詳細要素別傾向

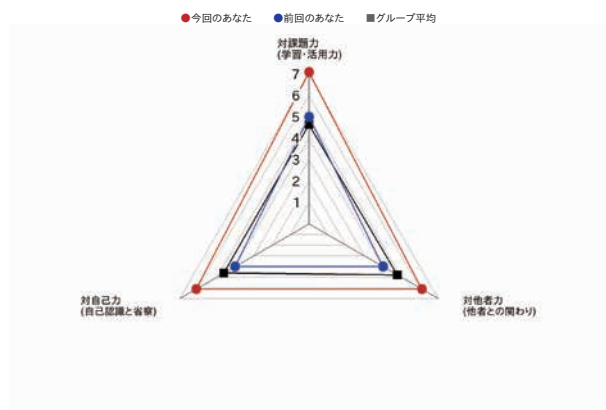
領域	要素	No.	詳細要素	詳細要素内容	今回のあなた	前回のあなた	グループ平均	詳細要素得点(3点満点)
対課題力	スポーツ指導の知識力	1	スポーツ指導に関わる科学的知識	単に勝敗だけでなく、スポーツの楽しみや健康増進、人間教育等にも価値を見出す基本的能力のこと	3	2	2.1	
	情報収集・選択力	2	正しい情報の収集・選択・加工力	多くの情報の中から本当に必要な情報や正しい情報を信頼性を確認しながら収集・蓄積し、伝える相手やタイミング・場所を見極めて、情報を理解しやすいように加工する能力のこと	3	3	2.2	
		3	状況に応じた情報の選択・発信力	指導するプレーヤーのニーズや指導するタイミング・場面に即して適切な情報を選択し、プレーヤーが理解しやすいように情報を発信する能力のこと	3	2	2.3	
	学習に関する知識力	4	学習の対象を広げる力	教育機関やテキスト等の学習目標に沿った学習(フォーマル学習)と、そうでない学習(インフォーマル学習)の両者を継続して行いながら、興味・関心を広げたり、異分野に飛び込んだりして、一見して異質だと思われるものをつなげて学ぶ能力のこと	3	2	1.9	
		5	気づきから学ぶ力	コーチングの実践現場や日常生活の場(インフォーマル学習)で、新たな気づきやアイデアが得られた時に、試みに実践してみたり、柔軟に取り入れたいことができる能力のこと	2	1	2.0	
対他者力	自律性支援行動力	6	選択肢の提示力	プレーヤーの発達段階や活動場面に応じて、一定のルール・制限を設けた上で、プレーヤーに選択肢を与える能力のこと	2	2	2.2	
		7	根拠の提示力	コーチの主観や価値観を押し付けず、プレーヤーが理解し、納得して選択肢を選ぶことができるように、課題やルール等の根拠や基準を提供する能力のこと	3	2	2.3	
		8	多様性の承認力	プレーヤーを含む他者の多様な声に耳を傾け、自分と異なる意見を許容して尊重する能力のこと	3	1	2.2	
		9	主体的な行動機会の提供力	コーチの思う型にはめることなく、プレーヤーの興味や考えを尊重して主体的な判断や行動を促す機会を提供する能力のこと	2	2	2.2	
		10	主体的判断の許容力	コーチの一方的な考えを押し付けず、プレーヤーの行動の良い点や工夫・努力している点に目を向け、プレーヤーの主体的な取り組みを評価できる能力のこと	2	1	2.3	
		11	制衡行動の回避力	意見の押しつけや間違った根拠に走らず、プレーヤーと意見を調整し、プレーヤーを理解した上で指導する能力のこと	2	2	2.4	
		12	プレーヤーの自己調達の回避力	ライバルやチームメイトとの比較ではなく、プレーヤー自身の成長や体調等の変化に目を向けさせる能力のこと	3	2	2.4	
対自己力	自律性制衡行動力	13	有形的報酬の回避力	金銭や食事等の外的な報酬ではなく、面談や話し合いの中でプレーヤーの理解に努め、内発的動機づけを高めるような個々人に応じた課題設定と支援を行う能力のこと	3	2	2.3	
		14	制衡的フィードバックの回避力	コーチの期待する行動へと方向づけるのではなく、プレーヤーの自律性や主体性を優先して支援する能力のこと	3	2	2.2	
		15	過度な個人制衡の回避力	コーチの理想や期待よりも、プレーヤーのニーズや目的を尊重する能力のこと	3	2	2.3	
		16	脅迫的な振る舞いの回避力	過度なチームやコーチへの忠誠を求めないよう、個々人の自主性を尊重し、個別の課題設定や問題解決を支援する能力のこと	2	2	2.2	
		17	自我開示促進の回避力	プレーヤー同士を露骨に比較して競争を煽るようなことはせず、個々人の人間性・技能の向上に目を向けさせる能力のこと	3	2	2.1	
		18	条件つき報酬の回避力	プレーヤーの競技力や期待の程度によって指導にかける労力や称賛等に差をつけず、別けてなく取り組みを評価し、寄り添う能力のこと	3	2	2.4	
対自己力	自己認識力	19	先入観の把握力	自分のものの見方が先入観に捉われていないか内省し、世間やプレーヤーのニーズに応える能力のこと	2	2	2.3	
		20	運動・指導経験の振り返り力	自分が受けてきた教育やスポーツ指導等を俯瞰し、それに縛られることなく、プレーヤーの幸福のために個々人にとっての成功や楽しみを尊重する能力のこと	3	3	2.1	
		21	出来事への把握力	自らの怒りや葛藤を冷静に認識して、プレーヤーの行動やチーム内での影響度合、プレーヤーやスタッフなどとの対話内容、調整内容やプレーヤーとの関係性などの出来事について、的確に把握する能力のこと	2	1	2.0	
		22	役割認識力	スポーツを通じたプレーヤーの成長支援やスポーツの魅力の向上といったコーチに課せられた役割を認識し、責任を果たそうとする能力のこと	2	2	2.1	
		23	課題設定・共有力	周りのスタッフとともにプレーヤーやチームの問題を発見し、課題を設定するとともに、共有する能力のこと	3	2	2.5	
		24	戦略生成力	コーチングに関わる課題を分析し、限られた時間の中で解決すべき事項の優先順位をつけ、時には柔軟に計画を変更しながら、エビデンスに基づいた戦略を立てること	2	2	2.0	
		25	試行力	試合やトレーニングの場面だけでなく、どのような場面や状況であっても想像力を働かせて課題に即した解決方法や手段を考案し、実際に試行する力	1	1	1.8	
		26	評価力	プレーヤー個々人にあった課題設定と自らのコーチング行動の改善のために、プレーヤーの成長、トレーニング計画と実施内容、コーチング活動等の評価を多面的かつ定期的に行い、活用する能力のこと	3	2	2.1	

「-」:集計対象外

スポーツコーチング・コンピテンシーテスト(SCCOT) 個人結果分析図

テスト	受験番号	所属	氏名	開始日時	終了日時
第●回 SCCOT定期調査 (オンライン・選択式)	●●	●大学	カノヤ サクラ	2021年2月11日 12:00PM	2021年2月11日 12:40PM

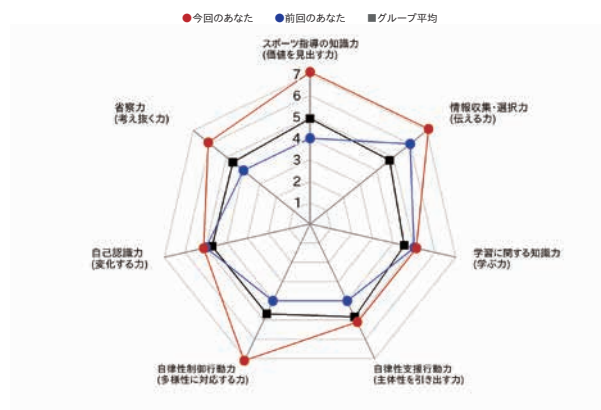
①コンピテンシー全体傾向



①の読み方

あなたのコンピテンシーにおける得意・不得意の傾向を把握してください。各領域の水準は、1～7で示されています。3つの領域の水準が全体的に低い場合や、大きくバランスが崩れている場合は、領域を定めて改善します。

②コンピテンシー要素別傾向

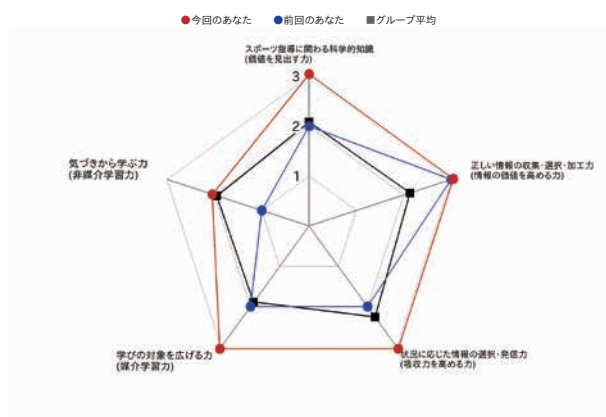


②の読み方

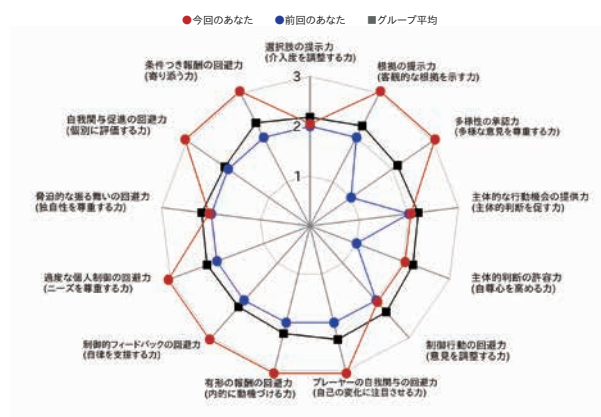
①全体傾向の領域の改善を図るには上記の要素別傾向をみます。そして1)得意要素を伸ばす、不得意要素を克服するの2つの方法が考えられます。各要素の水準は1～7で示されており、ベンチマークとなるグループの平均と比較しながら開発する要素を定めます。

③詳細要素傾向

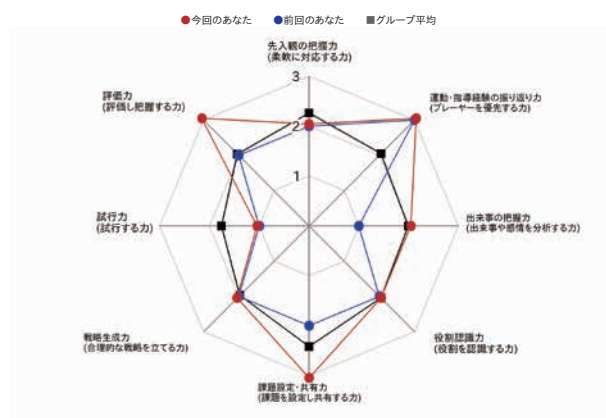
③-1:対課能力(学習・活用力)



③-2:対他者力(他者との関わり)



③-3:対自己力(自己認識との省察)



③の読み方

詳細要素は、各要素を構成する充実度が3段階で示されています。コンピテンシーは実際の経験を通じて開発・定着が進みます。不足気味の詳細要素を改善させるには、日々の指導体験の中で、如何にその内容を意識して取り組むかが鍵になります。

「プレーヤーズセンタードコーチング」を実践できる

コーチに求められる資質・能力の可視化の試み（SCCOT の開発と普及）

ここでは、プレーヤー（アスリート）を中心とし、プレーヤーの学びに対する主体的な取り組みを支援するコーチングである「プレーヤーズセンタードコーチング（以後 PCC とする）」に求められる資質・能力の可視化を目指して開発したテスト（Sports Competency Test：SCCOT）やその活用について紹介する。

なお、SCCOT は鹿屋体育大学が大学教育改革における大学教育再生戦略推進費・大学教育再生加速プログラムの補助金事業（AP 事業：平成 28-31 年度に採択）の中で開発を行っているものである。

1. PCC に求められる資質・能力の構造化（図 1）

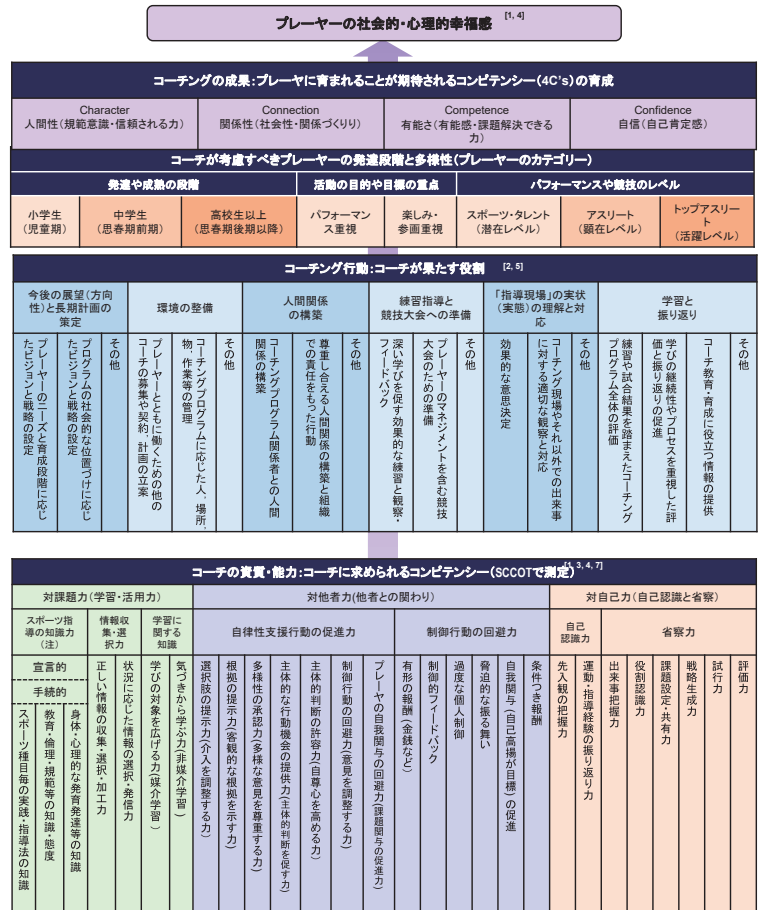
PCC で求められる資質・能力は、国際的なスポーツコーチングに関する指針や研究・研修を行っている International Council for Coaching Excellence（ICCE）が示すものに準拠して、日本体育協会

（現、日本スポーツ協会）が作成したモデル・コア・カリキュラムを柱に検討を行った。さらに、冒頭にも紹介された文部科学省、スポーツ庁、さらに日本コーチング学会の示すスポーツ指導の改革に関わる提言や論説なども考慮し、コーチングに関する国内の専門家（日本スポーツ協会、日本スポーツ振興センター、日本体育大学、筑波大学、大阪体育大学の研究者）の協力を得ながら検討を行った。

PCC の構造化では、PCC の基本となる「プレーヤーの社会的・心理的な幸福の充実」を図ることをゴールとして、モデルを構成した。具体的には、プレーヤーの社会的・心理的な幸福に貢献する、4 つの要素（4C's）を設定し、それらの要素をプレーヤー自身が育み、身につけることができるコーチングの資質・能力を明らかにすることとした。4 つの要素（4C's）とは、「有能さ（Competency）」「関係性（Connection）」「人間性（Character）」

「自信（Confidence）」のことであり、「有能さ（Competency）」はスポーツパフォーマンスの改善に大きく関わる課題解決をする力。「関係性（Connection）」はプレーヤー同士や指導者等との友好的・円滑な人間関係を構築する力。「人間性（Character）」は信頼される力。「自信（Confidence）」は自己を肯定する力とした。

以上の 4 つの要素（4C's）に影響するコーチングの資質・能力は、まずはモデル・コア・カリキュラム等を参考に、大きくは「対課題力（学習・活用力）」「対他者力（他者との関わり）」「対自己力（自己認識と省察）」の 3 項目を設定した。そして、下位の中項目として、「スポーツ指導の知識力」「情報収集・選択力」「学習に関する知識」「自律支援行動の促進力」「制御行動の回避力」「自己認識力」「省察力」の 7 項目を設定した。さらに各項目に小項目（総計 26 個）を設定した。そして、これらの PCC で求められる資質・能力の仮説モデルを手がかりに、質問紙のテストを作成した。なお、図 1 はテスト開発を通じて出来上がった最終的な PCC のモデルを示している。



【自我関与】: 他者に対して相対的に優位になることで、能力の高さを誇示し、自己を高揚させることを目標とする状態
 【課題関与】: 学習や理解を通して、能力を高めることを目標とする状態(Nicholls, 1989.)
 (注) SCCOTでは、主に、単に勝敗だけでなく、スポーツの楽しみや健康増進、人間教育力等にも価値を見出す基本的能力・態度を測定する。

図1. プレーヤー中心のコーチング(Players Centered Coaching)の構造(仮説モデル3)

2. テスト (SCCOT) の開発

PCC で求める資質・能力について評価するテストは、図1にあるような、前述で示した PCC モデルのコーチング資質・能力の小項目について、プレーヤーを主体としたコーチングを行う態度や判断をするか、しないかについての「悩ましい、判断に困る問題文」をそれぞれ作成した (図2)。「たとえ試合前でも、全ての練習をプレーヤーの主体性に任せる」と「試合前でも、基本的にはプレーヤーに練習メニューを組み立てさせるが、必要と思われるポイントだけは伝える」といった問題文を両極に設定し、選択させるというものである。小項目毎に約 10 問、全体で約 300 問、試作した。

連番	A	Aに あては まる	Aに あては まる	Aに あては まる	Bに あては まる	B
1	スポーツを通じて、創意工夫して身体技術を会得する楽しさを学ぶことができる	1	2	3	4	スポーツを通じて、厳しいトレーニングを積み重ね、達成感や粘り強さを学ぶことができる
2	スポーツは、競い合い、勝利することが重要だ	1	2	3	4	スポーツは、勝ち負けよりも、楽しむことが重要だ
3	何かを身につける際には、興味の範囲をできるだけ広げ、多くの学びの中から気づきを得る	1	2	3	4	何かを身につける際には、学びの対象を明確にし、関連する書籍や研修を慎重に取捨選択する
4	たとえ試合前でも、全ての練習をプレーヤーの主体性に任せる	1	2	3	4	試合前でも、基本的にはプレーヤーに練習メニューを組み立てさせるが、必要と思われるポイントだけは伝える
5	プレーヤーと共に到達目標を明確にし、その進捗を話し合う	1	2	3	4	プレーヤーの特性を把握し、到達目標を提示し納得させる
6	「今日は個人で技術的な練習をしたい」というプレーヤーには、チーム全体への貢献意識が低すぎると注意する	1	2	3	4	「今日は個人で技術的な練習をしたい」というプレーヤーには、目的さえ明確なら自由に行動させる
7	過去の経験に頼って同じ指導を続けることは、指導法の退化に等しい	1	2	3	4	プレーヤーが勝手に流行のトレーニング情報を収集することはできれば避けたい
8	方向性が見えれば、話の途中でも論点を整理して自分の意見を言う	1	2	3	4	プレーヤーの意見を十分聞いてから、一緒に考えるようにする

図2. SCCOTの両側選択形式の問題例

次に、試作したテストが「プレーヤーを中心(主体)としたコーチングを行う態度や判断」を有しているかを判定できる採点法を構築する必要がある。そのために、体育系大学生や一般の指導者の約 1,000 人 (本学卒業生約 90 人を含む) に対して試作したテストを実施した。調査対象者が指導するプレーヤーは、中学・高校の部活動生、一流のアスリート、高齢者も含まれる健康作りの参加者、多様なニーズや年齢層であった。試作テストは、体罰を容認しないで「プレーヤーを中心(主体)としたコーチングを行う態度や判断」を行うという判定項目を選択した指導者の回答を手がかりに、統計分析により問題文の正答を決定し、300 問の問題文の取捨選択を行った。その結果、128 問まで問題文を削減した。問題文の正当の決定では、ICCE や日本スポーツ協会が目指す理想的なコーチ像である PCC を担保する回答をした指導者の回答を手がかりに採点基準を設定した。それ故、従来の一つの評価基準である「優れたパフォーマンスを達成したアスリートを輩出した」という指導者の回答を正答としなかった。

採点法の決定後、試作テストに回答した指導者等に、テスト結果 (報告書) を返却した。同時にテスト結果の納得度についてアンケートしたところ、回答者の 8 割で PCC を目指したコーチング態度や判断力の評価結果に共感が得られた。このことは開発した SCCOT に実用性があることを示唆している。

なお、テスト作成時に小学生を指導するスポーツ少年団の指導者のデータが小数であり、テストの活用範囲を考える上で今後の課題として残っている。

3. 主体的に学ぶプレーヤーを育むコーチングを考える

プレーヤーを中心(主体)としたコーチング (PCC) を身につけ、さらに資質・能力をブラッシュアップするには、SCCOT のような PCC の態度や判断力の評価ツールを手がかりに現状 (改善点) を可視化して把握し、改善を試みる必要がある。図1 で示した PCC を目指したコーチングのモデルの小項目は、研修や指導を考える大きな手がかりになると考える。

また、プレーヤーが主体的に学ぶコーチング (PCC) を考えるとき、新しい学習指導要領の考え方も、非常に参考になると考える。新しい学習指導要領では、PCC と同じような「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を促すことが求められている。そして、そのような学びができていくかについて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「態度」の観点から評価する。4つの観点を PCC やその研修で思考のフレームワークとして持つことが出来れば、プレーヤーと円滑なコミュニケーションを取りながら、主体的で深い学びへと導くことができるのではと考える。技能は「〇はできましたか」、知識は「〇は分かりましたか」、思考・判断・表現は「〇はどのようにしてできましたか」、態度は「〇は今後どうしますか」といった言葉がけをすることで、プレーヤーの主体性を高めることができるのではないだろうか。

さらに、コーチング行動の一つである「ほめる」と「認める」、「叱る」と「怒る」などといったことについても、プレーヤーの行った行動が「意識的か」「意識していなかった(無意識か)」によって使い分け、プレーヤーの主体性が保持されるように配慮することが重要と考える。

文責：金高宏文 (鹿屋体育大学・教育企画・評価室長)

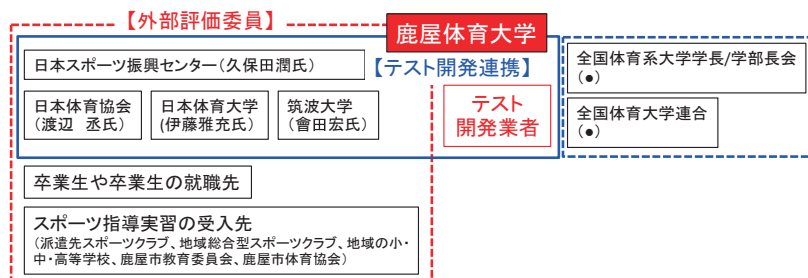
(資料 6)

④学外の多様な人材との協働による助言・評価の仕組みの構築

教育効果を把握するために、卒業後3年目と10年目の卒業生に対して Web 調査を実施した。回答率は高いものではなかったが、有益な示唆が得られた (p35 の図参照)。大学在学中の教養養育の充実やリーダーシップ力の養成などへの期待が明らかになった。このような卒業生への卒業後調査は、来年度以降も継続して実施するとともに、卒業生との関わり環境の整備（住所等の管理）をより充実させることとした。

一方、スポーツ団体や体育系大学の識者からなる外部評価委員会を開催し、本学の教育やその成果の可視化、さらには開発するスポーツ指導力の可視化テストのあり方についての助言を得た。

特に、実技力の評価のあり方についての有益な示唆が得られた。



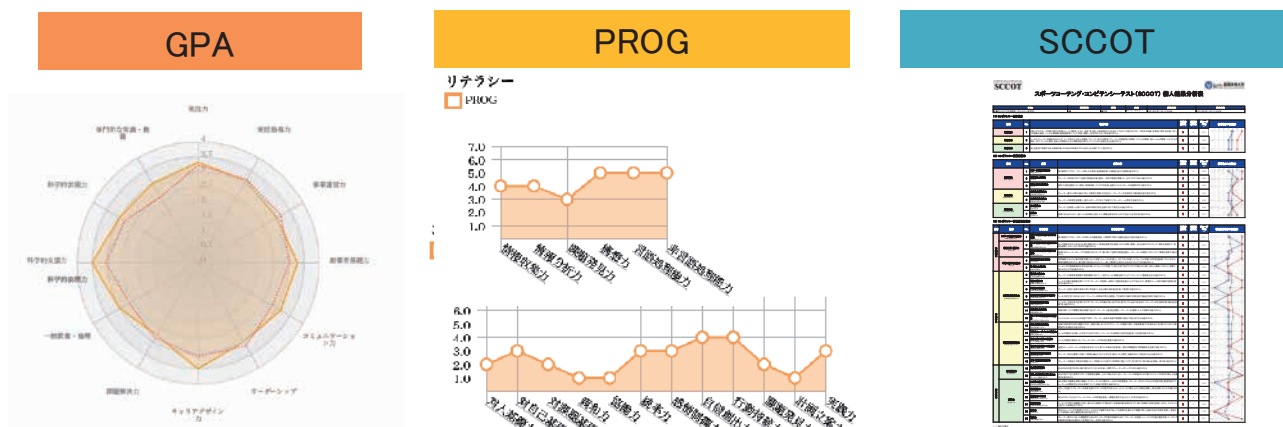
(3) 平成 30 年度の実施内容・成果

① DP で目指す 12 の資質・能力と授業科目との関連性の強化と学修支援及び教育改善

授業科目群（科目区分）毎及び DP で目指す 12 の資質・能力毎の GPA を可視化したことで、学生は授業科目と学修成果との関係を意識することができるようになった。さらに、構築した Web 学修ポートフォリオ NIFSpass を活用して、自己の学修の振り返りや改善を学期毎に継続して実施するようにした（下図参照）。



NIFSpass : 学修ポートフォリオシステムの構築



さらに、授業科目毎に実施される「授業振り返りアンケート」から、学生自身が履修した授業科目から DP で目指す 12 の資質・能力の「何を修得したのか」も振り返るようにし、関係性の意識づけを強化した(p23 参照)。

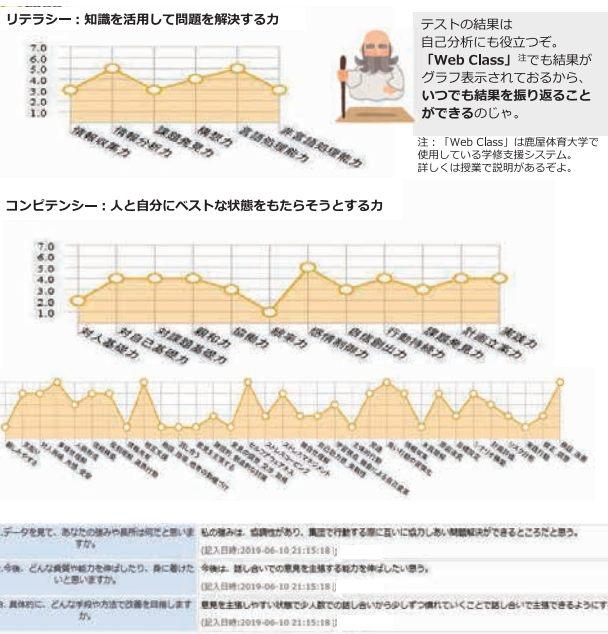
一方で、授業担当者に対して学生が感じている DP で目指す 12 の資質・能力の修得度をフィードバックし、授業改善の一助とした(下図は、科目群(科目区分)の修得度感の平均値を示している。赤丸は各授業科目群(科目区分)で主に身につけることが期待されている資質・能力を示している。)

DPで目指す12の資質能力についての学生自身の修得度感 (H29年度)

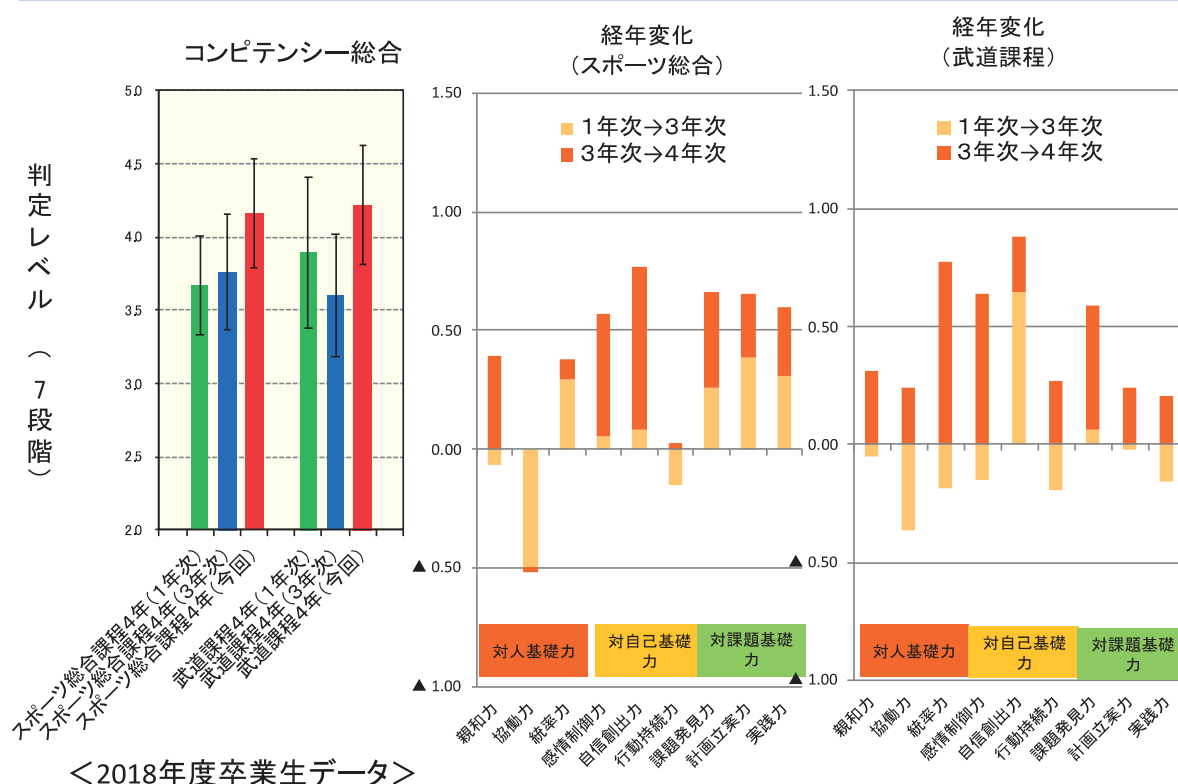
大分類	中分類	実技力	実技指導力	事業運営力	指導者基礎力	コミュニケーション	リーダーシップ	キャリアデザイン力	課題解決力	一般教養・倫理	科学的支援力	科学的表現力	専門的な知識・教養
一般科目	コミュニケーション科目					●				●			
		20%	6%	1%	3%	66%	1%	3%	11%	32%	0%	0%	36%
	社会・文化・自然科目					●				●			
		8%	4%	2%	4%	15%	1%	3%	10%	47%	1%	2%	63%
	総合科目					●				●			
		30%	5%	8%	2%	15%	5%	7%	21%	30%	3%	3%	48%
キャリア形成科目	キャリアデザイン科目					●		●		●			
		22%	3%	1%	3%	46%	3%	43%	10%	22%	0%	0%	28%
専門科目	基礎科目A												●
		12%	6%	3%	7%	6%	2%	3%	8%	31%	3%	3%	70%
	基礎科目B				●								●
		20%	15%	3%	14%	11%	4%	4%	12%	20%	4%	3%	64%
	応用科目												●
		17%	8%	12%	13%	16%	2%	6%	19%	18%	3%	4%	64%
	実験演習科目										●	●	●
		27%	3%	0%	6%	17%	0%	0%	22%	17%	14%	16%	81%
	関連実技科目	●	●										
		87%	32%	4%	11%	28%	5%	2%	10%	5%	0%	1%	30%
	専修科目	●	●	●	●								●
		50%	38%	13%	22%	32%	7%	3%	16%	9%	1%	1%	55%
	指導実践科目		●		●								●
	(スポーツ指導実践概論)	9%	22%	3%	54%	27%	6%	11%	22%	23%	2%	4%	24%
教職科目	教職科目				●					●			●
		9%	11%	3%	25%	14%	4%	2%	11%	35%	1%	2%	57%
	教職専門科目			●	●								●
		22%	32%	6%	38%	41%	5%	2%	11%	17%	1%	1%	37%
★授業振り返りアンケートをしていない授業科目													
	スポーツ指導実習		●	●	●	●	●						
	ゼミナール・卒業研究					●			●		●	●	●
	教育実習				●	●							

また、「汎用的能力テスト (PROG テスト)」の結果の学年進行に伴う変容を可視化したことで、学生が自らの社会人への成長を意識することができるようになり、学修の振り返りや改善に係る検討を行えるようになった(右図参照)。

なお、4 年次に対する「汎用的能力テスト (PROG テスト)」は、前年度 12 月に実施した。その結果、汎用的能力に大学 3 年後期(12 月)と大学 4 年後期(12 月)で大きな伸びが認められなかった。そこで、「卒業研究」の教育効果を把握するために実施時期を見直し、4 年次 2 月に実施した(2015 年度入学生を対象)。その結果、4 年次の 12 月から 2 月の卒業研究を仕上げる学びを通じて、学生の課題解決力等の急激な成長を確認し、その卒業研究の効果や課題が把握できた(次頁の図参照)。このことから、当該テストは 1 年次 4 月、3 年次 12 月、4 年次 2 月に実施することで、学修成果を把握できることが明らかになった。



汎用的能力の可視化(1年次から4次までの変化)

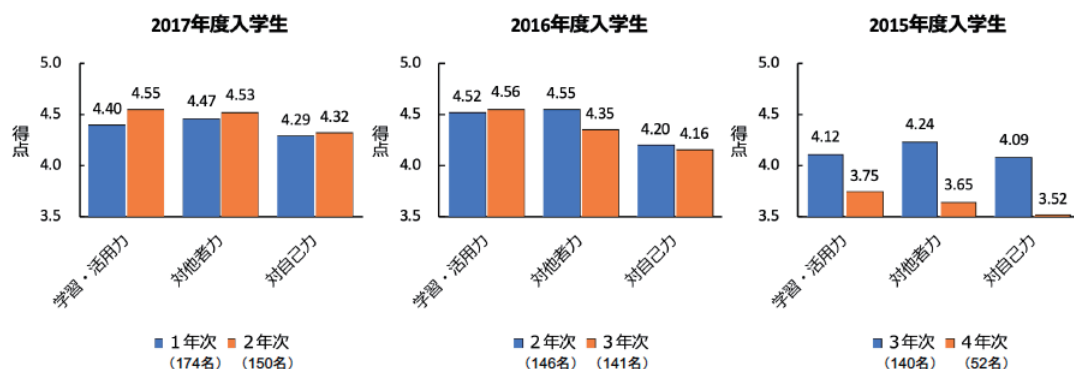


②開発した「スポーツ指導力基礎力テスト (SCCOT)」の運用と普及

SCCOT は、現在日本のスポーツ界が目指している「プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断スキル」を測ろうとしている。このスキルが高く判定されるほど、昨今スポーツ界で問題視されている体罰等について、「体罰は指導に有効ではない」「スポーツ指導に体罰は必要ない」という態度を強く持っていることがわかるようにしている。SCCOT は、指導プロフィールを明らかにするばかりでなく、テストに回答することで学生自身のスポーツに対する倫理観や価値観について自己反省や啓発を促している。本テストは、1年次11月、2～4年次1月に実施した(次頁の図参照)。

その結果、2017年度入学生は各項目において、スコアが伸びていたが、2016年・2015年度入学生が前回よりもスコアが下がっていた。2017年度入学生のスコアが上がる原因としては、スポーツ指導実習概論やコーチ学概論等で「グッドコーチとはどのようなコーチか」を学修している成果と考えられた。一方、2016年・2015年度入学生のスコアが下がる原因として、次のことが考えられる。前回は理想の指導者像をイメージして、今回は指導経験(3年次にスポーツ指導実習・4年次に教育実習)をふまえて回答しており、前回と今回では、回答する際に想定する場面が異なっていることが考えられる。また、指導現場では理想と異なる判断や行動をとっていることが考えられる。この点については、次年度も同様な傾向が認められるかの確認をし、対処を検討することとした。

SCCOT (Sports Coaching Competency Test) の結果について



上図は、学生の皆さまに受験してもらったSCCOT (Sports Coaching Competency Test) の結果です。2017年度入学生は、各項目において、スコアが伸びていますが、2016年・2015年度入学生が前回よりもスコアが下がっています。

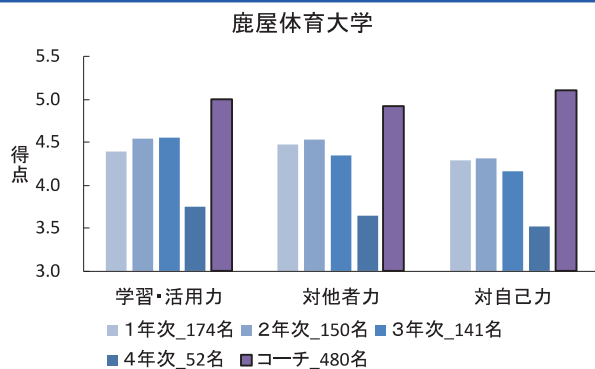
2017年度入学生のスコアが上がる原因としては、スポーツ指導実習概論やコーチ学概論等で「グッドコーチとはどのようなコーチか」を学修している成果と考えられます。

2016年・2015年度入学生のスコアが下がる原因として、次のことが考えられます。前は理想の指導者像をイメージして、今回は指導経験(3年次にスポーツ指導実習・4年次に教育実習)をふまえて回答しており、前回と今回では、回答する際に想定する場面が異なっていることが考えられます。また、指導現場では理想と異なる判断や行動をとっていることが考えられます。

(出典・NIFS-AP News VOL.5 より 2019.3)

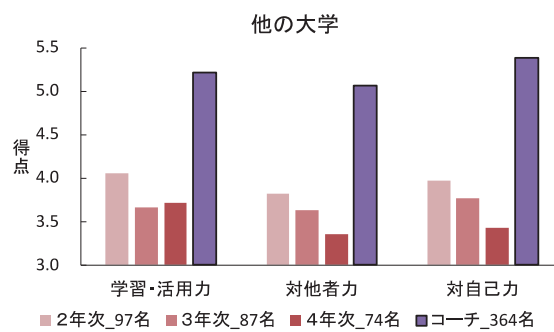
さらに、その他の体育系大学やスポーツ競技団体等においても、本テストがスポーツ指導者のための適性判断などにも活用できるかについて、試験的に実施し、基礎データを収集しながら普及した。なお、前述の3・4年次での低下傾向は、他の体育系大学でも同様に認められていた(下図参照)。

SCCOTの学年進行に伴う変化(横断的)



学年進行に伴って、
コーチの特性から離れていっている

SCCOTの学年進行に伴う変化(横断的)



実習等で指導経験が増えると現実的な価値観になって、
コンピテンシーの得点が下がっていく?

なお、本テスト開発に関する成果は、SCCOTのテスト開発に従事した近藤亮介特任助教が日本コーチング学会(2019年3月)で発表し、優秀発表賞を受けた(次ページの図参照)。

—近藤亮介特任助教（教育企画・評価室）—

- ◆研究テーマ：スポーツ指導コンピテンシーを可視化する客観的評価テスト（SCCOT）の開発
 - ◇研究の概要：スポーツ指導者やそれを目指す体育専攻学生が、多様で複雑なコーチング活動の中で状況に対応しながら適切な行動判断を行う資質・能力を、「どの程度身につけているか」を把握するための客観的評価テスト（SCCOT：Sports Coaching Competency Test）を開発しました。
 - ◆受賞者のコメント：AP事業（注）における教育の質保証の充実を図る中で作成したSCCOT開発研究が評価され、とても嬉しいです。これからSCCOTを広く普及することに力を入れることはもちろん、色々な方の意見を取り入れ、より良いものにしていきたいと思います。
- （注）「大学教育再生加速プログラム」の略称。詳しくは、[こちらをクリック](#)



教育企画・評価室の皆と一緒に学長報告

松下学長との懇談

（左から松下学長、近藤特任助教、濱中良専門員、
金高宏文教授、岡田あゆみ事務補佐）

出典：<https://www.nifs-k.ac.jp/infomation-all.html?start=170>

③多様な学びの可視化と支援の強化

授業外での学修時間は、授業科目毎及び全体で把握した。また、課外活動における部活動やその他の活動の汎用的能力改善への波及効果について、前年度に引き続き、7件（累計：20件）を事例的に明らかにした（資料7参照）。これらの事例を概観すると、3年次以降に大きく成長していることが分かる。このような学生の課外活動での学びや成長を年次毎に記録し、振り返る仕組みを学生指導部門とも連携しながら構築できればと考えている。

以上のように本年度は、「学修行動やその成果の可視化」をほぼ完成させ、全学での定常的な学修ポートフォリオシステム（NIFSpass）を構築することができた。

そして、令和3年度からの教育課程改訂に向けて、平成26年度より始まった現行の教育課程について評価・分析を開始した。さらに、本年度は、より特殊な事例である国際競技スポーツ大会出場者に対する教育支援体制を再整備した。具体的には該当する学生が授業欠席時の授業内容を学習する際の支援を、授業ライブ러리を利用して実施することについて検討を行った。

(資料 7)

【教育企画・評価室 2017年3月14日】



国立大学法人 鹿屋体育大学
NIFS NATIONAL INSTITUTE OF FITNESS and SPORTS in KANOKA

「スポーツで未来を拓く自分を創る」ための新たな挑戦と統合

【4年間の振り返り版】

課外活動ポートフォリオ（部活動編） Ver1.0

作成日： 西暦 年 3 月 21 日

ふりがな

氏名

性別

男

学籍番号

課外活動
（部活動）

サッカー部

種目
（ポジション）

サイドバック・広報



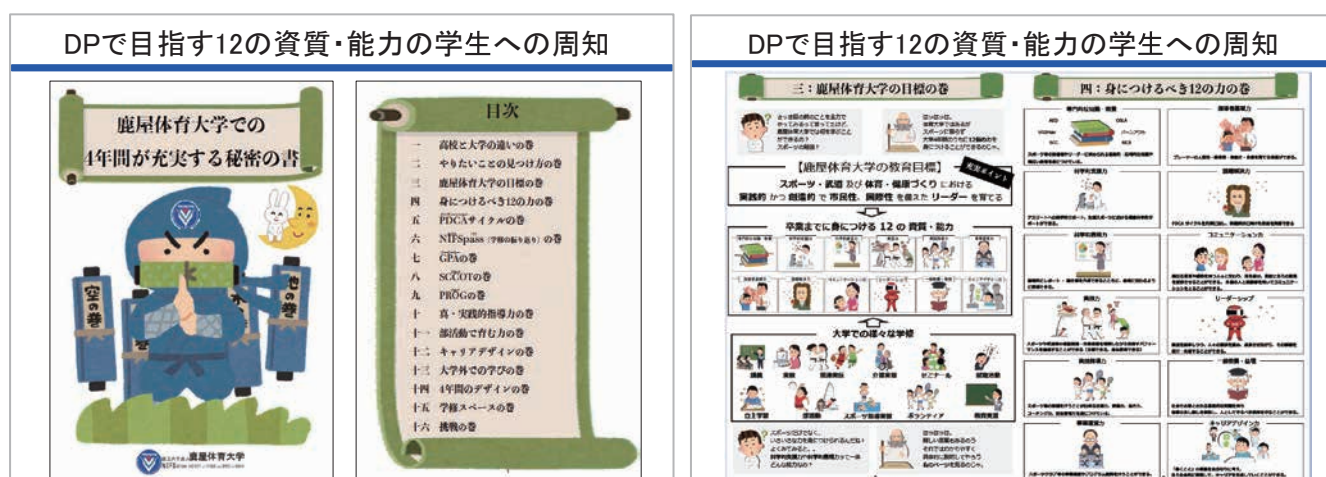
大学4年間の目標	プロサッカー選手になる			
学年目標	1年次 1st (Bチーム昇格)	2年次 1st (Bチーム昇格)	3年次 大学サッカーで鹿屋を盛り上げる	4年次 大学サッカーで鹿屋を盛り上げる サッカーを楽しむ
パフォーマンスの充実度 ※どこかを必ず100とすること				
年間の充実度 (%)	60%	80%	50%	80%
パフォーマンス （最高成績・記録）	九州社会人サッカー大会出場	特になし	【選手】 天皇杯鹿児島県予選 準優勝 【広報】 集客イベント企画（九州大学リーグ）	【選手】 九州社会人サッカーリーグ3位・ 全国社会人サッカー選手権大会ベスト16 【広報】 総理大臣杯ベスト8・九州大学 リーグ3位・インカレ回戦敗退・集客イ ベント企画（九州大学リーグ）
特記事項 （怪我等）			左右太もも裏の肉離れ（4～6月）	右太もも裏の肉離れ（9月）
役職等	広報	広報	企画・広報	企画・広報
振り返り （点数の理由・根拠）	学年目標を達成することができなかったが、前年度の達成できなかった目標を達成し、選手としての成長を実感できたため80%とした。前年バレー外からスタメンを獲得した。②公式戦でBチームに勝利し九州大会に出場することができた。	前年度達成できなかった目標を達成し、選手としての成長を実感できたため80%とした。前年達成できなかった悔しさがモチベーションになった、また同じ目標を掲げる友人がいたため1年間モチベーション高く競技に打ち込むことができた。	怪我による競技の落ち込みはあったが、広報の仕事面で充実していたため50%とした。天皇杯予選でTOPチームに勝利し、決勝戦で鹿児島ユナイテッドFCと対戦するという最高のスタートを切ったがその直後に怪我をしてしまった。怪我後は広報業務に徹し日本版NCAAの事業やサッカー部の集客企画など戦力的に取り組んだ。	就活と広報は満足いく結果に終わったが、競技の面で納得がいかなかったため80%とした。就活では納得いく企業から内定をもらうことができた。広報では学生主体での集客企画や全国大会に帯同など広報の目標も達成でき充実していた。競技の面では就活明けから順調にコンディショニングを上げてきていたが、全国大会前に怪我をしてしまった。怪我に対する意識が足りなかったことを痛感した。
本年度の成長 （学んだこと・気づいたこと）	コーチのおかげで科学的な筋力トレーニングを学び、実践し成果を高めることができた。この経験から目標を達成するために計画を立てることや課題の発見・改善に主体的に取り組むことが自然とできるようになった。	一人で何かを行うより仲間がいる方が自分にはあっているということがわかった。仲間と支えあうことでモチベーションを維持し、お互いの長所や短所を指摘し合うことでさらに成長を促すことができると実感することができた。	自分が活躍するための環境は自分で探すということ。怪我によって競技の面で活躍できなくなると、自分の力を発揮する環境はあるということに気づけてよかった。	日本版NCAAなどの影響もあり学生の間で本学を盛り上げる意識が芽生えてくるかと思ったが、あまり感じられず残念だった。何事も地道に継続しながら、周囲に共感してもらうために声を上げていく姿勢が大切なのではないかと思った。また、3年次と同じ怪我をしたことからリスク管理が甘いということに気づいた。自分の現状を理解し、想定されるリスクに対応していく必要があると気づいた。
特に身についた力 （当てはまるものに○：複数可）	1 実技力 2 専門的な知 3 4 5 6 7 8 9 ## ## ##	1 実技力 2 実技指導力 3 4 5 6 7 8 9 ## ## ##	1 実技力 2 指導者基礎 3 事業運営力 4 リーダーシ 5 課題解決力 6 7 8 9 ## ## ##	1 事業運営力 2 課題解決力 3 コミュニケ 4 リーダーシ 5 6 7 8 9 ## ## ##
次年度の目標・課題	Bチームに昇格すること。そのために、センターリングの精度、スプリントの回数を高めること。	Bチームに昇格すること。そのために、試合の流れからその場面にあったプレーを選択できるようになること、守備の場面でサイドハーフと連携しサイドでボールを奪取できるようになること。	怪我によってプロ選手を目標とすることを諦めたが、サッカーを最後までやり遂げること。大学スポーツを盛り上げる面でサッカー部が本学内でのロールモデルとなること。	OBとして大学スポーツの発展に貢献すること。
4年間の振り返り	一般入部でもトップチームに入り、プロを目指せるチャンスと環境があると思い鹿屋体育大学サッカー部へ入部した。プロサッカー選手という目標は達成できなかった。しかし幸いにも競技の面では共に切磋琢磨する仲間とサポートしてくださる先生方に恵まれ、良い環境でサッカーをすることができたと思う。また、3年次から日本版NCAAの事業に携わるることによってスポーツを盛り上げる、支えることに興味を持ち始めた。そのおかげでプロサッカー選手になる以外の目標を見つけることができた。上記の環境で自ら目標を立て、目標達成のために課題を見つけ、自ら解決していこうとする姿勢を身に付けられたことはこの4年間の部活動を通じて得られた貴重な財産だと思う。この経験を糧に充実した社会人生活を送ってきたい。			

(4) 平成 31 年度（令和元年度）の取組内容・成果

① DP で目指す 12 の資質・能力の修得に向けた学修支援

DP で目指す資質・能力を設定し、可視化や評価を AP 事業により急速に進めてきたが、学生の理解が不十分なことや、対応できないことが平成 30 年度の取組から明らかになった。具体的には、コミュニケーション科目における授業振り返りアンケートで明らかとなる「学生が感じている DP で目指す 12 の資質・能力の修得度感」で、「実技力」が約 20% も選択されていた（p32 参照）。学生は、英語、国語文章表現法、プレゼンテーションでのコミュニケーションやそこでの活動を「実技」「実技力」と捉えている者もいたようである。

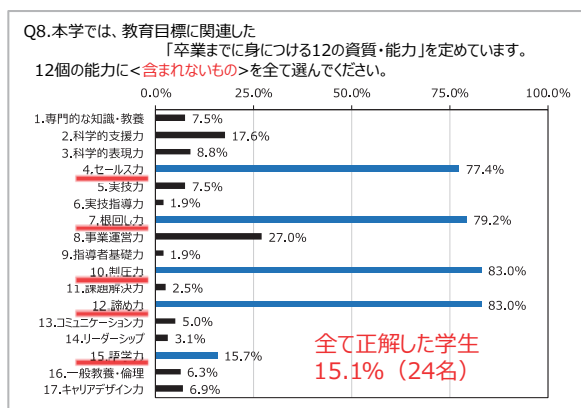
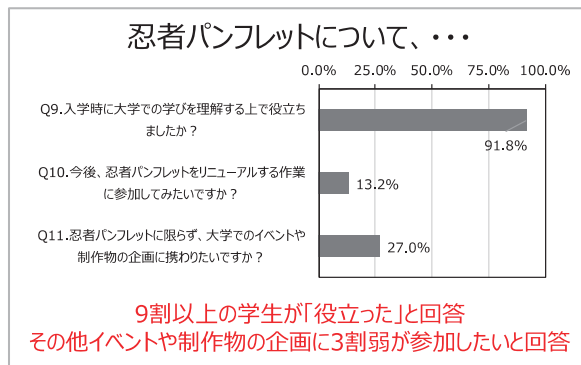
そこで、再度本学が DP で目指す 12 の資質・能力について、ガイダンスでの説明やニューズレターの発行をすることで、周知・理解を促進するようにした。さらに、根本的な周知・理解度不足の解消のために、平成 31 年 4 月からの入学生に対して「本学の教育の質保証に関わるパンフレット（学生の 4 年間で充実する秘伝の書）」を配布し、本学の学びや学修成果等を周知・理解を図った（下図参照）。なお、在学生に対しても配布、周知を図った。



その結果、多くの 1 年生（159 人が回答、回答率 67.7%）が、パンフレットの実用性を支持するとともに、DP で目指す 12 の資質・能力についても概ね正しく理解していた（右図参照）。

また、当該パンフレットは本学の教育の目標やその教育プログラムの特色を示すことから、学外者や受験生に対する広報パンフレットとしても機能することとなった。

忍者パンフレットを通して、色々な情報を正確に取り入れていきたいです。
右も左も分からない時期に不安を和らげてくれるとても良いパンフレットでした。
言葉は分かりやすかったが、自分が大学に入ったうえで初めて知りたかった単位とかについてはあまり詳しく書いていなかったで、理解が難しい単位とかについてもっと分かりやすく書いて欲しかった。
なかなか分かりやすくて良かったと思います。
一気に色々なものが配られて、優先順位が下の方だと思ってしまっていたのであまり目を通さないままにしました。
忍者パンフレットで、大学の分からないことがほとんど理解できたので良かったです。これからもこのまゝ忍者パンフレットを継続していくことが必要だと思います。
絵が多く、とても分かりやすかったです。
少し内容を凝縮しすぎてわかりにくい部分があったと感じた
イラストが可愛くて文書だけの堅苦しい書類よりも見てみようという気になった。
忍者パンフレットはとても分かりやすく、図も多くとても良かった。今後も忍者パンフレットを入学生に配って、大学がどこまで確認できるようにしていけば良いと思う。
絵が読みやすかった。
パンフレットは、紙でもデータでも両方で配布していただきたい。
掲示板にも張り出したりして頂きたいです！
とても素晴らしいと思います。
とても素晴らしい資料だと思うので、今後も新入生に配布して行った方がいいと思います。
ありがとうございました。



また、卒業研究の論文タイトル等も HP 上で令和元年度より公開し、学生の専門的研究力の可視化を強化していくようにしている。

- 一方で、学修及び教育改善を進める中で、浮かび上がってきた問題もでてきている。その一つが、学修ポートフォリオである NIFSpass における運用の問題である。具体的には以下のような問題や課題がでてきている。
- ・学生の学修成果に対する振り返り作業の二極化（回答の早い学生と遅い学生、充実した内容と不十分な内容）
 - ・管理部門及び指導教員のフォローアップの煩雑さ
 - ・学修ポートフォリオシステム上の脆弱性への対処

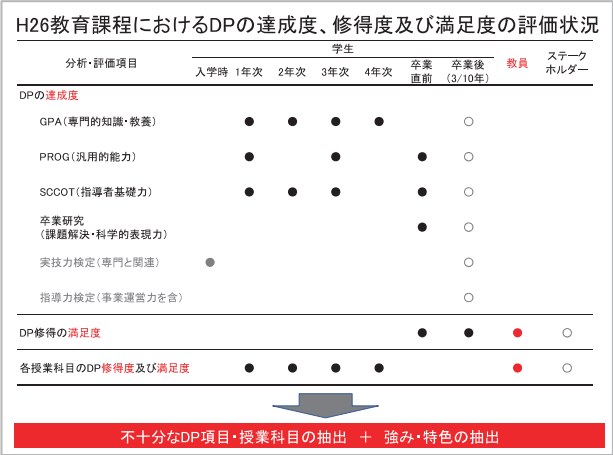
各種の学修成果の可視化を Web により進める際に、現時点ではデータの集約を手作業で行う必要がある。そのため、データ開示の遅延や人為的なミス等が少なからず生じている。今後は、教学システムの大規模な更新作業を通じて、手作業による教学データの集約を少なくし、より学生個人データの管理を効率的かつ分析・評価できる体制・環境整備を行う予定である。

② DP で目指す 12 の資質・能力の修得に向けた教育改善：教育課程改訂に対する提言

令和 3 年度からの教育課程改訂（資料 8 参照）に向け、平成 26 年度より始まった現行の教育課程の分析・評価を本取組で明らかにしてきた学修成果や学修行動の可視化データより行った。教育企画・評価室では、資料 8 の下段の図の【情報収集・分析】を担当した。

具体的には右図のよう可視化データを用いて、下図のような提案を行った。

なお、このような取組を進めるにあたって、教学 IR の組織的な整備として「教学アセスメント・ポリシー」も策定した（p17 参照）。



(CP関連提案)

学生の学ぶ、指導力や研究力の専門性をより明確にする。

【基本方針】

本学の人材養成上の「強み」「特色」の明確化を図れるように点検・改善する

【PROGテストの結果より】

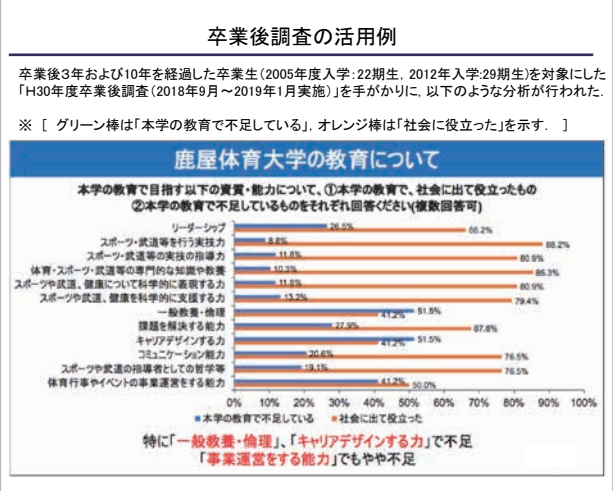
- 3年12月から4年2月の教育(ゼミナール・卒論+教育実習・就活等)により、コンピテンシー(対人基礎力、對自己基礎力、対課題基礎力)が大きく伸びている。

→この期間の教育は、本学の教育の強み、特色といえる！

【提案】

- ゼミナールや卒業研究等での学びをより意識しやすいように、既存の学びの枠組みを可視化して設定してはどうだろうか？

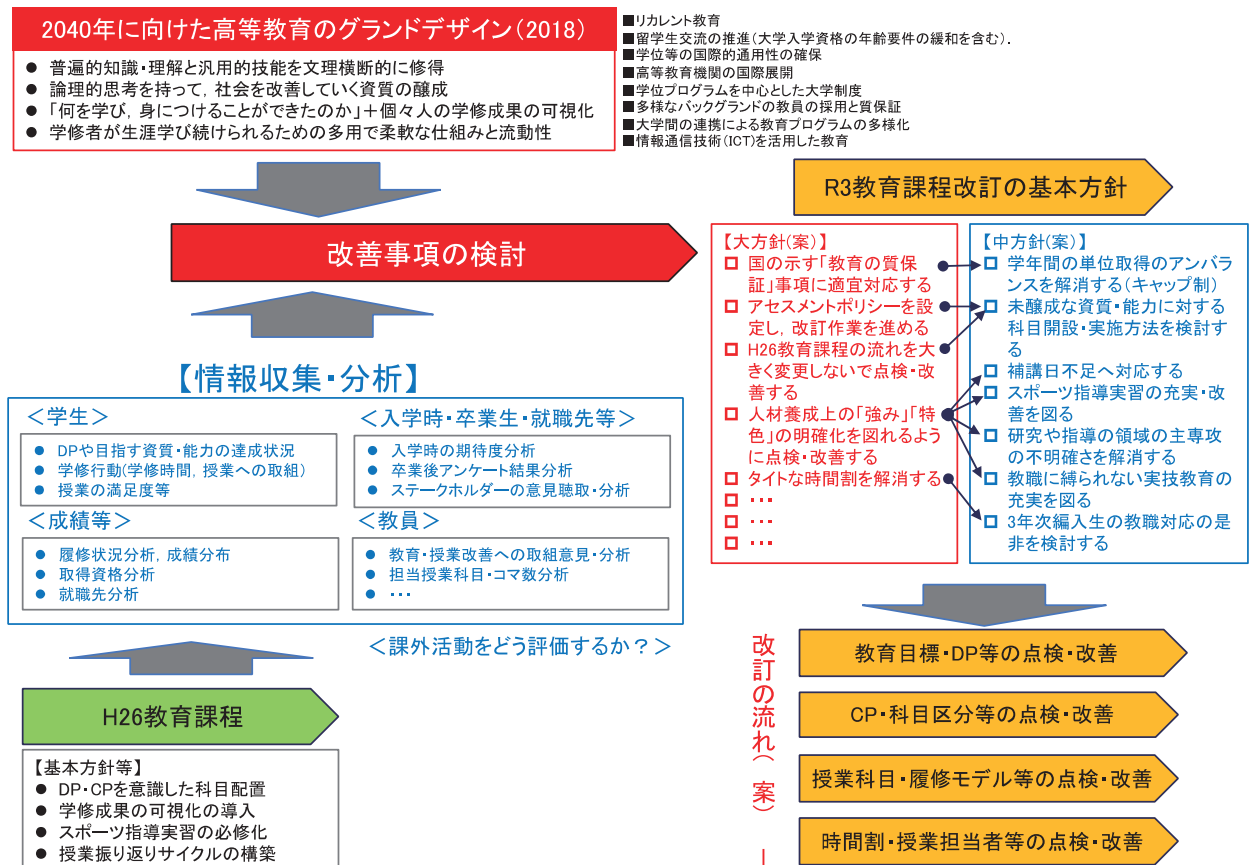
● 学生の学ぶ、指導力や研究力の専門性をより明確にする。
・専攻科目やゼミナールにおける〇系の「系」の名称変更やコースの明確化



2040年を意識した教育課程改訂のグランドデザイン:長期展望

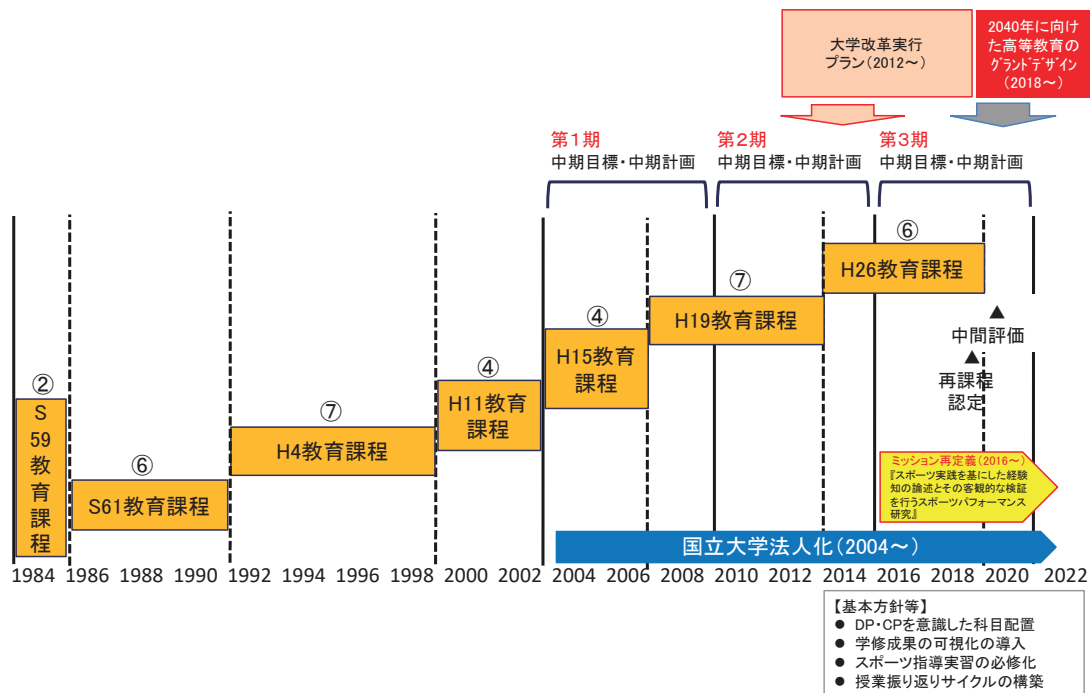


教育課程改訂のグランドデザイン(案):改訂の流れ



(参考資料)

開学以来の教育課程改訂の取組み



以上のように、令和3年度からの教育課程改訂を目指して、継続的な教育の質保証に向けた教学マネジメントの環境や取組が整備されつつある。

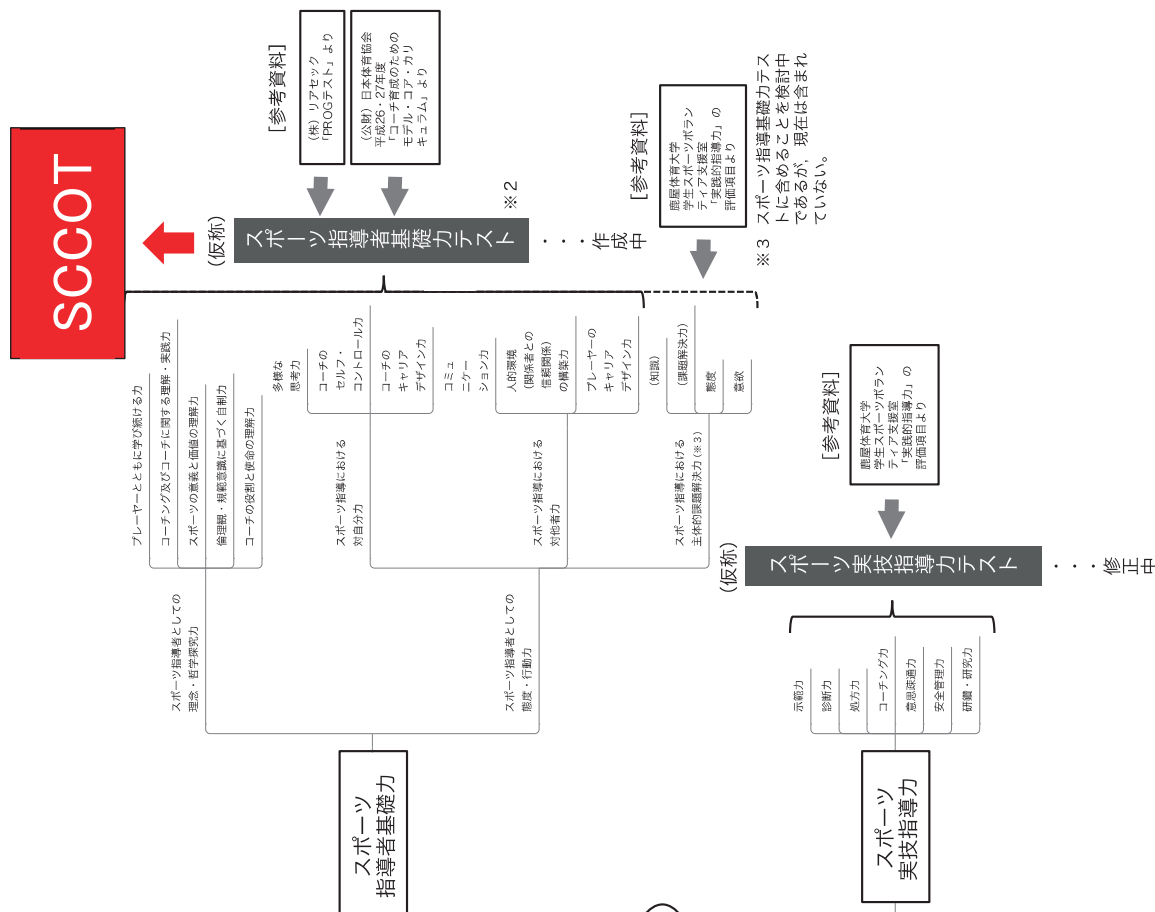
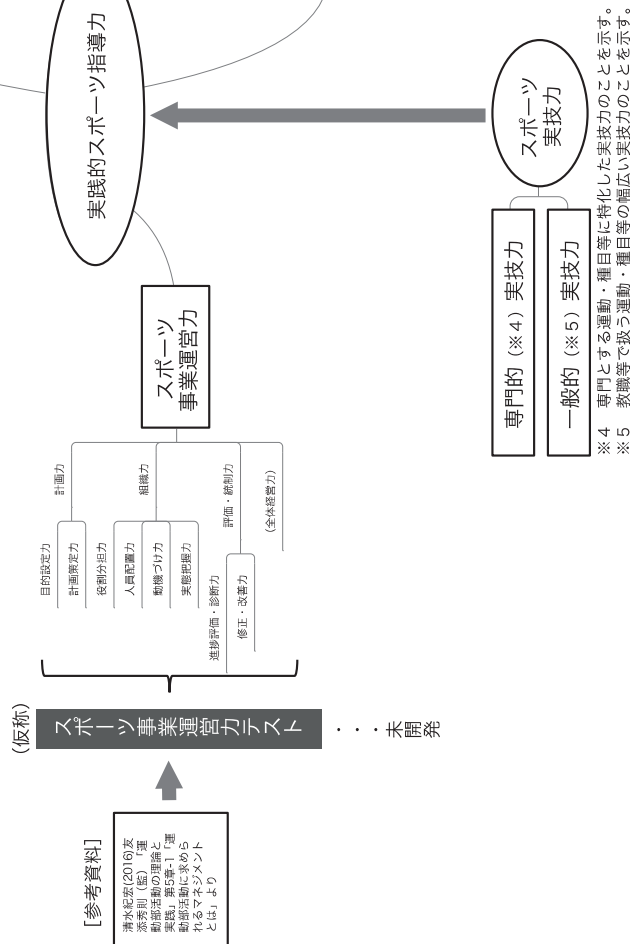
なお、スポーツ指導者基礎力と称した指導者の判断力等の可視化を SCCOT で行ったものの、懸案の課題であるスポーツ等の実技力、実践力、実技指導力及び事業マネジメント力の可視化部分については、概念図(資料8参照)を示しただけで、組織的な大きな進捗が認められていない。次年度のフォローアップ期間を含めて新教育課程改訂前までには学内調整をしながら、実質的な可視化が出来るようにする予定である。

実践的スポーツ[※]指導力の構造(案) ver. 1.0

※1 「スポーツ」を1992年の新ヨーロッパスポーツ憲章の「スポーツを体力向上、精神的充足感の表出、社会的関係の形成、および競技力向上を目的とするあらゆる身体活動の総体」とした定義に従って、武道をはじめ、健康のためのジョギングや山登りやストレッチも含むこととする。

- 実践的スポーツ指導力の構成要素を、「スポーツ指導者基礎力」「事業運営能力」と捉えることとした。それぞれ「構成要素は、**「スポーツ指導者基礎力」**（スト ※2）」「**「スポーツ実践指導力」**」で可相化・評価する。
- スポーツ指導基礎力テストは、(株)リアセックの「PROG」のテストおよび採点の方法を援用し、(公財)日本体育協会の「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」の考え方を参考とした。さらに、鹿屋体育大学学生スポーツボランティア支援室で用いられている「実践的指導力」の評価項目の一部（知識、課題解決力、態度など）をこれに加えることも検討中である。
- スポーツ実践指導力テストは、鹿屋体育大学学生スポーツボランティア支援室「実践的指導力」の評価項目（師範力、診断力、処方力など）を参考とした。
- スポーツ事業運営力テストは、友添（2016、編著）「運動部活動の理論と実践」にある清水（2016）第5章-1「運動部活動に求められるマネジメントとは」を参考に作成する予定である。

※2 当該テストは、AP事業で「スポーツ指導者の指導力等の客観的評価テスト（理想的な指導者を基本としたプロフィール型テスト）」としていたものを、名称変更したものである。



近藤亮介 (2017/03/10) 作成
2017/03/13 修正

IV. CHECK : 評価

(出典：鹿屋体育大学大学教育再生加速プログラムに係る、令和2年度第1回外部評価委員会報告書より)

ここでは、「鹿屋体育大学における学修成果の可視化と卒業時における質保証の取組の強化」の4年間の取り組みの総合評価と今後の課題を検討するために開催された、外部評価委員会の議事内容の概要を示す。

会議は、令和2年2月18日(火) 15:30～17:30〔東京サテライト及び鹿屋体育大学大会議室(東京サテライト等とのTV会議)〕に開催された。外部評価委員は、以下の専門家(敬称略)であった。

- ・ 會田 宏(筑波大学：体育系 教授)
- ・ 土屋 裕睦(大阪体育大学：学長補佐 体育学部 教授)
- ・ 久保田 潤(独立行政法人日本スポーツ振興センター：スポーツ開発事業推進部研究員)

1. 外部評価委員会における議事の概要

1) 外部評価の進め方

提示した資料及び委員会での質疑等を参考に、本事業及び本学の教育の質保証に向けた取組に関する評価表(案)を元に外部評価委員の合議により、會田委員が取りまとめ、後日報告頂くことが確認された。なお、評価項目や評価基準は外部評価委員により適宜修正できることも確認された。

2) 外部評価委員から質疑

外部評価委員より、1) 卒業時の質保証に向けた取組(学修成果の可視化等)についての評価や2) 本学の教育改善に向けた取り組みについて、以下のような意見・要望・質問が出された。なお、質問等については随時回答した。また、資料提示等の要望については最終報告書に反映した。

- ・ DPと科目間の整合性の確認、PROGテストやスポーツ指導力のテスト(SCCOT)の開発を含めた学修成果の可視化など、着実な成果を得られていることが確認できる。そのような取組成果を報告書としてまとめて発信して頂きたい。特に、取組成果の部分のエビデンス(データ)とその説明、分析と考察、まとめを分かりやすく表記して頂きたい。
- ・ 報告書内での実技力、実践力、実技指導力、事業運営能力の違いや関係性が今ひとつ明瞭ではないので、もう少し明瞭になるようにして頂きたい。
- ・ 教育の質保証と言う観点からも、体育系大学の卒業生の進路と保証すべき質保証との関係が就職先とどのような質保証と考えているのかについても報告頂きたい。
- ・ DPと科目間の整合性の確認ができていることは教育の質保証をする上でも評価できる取組と評価できる。
- ・ スポーツ指導力を可視化した点は、これまでにない大きなチャレンジとして高く評価できる。
- ・ 実施体制が整備されていった過程や背景についても時系列で報告されるとともに、さらに今後の教学マネジメント体制の強化方向についても示されることが期待される。
- ・ 正課外の部活動の教育効果の可視化の方法として提案している「課外活動ポートフォリオ」は、体育系大学にとっては非常に有益で、参考になるものと評価できる。
- ・ 本事業の取組(学修成果の可視化等)前後で、学生の授業の取組や資質・能力の変化(伸びや停滞等)についても報告書内で明示して頂きたい。数値的な変化とともに、学生個人や教員個人サイドの印象等も含めて変化も記述されることが期待される。
- ・ 本取組が効果的に学内で周知・浸透できたのであれば、その取組や状況についても報告されることが

期待される。また、今後の教育課程改訂に活用されていくのかについても詳述されるとよい。

- ・平均的な分析とともに、個別事例についても記述・分析することで、変化要因を明らかにできるので、この点についても次年度も含めて分析されることが期待される。

3) 鹿屋体育大学に対する今後の教育改善等の課題について

- ・文科省が2040年度を見通した高等教育のグランドデザインを提示しているが、体育大学としては現行のDP等をどのように変革していこうと考えているか？ その見通しを教示して頂きたい。
- ・10年前よりも教育領域が幅広くなった体育・スポーツ系大学の教育の質保証を担保するためにも、今回の教育の質保証に関する取組で先導する貴学が筑波大学とも連携しながら、概ね10年前に体育・スポーツ系大学・学部長会議で作成した体育・スポーツ系大学の教育の質保証に関する参照基準のリニューアルを進めて頂きたい。
- ・本取組が継続して実行されることを期待している。そのためにも、教育関連データの分析やステークホルダーとのコミュニケーションを行う専任スタッフを雇用して継続して頂きたい。

2. 外部評価委員における本事業に対する評価結果

令和2年度第1回外部評価委員会後、委員会で提示された資料及び委員会での質疑等を参考に、本事業及び本学の教育の質保証に向けた取組に関して、以下の評価表を元に外部評価委員各自が評価し、その後合議により會田委員が評価表を取りまとめ、以下のように報告された。

【学修成果等の可視化について】

点検項目	高いレベルで達成されている	適切に達成されている	達成されている	達成されていない	備考・状況
Q:科目成績(GPA)の可視化の達成性	○				
Q:汎用的能力(PROG)の可視化の達成性	○				
Q:スポーツ指導者基礎力(SCCOT)の可視化の達成性	○				
Q:スポーツ実技力の可視化の達成性			○		
Q:スポーツ実技指導力の可視化の達成性			○		
Q:スポーツ事業運営力の可視化の達成性			○		
Q:授業時間外学修の可視化の達成性(授業時間外学修時間の把握)		○			
Q:学生の学修の主体的取組等の可視化の達成性		○			
Q:課外活動における活動の可視化の達成性		○			
総括:卒業時における質保証に向けた、学修成果の可視化の取組の達成性		○			

【学修及び教育改善の取組について】

点検項目	高いレベルで達成されている	適切に達成されている	達成されている	達成されていない	備考・状況
Q:学修成果等の可視化を元に、学生が主体的に学修改善を行えているか？	○				
Q:学修成果等の可視化を元に、大学が授業科目レベルで教育改善を行えているか？	○				
Q:学修成果等の可視化を元に、大学が大学(学位プログラム)レベルで教育改善を行えているか？		○			
総括:卒業時における質保証に向けた、学修及び教育改善の取組の達成性	○				

【全体的な取組の達成性について】

点検項目	高いレベル で達成されて いる	適切に達成 されている	達成されて いる	達成されて いない	評価コメント等
Q:平成28年度の計画の達成性		○			
Q:平成29年度の計画の達成性		○			
Q:平成30年度の計画の達成性		○			
Q:平成31年度(令和元年度)の計画の達成性		○			
Q:卒業時における質保証の取組の達成性		○			
Q:卒業時における質保証の取組の強化の達成性	○				
総括:構想・計画の全体的・総合的な達成性		○			

<総評>

本取組では、鹿屋体育大学の教育ミッション「スポーツ・武道及び体育・健康づくりにおける実践的かつ創造的で市民性、国際性を備えたリーダーを育てる」の実現ために、「卒業時における質保証の取組の強化」が全学的に行われた。

4年間に亘る教育改革の取組を詳細に検討した結果、ディプロマ・ポリシー（DP）を担保する「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」と「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力（汎用的能力）の養成」の状況を、学修行動や学修成果を可視化することを通して確認し、継続的に教育改善が行える教学システムを確立した点において大きな成果が得られたと評価できる。

本取組では、具体的な成果として、鹿屋体育大学や我が国におけるスポーツ・健康に関する人材育成の状況を踏まえ、客観的評価が容易ではない能力の数量化・可視化に挑戦し、一つのソリューションとして各種テストを開発している。特に、科目成績（GPA）や汎用的能力（PROG）、スポーツ指導者基礎力（SCCOT）の可視化は非常に高いレベルで達成されており、体育・スポーツ分野における大学教育の質保証への活用が期待できる。また、本取組を通して学生のリテラシー領域、コンピテンシー領域の評価得点が向上していることから、学修成果等の可視化を元に、学生が主体的に学修改善を行えていること、大学が授業科目レベルで教育改善を行えていることが実証されていることも高く評価できる。

今後は、スポーツ実技力・実施指導力・事業運営力の可視化の方法について検討するとともに、大学としての教育改善の状況について、教職員に対するヒアリング調査やアンケート調査等を通して評価・検討することで、我が国の体育・スポーツ系大学・学部のモデルとなるような、より高い教育の質保証が達成されることが期待される。

[文責：外部評価委員会委員長 會田宏（筑波大学）、2020/3/7]

【追補】

大学教育再生加速プログラム委員会より令和3年3月15日に、「大学教育再生加速プログラム（AP）」の事後評価結果」が示された（次頁参照）。

総括評価として、「A：計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。」と示された。また、コメントには、本取組の評価点や今後の改善点も示された。

（出典：https://www.jsps.go.jp/j-ap/data/jigo_hyoka/kekka/r2-ap-jigokekka_63.pdf）

大学教育再生加速プログラム(AP) 事後評価結果

整理番号	63	大学等名	鹿屋体育大学
テーマ	テーマV 卒業時における質保証の取組の強化		

（「大学教育再生加速プログラム委員会」による評価）

【総括評価】

A：計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

【コメント】

大学改革の加速については、ディプロマ・ポリシーで目指す12の資質・能力と各授業を個別に紐づけてGPAに反映・可視化したこと、スポーツ指導力の可視化として独自の「スポーツ指導者コンピテンシーテスト（SCCOT）」を開発したこと、社会人基礎力の可視化として「汎用的能力テスト（PROGテスト）」を活用したこと、さらに、可視化した学修成果を学生自身で振り返ることができる「学修ポートフォリオ（NIFSpass）」を構築し、エビデンスベースでの教学システムを完成させたことは高く評価できる。また、パンフレットの作成等による学生への周知や活用サポートについても、きめ細やかな取組がなされ、教員に対しても授業力に対する顕彰制度が導入されるなど、全学的な改革が進捗していることも十分評価できる。加えて、本事業を契機に長期的展望をもった教育課程改訂に取り組むことが決定されており、継続した改革の推進が期待される。

事業の具体的な取組の進捗状況については、年度ごとに施策の効果や課題について言及されていることから、本事業が着実に成長し、学内に根付いていったことが見て取れる。あわせて、テーマ別評価の観点に即した着実な取組が行われており、どの観点についても独自性と工夫が随所に見られることも高く評価できる。必須指標については、「学生の授業外学修時間」を除き全ての目標値を達成したことは評価できる。任意指標については、目標値未達の指標もあるものの、総じて事業開始年度より向上しており、今後の事業継続の中で更に改善されることが期待される。また、中間評価及びフォローアップにおける指摘事項の多くが改善されており、今後の継続検討とされるものについては、着実に対応されることが望まれる。

事業の定着に向けた実施体制及び継続のための取組状況については、補助期間終了後の事業継続に向け、本事業の企画運営組織である「教育企画・評価室」が学長直下に置かれ、アドミッションセンター、キャリア形成支援室との連携体制も構築されたことに加え、資金面についても学内経費として予算計上されるとともに、本事業において雇用した人材も継続雇用されることから、引き続き本事業を強固に推進する体制が整備されていると評価できる。しかしながら、評価体制に関して、「運営企画会議」が取組に対する評価を行い、「監査室」が経費使途の妥当性を確認する体制とされているが、より具体的な自己評価の仕組みが不明確である。継続的な外部評価の実施も調整を図っていることから、自己評価と併せて、着実に整備・実施されていくことが望まれる。

事業成果の普及については、「スポーツ指導者コンピテンシーテスト（SCCOT）」が当該大学の学生だけでなく、日本スポーツ協会や中等教育・高等教育における体育系部活の指導者に対する検証も行われ、他の大学等への普及を推進していることは十分評価できる。一方で、このテストは令和2年度から有償での実施とされているが、日本スポーツ界発展の観点からも、可能な限り無償での提供を検討し、一層の普及を目指すことが望まれる。

V. ACTION : 今後の検討

1. AP 助成期間終了後の本取組の継続について

AP 事業の助成最終年度にあたり、AP で推進してきた取組を、補助期間終了後にどのように継続するかについて、「卒業時質保証」に関する成果の展開と定着に関するものを以下に整理した。

なお、AP 取組期間で未実施となった、就職先へのアンケートやディプロマ・サプリメントの発行は総合的な教育の質保証を担保するためにも、早急に取り組むべき課題といえる。

取組項目	助成期間中の取組	助成期間後の取組(予定)
ディプロマ・サプリメントの発行	実施の有無(実施・ 未実施) 発行時期:令和2年度からを予定 記載内容:検討中	実施内容の変更(有り・ 無し)
ポートフォリオシステムの開発と運用	実施の有無(実施 ・未実施) 授業の科目区分別 GPA、ディプロマポリシーで修得を目指す 12 の資質・能力別 GPA、汎用的能力(PROG テスト)、スポーツ指導者基礎力(SCCOT)について可視化を行い、学生に明示し、自己の学修の振り返りを行わせている。	実施内容の変更(有り・ 無し) 学生に示す学修成果の追加及び教員からのフィードバックの実施について検討しているところであり、検討結果に応じて対応予定である。
推進体制	人員配置:専従スタッフの人数 【平成 28-30 年度】特任助教 1 名、特任研究員 1 名、事務補佐員 1 名 【令和元年度】特任助教 1 名、事務補佐員 1 名。学内組織:「教育企画・評価室」を中心に AP 事業を推進している。	実施内容の変更(有り ・無し) 人員配置:専従スタッフの人数の変更 【令和 2 年度】特任助教 1 名、事務補佐員 1 名。学内組織:継続して「教育企画・評価室」を中心に取り組みを進めて行く。
卒業生へのアンケート調査	実施の有無(実施 ・未実施) 卒業後調査を、卒後 3 年及び 10 年の卒業生を対象に実施している。	実施内容の変更(有り・ 無し)
就職先へのアンケート調査	実施の有無(実施・ 未実施) 実施の可否について検討中である。	実施内容の変更(有り・ 無し)
学修成果の可視化及びアセスメント	実施の有無(実施 ・未実施) 「鹿屋体育大学 教学アセスメント・ポリシー」を制定し、可視化した学修成果等を基に、本学の特色や現状把握、全学的な教育改革・改善及び学修支援の改善等を行っている。	実施内容の変更(有り・ 無し)
ジェネリックスキルの計測	実施の有無(実施 ・未実施) 外部テストである「PROG テスト」により、1 年生・3 年生・4 年生を対象に計測している。	実施内容の変更(有り・ 無し)

2. 学生が主体的に学修改善できる新たな指導者像の検討

これまでの取組は、大学が主体となって教育改善を図るための環境整備に徹してきたところがある。しかし、令和2年1月に示された「新たな教学マネジメント指針」を手がかりにすると、学生が主体となって学修改善が行える教育改善の環境や仕組み作りが重要になると考える。

【鹿屋体育大学の教育目標】

- スポーツ、健康づくり、武道の科学的知識を身につけた実践的指導者の養成
- スポーツ、健康づくり、武道の振興と発展に寄与する人材の輩出
- 創造性・協調性などを有した人材

【DPと12の資質・能力】		DPで目指す12の資質・能力											
		専門的な知識・教養	科学的支援力	科学的表現力	運動実技力	実技指導力	事業運営力	指導者基礎力	課題解決力	コミュニケーション能力	リーダーシップ	一般教養・倫理	キャリアデザイン力
DP1	1. 国民各層のスポーツ・武道及び体育・健康づくりを指導し、普及させるための基礎的な知識及び豊かな教養を身につけている。	●						●		●			
DP2	2. スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関する実技力、科学的支援力及び表現力を身につけている。	●	●	●	●			●		●			
DP3	3. スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関して、年齢、目的等に応じた体系的な実技指導力や事業運営力を身につけている。	●	●			●	●	●	●	●	●		
DP4	4. スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関する課題について、体育学の知識を総合的に活用・応用し、説明することができる。	●	●	●				●	●	●			
DP5	5. スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関心をもち、主体的かつ計画的に、課題解決に向かって取り組む意志をもっている。	●	●					●	●	●	●		
DP6	6. スポーツ・武道及び体育・健康づくりにおけるリーダーシップとコミュニケーション能力をもつとともに、社会の一員として適切に振る舞う態度を身につけている。							●	●	●	●	●	●

そのように考えると、開学以来の本学の教育目標、現在のディプロマ・ポリシー（DP）やDPで目指す12の資質と・能力の関係をより学生に理解されやすく、学生自らもいつでも点検・評価できる表現に置き換えて示すようなことが第一歩と考える。さらに、本学の学生・教職員はもとより、受験生（高校生）や本学のステークホルダーの方々により理解しやすいものとして、本学が目指す「育てる人材」を平易な言葉で示し、本学の目的や使命をより広く知って頂けるようにすることが重要と考える。以下は、その表現例である。

育てる人材像(案)

鹿屋体育大学が目指す(育てる)人材とは・・・

- スポーツ・運動・武道の価値や意味を多様な観点から語れ、記述できる人 [DP1/DP4/DP6]
 - そして伝え、表現することができる人 [DP2/DP4/DP6]
 - スポーツ・運動・武道を楽しみながら観ることや動くことができる人 [DP2/DP6]
 - スポーツ・運動・武道の楽しみや技能を教えることができる人 [DP3/DP5/DP6]
 - スポーツ・運動・武道を安全、健全にする人的・物的・社会的環境・状況を作り出せる人 [DP3/DP5/DP6]
 - そして問題解決・マネジメントできる人 [DP3/DP5/DP6]
- 卒業して
- スポーツ・運動・武道の価値や楽しみを社会的に広めることができる人
 - スポーツ・運動・武道の価値や人間関係を新たな視点で創造できる人

3. 今後の課題

本事業を契機として充実してきた教育の質保証の取組とともに、スポーツ・武道及び健康づくり・体育分野において「社会を変革する力と意欲を持った人材」の輩出に向け、第4期中期目標・中期計画（令和4年度からの6年間）では、以下の事項について取り組むことが期待される。

【学修成果の可視化の充実】

- 運動実技力、実技指導力、事業運営能力の可視化
- 既存の学修成果の可視化に加えて、卒業研究・ゼミナールの学修課題や評価基準の明確化（ルーブリックの作成と運用）
- 教育課程全体及び授業科目群毎に修得すべきミニマムな学修課題（評価ルーブリック等）を明確にし、基礎学力の水準を確認する。
- 正課における学修成果とともに、将来のスポーツとの関わり方、ライフ・キャリアデザイン（職業選択を含）、学生生活や運動部活動における思考や実績・成果を可視できるポートフォリオ（NIFSpass）を拡張・充実させ、ディプロマ・サプリメントへと繋げ、運用する。
- 社会が要求する人材の輩出の確認（就職先、就職先からの満足度で評価）
 - ・社会（JSPO等）が求める資格取得（取得状況で評価）
 - ・多様で幅広いスポーツ・運動・健康分野での活躍（表彰、役職、開発内容・・・から評価）

【教育プログラムの改革・充実】

- 卓越・突出した人材の育成のための準教育プログラムの構築（個別学習と最適学習の充実・支援）
- 指導力専攻（系）の教育プログラム（スポーツ指導実習等）の改編・充実
 - ・プレーヤー・学習者本意のスポーツ指導・支援ができる人材
 - ・長寿社会を身心面から支える人材
 - ・多様な運動実施を支援・指導できる人材（障がい者含む）
 - ・DX・ICTに精通したスポーツリーダー（eSports含む）
- 新しいアクティブラーニング型授業の検討：ブレテッド授業や反転授業の検討

【教育環境・組織の改革・充実】

- 上記の計画を円滑・効果的に実施するために、教員組織の基本単位である系を残しながら、その中に機能的なチーム（類）の編成を検討する。また、その際には小クラス担任教員や小クラス学生やゼミナール学生とのメンタリング共同作業が促進される仕組みを検討する。
- 成績評価の標準化と厳格化の充実
- 教学アセスメントポリシーを活用した、平均的な教育・学修の分析とともに、個別分析（ヒアリング等）をし、エビデンスに基づいた教育改革・改善を継続的に実施する。同時にその状況を学内外に公表する。
- 教育に関する外部評価の定期的な実施

鹿屋体育大学ビジョン

NIFS National Institute of Fitness and Sports in Kanoya
NEXT

ターゲットイヤー2050 鹿屋体育大学の挑戦



教育・ 学生支援

学生一人ひとりの実践力、創造的発見力、課題解決力を最大限伸ばす教育及び学生支援を組織的・体系的に展開し、スポーツ、武道、体育及び健康づくりの各領域における中核的・リーダーの人材の育成をめざします。

A.C.E. KANOYA
【活気ある(Active)
独創的な(Creative)
精鋭(Elites)】の育成

- スポーツ、武道、体育及び健康づくりの各領域における、先導的かつ即戦力となる人材の育成
- スポーツ界のオピニオンリーダーの育成
- 国際大会で活躍するアスリートの育成



我が国固有の 身体文化の洗練

- スポーツと武道の運動形式の洗練による運動技術と競技力の高度化
- スポーツと武道に関する学術的及び文化的価値の創造と展開

イノベーションによる 限界への挑戦・ 持続可能な未来社会の創造

- スポーツイノベーションによるヒューマンパフォーマンスの限界への挑戦
- 国民のウェルビーイング向上及び健康寿命延伸の実現に向けた基礎・実践研究の推進
- スポーツによる社会イノベーション・地域イノベーションに関する研究知見の創出
- 体力・健康づくりに関連する政策にインパクトを与え得る領域横断的研究の推進

スポーツと武道の運動形式の洗練及び学術的・文化的価値の探究、ならびに「スポーツイノベーション」「スポーツパフォーマンス」「スポーツ&ヘルスプロモーション」に関連する実践的・挑戦的・領域横断的研究の展開による、体力・健康づくり及びスポーツパフォーマンスの向上に資する新たな研究ブランドの確立をめざします。

研究

国際化

スポーツや武道を通して世界とつながる人材の育成、研究成果の世界への発信及び我が国固有の身体文化のグローバル化を積極的に推進することで、教育及び研究における本学の国際化をめざします。



世界とつながる教育と 研究の展開

- スポーツや武道を通して世界に積極的に挑戦する人材の育成
- スポーツと武道の学術的・文化的価値に関する研究成果の世界への積極的な発信
- 武道をはじめとする我が国固有の身体文化のグローバル化の推進



スポーツ& ヘルスプロモーションによる 社会イノベーション

- スポーツデジタルトランスフォーメーション(スポーツDX)を推進し、スポーツDXによる「スポーツ×まちづくり=スポーツ健康都市」の具現化
- 「スポーツ実施率日本一」「健康寿命世界一」の地域社会の実現

スポーツ、武道、体育及び 健康づくりによる 持続可能な未来社会の創出

- 地域社会のウェルビーイング向上に向けた、持続可能なスポーツ環境の整備とスポーツ文化の醸成
- 地域と共にある大学として、スポーツ振興及び健康増進の地域課題解決に貢献するスポーツ健康都市を実現し、鹿屋体育大学モデルとして発信

鹿屋体育大学を拠点とする、地域密着型のスポーツ&ヘルスプロモーションを積極的に展開し、地域社会のウェルビーイング向上・健康寿命延伸の実現に貢献します。

社会連携・ 社会貢献



かのや
国立大学法人 鹿屋体育大学
NIFS NATIONAL INSTITUTE OF FITNESS AND SPORTS IN KANOYA

鹿屋体育大学ビジョン

NIFS National Institute of Fitness and Sports in Kanoya
NEXT

ターゲットイヤー 2050
鹿屋体育大学の挑戦



ミッション

4つのミッション

- 教育・学生支援
- 研究
- 国際化
- 社会連携・社会貢献

目標

アクションプラン

Ver.1~Ver.5

教育・学生支援 研究

- A.C.E.Kanoyaの育成
- 我が国固有の身体文化の洗練
- イノベーションによる限界への挑戦・持続可能な未来社会の創造

国際化

- 世界とつながる教育と研究の展開

社会連携・社会貢献

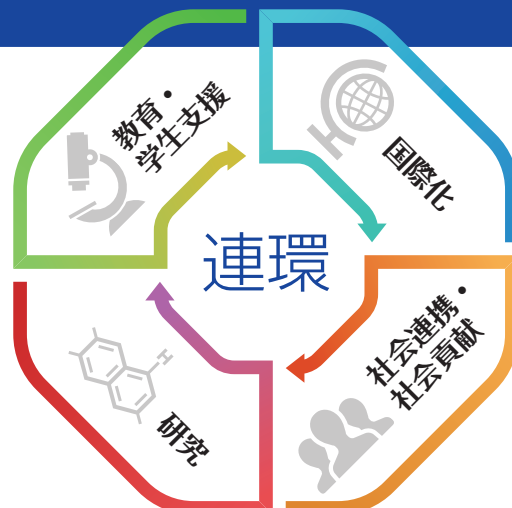
- スポーツ&ヘルスプロモーションによる社会イノベーション
- スポーツ、武道、体育及び健康づくりによる持続可能な未来社会の創出



期ごとの中期目標・中期計画

アクションプラン Ver.1~Ver.5

NIFS NEXT30のミッション全体の実現に向け、現行の中期目標・中期計画（6年単位）をアクションプランとして策定し、2022年4月からの第4期中期目標・中期計画を“NIFS NEXT30アクションプランVer.1”として位置づけます。また、第8期まで期ごとにバージョンアップを行い、NIFS NEXT30のミッション全体の実現をめざします。



かのや
国立大学法人 鹿屋体育大学
NIFS NATIONAL INSTITUTE OF FITNESS and SPORTS in KANOYA



〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1 <https://www.nifs-k.ac.jp/>

＜別添資料＞

平成 28 - 31 年度の外部評価委員会等

<別添資料>

1. 外部評価委員会

【平成 31（令和元）年度】

平成31年度／令和元年度

役割	氏名	所属	職名
外部評価委員	會田 宏	筑波大学	体育系 教授
外部評価委員	土屋 裕睦	大阪体育大学	体育学部 教授
外部評価委員	久保田 潤	独立行政法人 日本スポーツ振興センター	国立スポーツ科学センター スポーツ開発事業推進部 研究員

【平成 30 年度】

平成30年度（2019.2.1現在）

役割	氏名	所属	職名
外部評価委員	伊藤 雅充	日本体育大学	体育学部 教授
外部評価委員	久保田 潤	独立行政法人 日本スポーツ振興センター	国立スポーツ科学センター スポーツ開発事業推進部研究員
外部評価委員	渡部 丞	公益財団法人 日本スポーツ協会	スポーツ指導者育成部 育成課
外部評価委員	會田 宏	筑波大学	体育系 教授
外部評価委員	土屋 裕睦	大阪体育大学	体育学部 教授
外部評価委員	川南 匡人	株式会社東大阪スタジアム	企画部
外部評価委員	永江 恒志	NPO法人 かのや健康・スポーツクラブ	事務局長
外部評価委員	内倉 康孝	鹿屋市役所	ふるさとPR課
外部評価委員	幸福 恵吾	特定非営利活動法人 DREAMウェルネス	代表



体育大学 土屋 裕睦教授、また、学生のスポーツ指導実習における外部評価委員の鹿屋市役所 内倉 康孝様、株式会社東大阪スタジアム 川南 匡人様、かのや健康・スポーツクラブ 永江 恒志様、NPO法人DREAMウェルネス 幸福 恵吾様の計8名の方々にご参加いただきました。

本学、教育企画・評価室金高室長から AP に関する取り組みについて説明がされ、なかでも AP 始まって以来開発をすすめてきたスポーツ指導コンピテンシーを可視化する客観的評価テスト（SCCOT：スコット）や今年度完成した新入生パンフレット（通称：忍者パンフレット）についてのご意見をいただきました。また、スポーツ指導実習においても本学の学生にとって必要なリーダーシップや実技力に関することなど教育の質保証の充実を図る本学の取組を多面的に評価していただき、貴重なご意見をいただくことができました。

◆平成 30 年度第 1 回外部評価委員会：2018 年 7 月 10 日本学にて開催いたしました。本会議では、外部評価委員として、鹿屋市役所の内倉康孝様、株式会社東大阪スタジアムの川南匡人様、かのや健康・スポーツクラブの永江恒志様、NPO 法人 DREAM ウェルネスの幸福恵吾様に参加いただきました。

本学、教育企画・評価室金高室長から AP に関する取り組みについて説明がされた後、取り組みについて多くの意見をいただきました。また、スポーツの実践的指導力を向上させるスポーツ指導実習の取り組みについても、多面的に意見をいただくことができました。新たな気づきがあり、今後の課題・方向性を決める貴重な会となりました。

◆平成 30 年度第 2 回外部評価委員会：2019 年 3 月 5 日、本学と東京サテライトキャンパスをテレビ会議システムで結び、を開催いたしました。

今回の会議では、AP 全体としての取組とスポーツ指導実習における外部評価をしていただくため、AP の外部評価委員である日本体育協会スポーツ指導者育成部育成課 渡辺 丞様、日本スポーツ振興センタースポーツ開発事業推進部 久保田 潤様、筑波大学 會田 宏教授、大阪

【平成 29 年度】

◆平成 29 年度第 1 回外部評価委員会：2018 年 3 月 13 日に本学と東京サテライトキャンパスにてが開催されました。前回と同様にテレビ会議システムにて、鹿屋と東京を繋ぎ開催いたしました。

役割	氏名	所属	職名
外部評価委員	伊藤 雅充	日本体育大学	体育学部 教授
外部評価委員	久保田 潤	独立行政法人 日本スポーツ振興センター	国立スポーツ科学センター スポーツ開発事業推進部研究員
外部評価委員	渡部 丞	公益財団法人 日本体育協会	スポーツ指導者育成部 育成課
外部評価委員	會田 宏	筑波大学	体育系 教授



外部評価委員会には、外部評価委員を担当いただいている日本体育協会スポーツ指導者育成部育成課の渡辺 丞様、日本スポーツ振興センタースポーツ開発事業推進部の久保田 潤様、筑波大学の會田 宏教授に参加いただきました。また、スポーツ指導者評価テスト（仮称）の開発に協力いただいている株式会社リアセック代表取締役 松村直樹様、主任研究員 石川純一様にも参加いただきました。

本学、教育企画・評価室金高室長から AP に関する取り組みの報告がされた後、参加いただいた先生方から多くの意見を賜り、来年度に向けた取り組みの方向性が明確になりました。外部からの評価をいただくことで、学内だけの評価とは違った視点からご意見をいただけたことは大変参考になりました。

【平成 28 年度】

◆平成 28 年度第 1 回外部評価委員会：2017 年 2 月 27 日（月）、鹿屋体育大学・大学教育再生加速プログラム（AP）

役割	氏名	所属	職名
外部評価委員	岡 達生	公益財団法人 日本体育協会	スポーツ指導者育成部 部長
外部評価委員	伊藤 雅充	日本体育大学	児童スポーツ教育学部 准教授
外部評価委員	久保田 潤	独立行政法人 日本スポーツ振興センター	国立スポーツ科学センター スポーツ開発事業推進部研究員



に係るが開催されました。第 1 回となる今回は、本学と東京サテライトキャンパスをテレビ会議システムで繋いで開催となりました。外部評価委員に、岡達生様（日本体育協会スポーツ指導者育成部部長）、久保田潤様（日本スポーツ振興センター：スポーツ開発事業推進部研究員）、伊藤雅充様（日本体育大学：児童スポーツ教育学部准教授）をお迎えして、本学、大学教育再生加速プログラム（AP）の一つの柱でもある「スポーツ指導力テスト」の開発について活発な議論が行われました。初めての外部評価委員会となりましたが、本学の AP の取り組みについても積極的に意見交換され、非常に有意義な会となりました。今回の外部評価委員会にて明らかになった課題や改善点について再考・検討し、改革に取り組む足がかりをえることができました。

2. 体育・スポーツ系大学連絡協議会

【平成 31（令和元）年度】

平成31年度／令和元年度			
役割	氏名	所属	職名
委員	栗原 洋和	公益財団法人 日本スポーツ協会	スポーツ指導者育成部 活動推進課 課長
委員	遠藤 俊郎	山梨学院大学	スポーツ科学部 学部長
委員	荻山 靖	山梨学院大学	スポーツ科学部 スポーツ科学科 専任講師

大学と本学、日本スポーツ協会の担当者を交えて今回のテスト結果に対するご意見やご感想、分析結果等を話し合いました。

3. 教育企画・評価室

【平成 31（令和元）年度】

役割	氏名	分野等 (関係委員会)	職名
室長	金高 宏文	スポーツ・武道実践科学系 (教務委員会)	教授
副室長	中垣内 真樹	スポーツ生命科学系 (FD推進専門委員会)	教授
室員	前阪 茂樹	スポーツ・武道実践科学系 (AOセンター長)	教授
室員	前田 博子	スポーツ人文・応用社会科学系 (キャリア形成支援室長)	教授
室員	国重 徹	スポーツ人文・応用社会科学系 (国際交流センター長)	教授
室員	和田 智仁	スポーツ人文・応用社会科学系 (スポーツ情報センター長)	准教授
室員	中本 浩揮	スポーツ人文・応用社会科学系	准教授
室員	萩原 悟一	スポーツ人文・応用社会科学系	講師
室員	吉原 大智	経営戦略課 企画評価係	係長
室員	有馬 正人	教務課	事務局次長兼教務課長

◆令和2年2月18日（火）、本学と東京サテライトキャンパスをテレビ会議システムで結び、令和元年度第1回スポーツ系大学連絡協議会を開催しました。本学が開発したスポーツコーチング・コンピテンシーテスト（以下、SCCOT）について、SCCOTを実際に受験してくださったスポーツ系

【平成 30 年度】

役割	氏名	分野等 (関係委員会)	職名
室長	金高 宏文	スポーツ・武道実践科学系 (教務委員会)	教授
副室長	中垣内 真樹	スポーツ生命科学系 (FD推進専門委員会)	教授
室員	前阪 茂樹	スポーツ・武道実践科学系 (入試委員会)	教授
室員	国重 徹	スポーツ人文・応用社会科学系 (キャリア形成支援室)	教授
室員	和田 智仁	スポーツ人文・応用社会科学系	准教授
室員	中本 浩揮	スポーツ人文・応用社会科学系	准教授
室員	萩原 悟一	スポーツ人文・応用社会科学系	講師
室員	有馬 正人	教務課	事務局次長兼教務課長
室員	吉原 大智	学術図書情報課 情報システム係	係長

【平成 29 年度】

役割	氏名	分野等 (関係委員会)	職名
室長	金高 宏文	スポーツ・武道実践科学系 (教務委員会)	教授
副室長	国重 徹	スポーツ人文・応用社会科学系 (キャリア形成支援室)	教授
室員	前阪 茂樹	スポーツ・武道実践科学系 (入試委員会)	教授
室員	中垣内 真樹	スポーツ生命科学系	教授
室員	和田 智仁	スポーツ人文・応用社会科学系 (FD推進専門委員会)	准教授
室員	中本 浩揮	スポーツ人文・応用社会科学系	准教授
室員	興谷 謙吾	スポーツ生命科学系	講師
室員	吉原 大智	学術図書情報課 情報システム係	主任
室員	有馬 正人	教務課	課長
室員	有馬 規雄	経営戦略課	副課長

【平成 28 年度】

役割	氏名	分野等 (関係委員会)	職名
室長	金高 宏文	スポーツ・武道実践科学系 (教務委員会)	教授
副室長	国重 徹	スポーツ人文・応用社会科学系 (キャリア形成支援室)	教授
室員	前阪 茂樹	スポーツ・武道実践科学系 (入試委員会)	教授
室員	和田 智仁	スポーツ人文・応用社会科学系 (FD推進専門委員会)	准教授
室員	中本 浩揮	スポーツ人文・応用社会科学系	准教授
室員	興谷 謙吾	スポーツ生命科学系	講師
室員	吉原 大智	学術図書情報課 情報システム係	主任
室員	有馬 規雄	経営戦略課	副課長
室員	有馬 正人	教務課	課長

4. 教育企画・評価室スタッフ

【平成 31（令和元）年度】

役割	氏名	所属	職名
スタッフ	近藤 亮介	教務課	特任助教
スタッフ	岡田 あゆみ	教務課	事務補佐員

【平成 28 年度～平成 30 年度年度】

役割	氏名	分野等 (関係委員会)	職名
スタッフ	近藤 亮介	教務課	特任助教
スタッフ	濱中 良	教務課	特任研究員
スタッフ	岡田 あゆみ	教務課	事務補佐員

<付 録>

AP-News Vol.1 ~ Vol.11



NIFS-AP News

2017.3

vol.1

AP: Acceleration Program for University Education Rebuildingの略称

APとは…「確かな人材養成ができる鹿屋体育大」への教育改革



松下雅雄 学長

現在、社会において求められる人材は高度化・多様化しております。大学は待ったなしで改革に取り組み、学生の能力を最大限に伸ばし、社会の期待に応えるため、これまで以上に教育内容を充実させ、学生が徹底して学ぶことのできる環境を整備する必要があります。鹿屋体育大学は、平成28年度、文部科学省が公募した大学教育再生加速プログラム(AP)「高大接続改革推進事業—『テーマⅤ 卒業時における質保証の取り組みの強化』」に応募し、採択(応募116件、採用19件、平成28年11月7日交付決定)されました。

平成31年度までの取組期間で、本学の教育目標を踏まえて「確かな人材養成ができる」ように真摯に考え迅速に取り組んでいきます。学生諸君においても、大学での学修及び課外活動等を充実させ、社会へと旅立てるように本事業への積極的かつ真摯な取組を期待します。

改めて、卒業時までに身につける能力を確認しよう…

以下は、本学学生が卒業時までに身につけなければならない具体的な12の能力を示しています。APでは、これらの能力がどのような活動で、確実に身につけているかを確認できるよう、学修行動や学修成果等の可視化を行い、改善に繋がる取組を実施します。

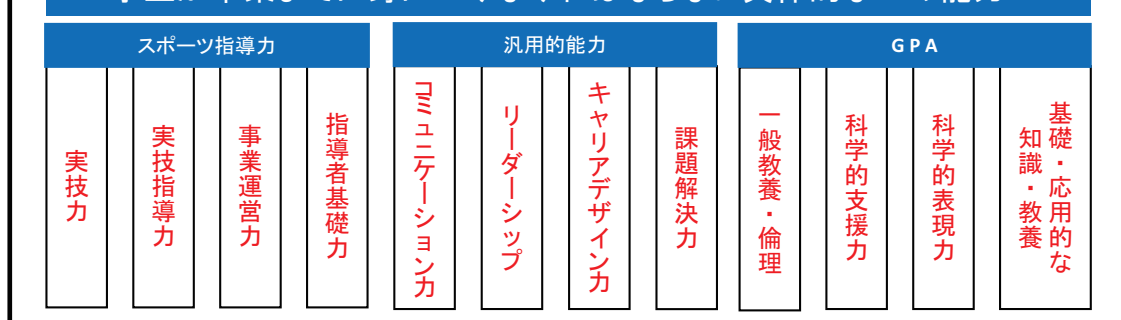
【大学の教育目標】

スポーツ・武道及び体育・健康づくりにおける
実践的かつ創造的で市民性、国際性を備えたリーダーを育てる

段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と
社会人基礎力(汎用的能力)の養成

多様なスポーツリーダーとしての自覚と
実践的なスポーツ指導力の養成

学生が卒業までに身につけなければならない具体的な12の能力※

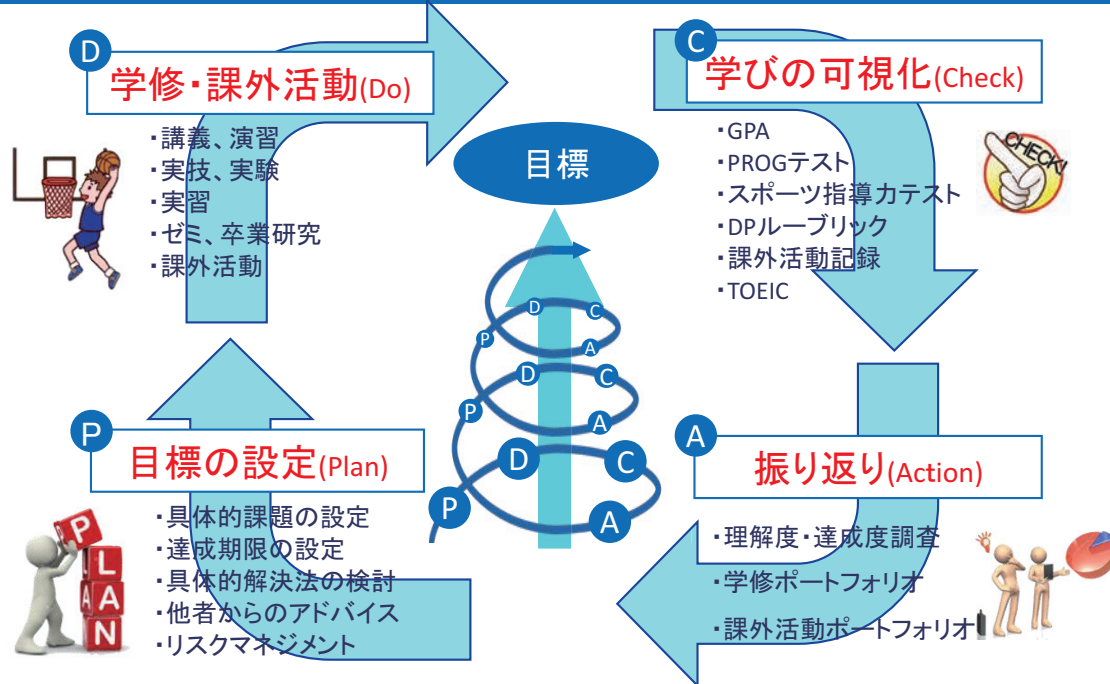


※: 12の能力は卒業認定・学位授与の方針(DP: Diploma Policy)で示されているものです

大学生活での具体的な学修行動や自主行動



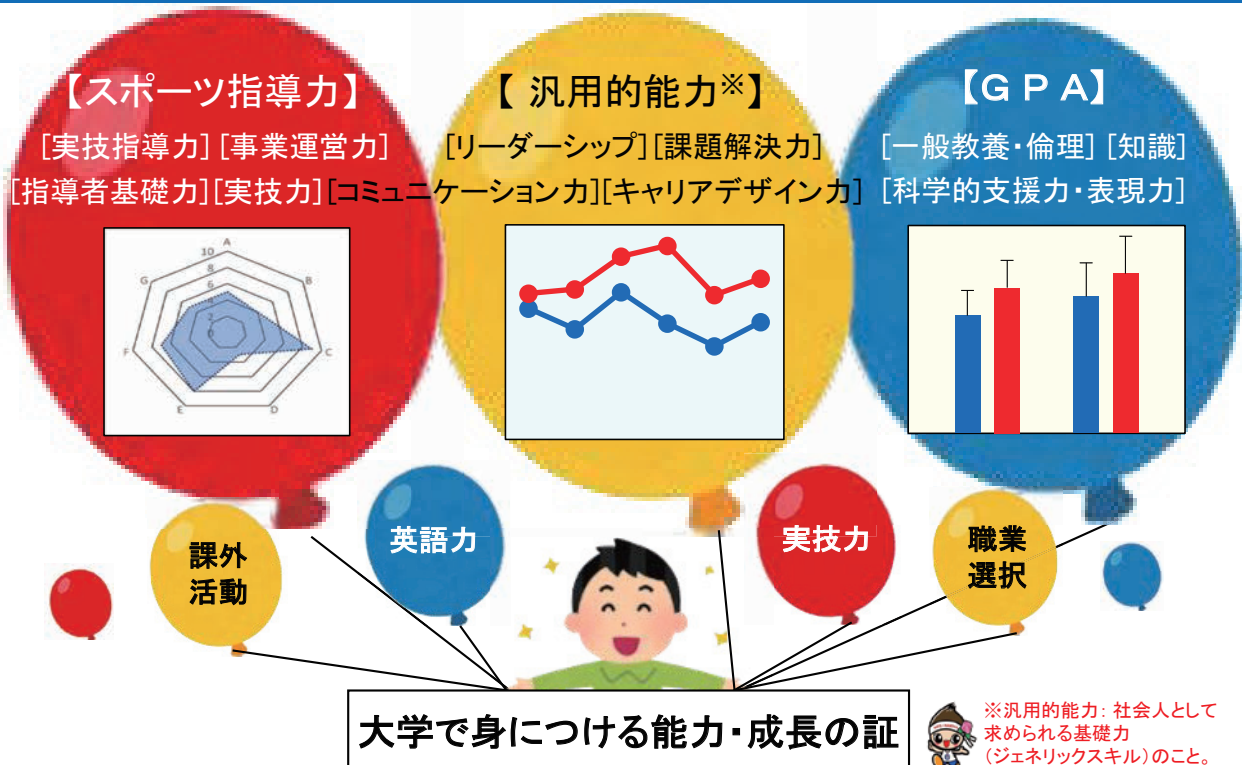
12の能力を身につけるためには…継続的にPDCAを回すことが重要！



課外活動(部活動)での目標はもちろんのこと、大学生活でどんな能力を身につけ、どんなキャリアを形成していくのか…できるだけ早いうちから考え、目標を立てることで、充実した大学生活を送れるようになります。また、上のPDCAサイクルを継続的に回すことで、目標達成に向けてスムーズに行動することができます。

教育企画・評価室は、ポートフォリオ等を用いて学生の「目標の設定」「学びの可視化」「振り返り」を支援します。

学びや成長を可視化する3つの柱



大学で身につけている能力や学びの軌跡は、大きく次の3つ項目から可視化します。①基礎的・応用的な知識や技能の修得度を示す授業科目群毎のGPA、②実践的なスポーツ指導力を示す指導者基礎力、実技指導力、事業運営力、③社会に出てから求められる汎用的能力(※)であるリテラシーとコンピテンシー。その他にも、大学で身につけるべき能力や学びの軌跡について可視化を図ります。

汎用的能力・リテラシー※の成長の軌跡（H26年度入学生：1年次→3年次）

※リテラシー：知識を活用して問題を解決するチカラ。

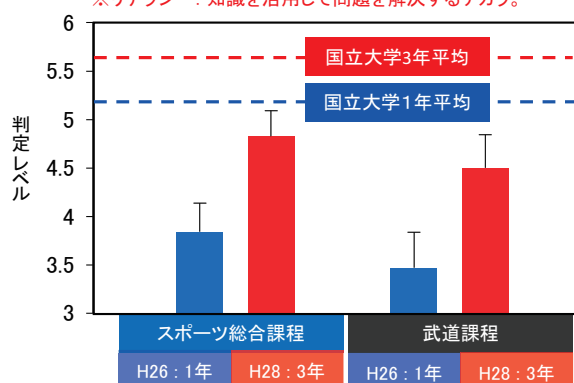


図1. 各課程におけるリテラシーの総合結果の変化

現4年生が1年次(H26年度)と3年次(H28年度)にPROGテストを受験した結果です。リテラシー項目では、スポーツ総合課程・武道課程ともに大幅にレベルが上昇しています(図1)。全ての項目で伸びており、特に「構想力※」(図2, 3)が伸びています。しかし、他の国立大学生と比べると本学の学生のリテラシーは低いのが現状です。特に「情報収集力」「情報分析力」「言語処理能力※」において大きな差が見られ、今後の改善が期待されます(図2, 3)。



※構想力：さまざまな条件・制約を考慮して、解決策を吟味・選択し、具体化する力

※言語処理能力：語彙や同義語、言葉の係り受けなど日本語の運用に関する基礎的な能力

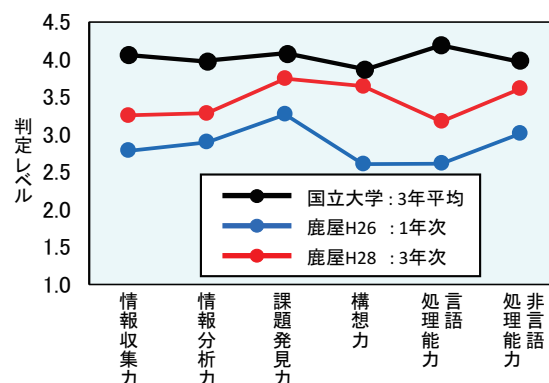


図2. スポーツ総合課程のリテラシー項目の変化

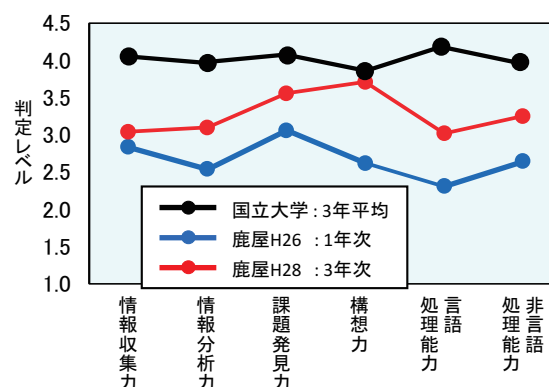


図3. 武道課程のリテラシー項目の変化

汎用的能力・コンピテンシー※の成長の軌跡（H26年度入学生：1年次→3年次）

※コンピテンシー：人と自分にベストな状態をもたらそうとするチカラ。

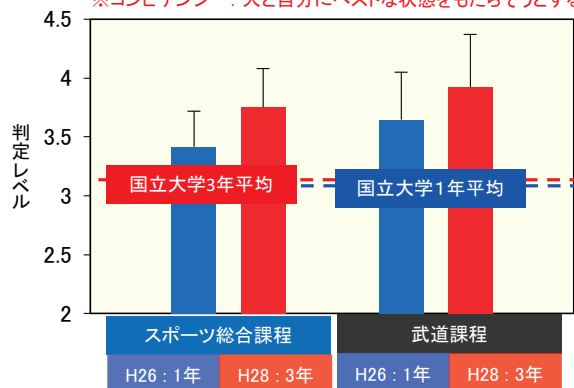


図4. 各課程におけるコンピテンシー総合結果の変化

コンピテンシー項目も、スポーツ総合課程・武道課程ともに1年次から3年次にかけてレベルが上昇しています(図4)。特に「対自己基礎力」と「対課題基礎力」が伸びています(図5, 6)。

他の国立大学生と比べてみると、本学の学生は1年次から全般的にコンピテンシーが高いことがわかります。特徴としては、「対人基礎力」「対自己基礎力」が非常に高いことがわかります。しかし、細かくみると「統率力※」「課題発見力」「計画立案力」が低いことがわかります(図5, 6)。

リテラシー同様、今後の改善が期待されます。



※統率力：場を読み、目標に向かって組織を動かす力

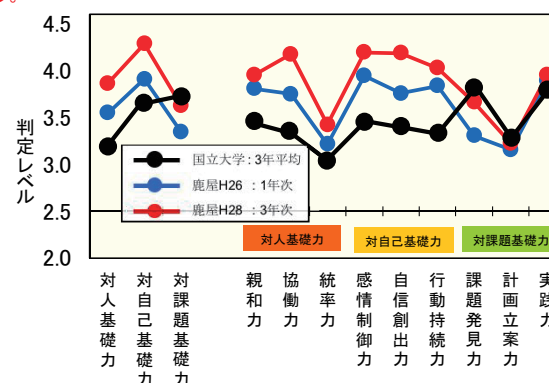


図5. スポーツ総合課程のコンピテンシー項目の変化

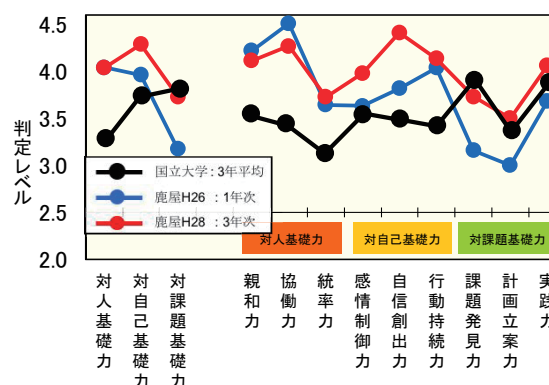


図6. 武道課程のコンピテンシー項目の変化

GPAとは…総合GPAと科目群GPAで、授業での学びを可視化

GPA(=Grade Point Average)とは、アメリカ等の大学で導入されている成績評価システムで、それぞれの授業科目にGP(=Grade Point)を付与し、授業科目毎の単位あたり平均ポイント(pt)を出したものです。

本学では、授業科目毎に基本A・B・C・Dの4段階の評価を行っています。GPAは、授業科目を越えて、全科目や科目群毎での学びや成長を評価するために導入しています。

平成29年度からは全科目の総合GPAに加えて授業科目群毎に算出し、科目群GPAもフィードバックします。

Q1. 各授業科目のGP(グレード・ポイント)とは...

評定	評点	GP	評価基準
A	90-100点	4.0pt	到達目標を達成し、
	80-89点	3.0pt	優秀な成績を修めている。
B	70-79点	2.0pt	到達目標を達成している。
C	60-69点	1.0pt	到達目標を最低限達成している。
D	0-59点	0.0pt	到達目標を達成していない。

(注)履修放棄は「K」で表示し、「0pt」で計算される。

総合GPAが高いと...

総合GPAが、**3.5以上(※)** があると、以下の点で有利になります。

- ①卒業時点で、学生表彰の候補
- ②早期卒業、飛び級の要件
- ③授業料免除、奨学金の選考資料で有利。

※平成27年度以前の入学生は、修得した授業科目のうち、「A」の数が90%以上でも対象になります。

逆に総合GPAが、**1.5未満**になると、大学から修学指導が実施されます。

Q2. 科目群GPAとは...

例) 基礎科目Aの場合

運動生理学 (2単位) 90点(4.0pt)	解剖生理学 (2単位) 85点(3.0pt)	バイオメカニクス (2単位) 73点(2.0pt)
------------------------------	------------------------------	---------------------------------

$$(4.0\text{pt} \times 2\text{単位} + 3.0\text{pt} \times 2\text{単位} + 2.0\text{pt} \times 2\text{単位})$$

3科目 × 2単位

$$= 3.0\text{pt} \quad \text{科目群GPA}$$

Q3. 総合GPAとは...

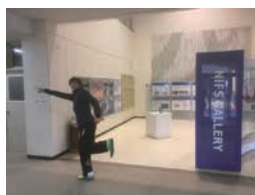
履修した科目の[GP × 単位数]の合計

総単位数

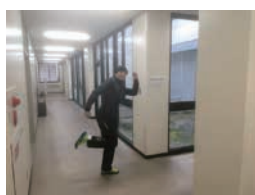
$$= \text{総合GPA}$$

教育企画・評価室とは...

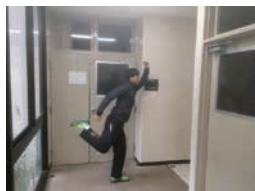
教育企画・評価室までの道のり



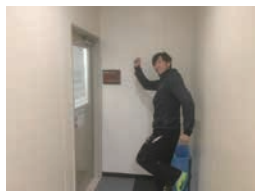
① まずは大学院棟を左に♪



② 5mほど進んで右に♪



③ 突き当りを右に♪



④ ゴール!!

NIFS-AP Newsの第1号を最後まで読んでいただきありがとうございました。

平成28年10月から教育企画・評価室が大学院棟1階(旧マルチメディア室)に開設されております。しかし、分かりにくい場所にありますので、御用の際には左の写真を手がかりに来室していただければと思います。

教育企画・評価室は、主に学生の学びや成長の可視化をGPAやPROGテストなど、振り返りシート(ポートフォリオ)から行い、鹿屋体育大学における教育の質保証や改革を促進します。このNewsでは、その取組状況をみなさんにわかりやすくお伝えしていきます。

なお、第2号のNEWSは、2017年秋頃を予定しております。今後ともよろしくお願いします。 [濱中 良・金高宏文]

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

<http://ap.nifs-k.ac.jp>

<企画・編集>

濱中 良・近藤亮介・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPも開設されているのでご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp>



発行: 鹿屋体育大学 教育企画・評価室

NIFS-AP News

2017.10
VOL.2

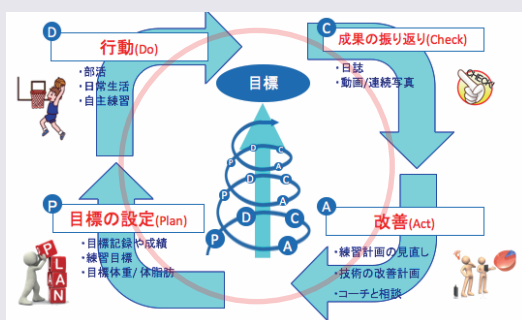
～鹿屋体育大での成長を可視化する～

- p.1 PDCAサイクル
- p.2 卒業までに身につけるべき
12の資質・能力
- p.3 学修ポートフォリオ
- p.4 学生の主体性

あっという間の大学生活・・・充実したものにするには？

夏休みが終わり後期がスタートしました。時間があっという間に過ぎてしまった・・・という人も多いのではないのでしょうか。ところで、大学に入学した目的や目標を忘れていませんか。改めて思い出したり、再設定するためにも、これまでの大学生活を振り返り、現状を把握し、残りの時間をどのように過ごし、どのように成長したいのか、考えてみましょう。また、目標を立て(Plan)、行動し(Do)、振り返り(Check)、改善していく(Act)、PDCAサイクルを回しているかも、自分自身で振り返ってみましょう。今後、本学では、学生の皆さんが大学生活をより充実させ、成長していることを確認できる仕組みを作り、サポートを行っていきます。Vol.2では、来年度から始まる予定の学修成果の可視化について紹介していきます。

実は体育大生は得意!? PDCAサイクルの回し方

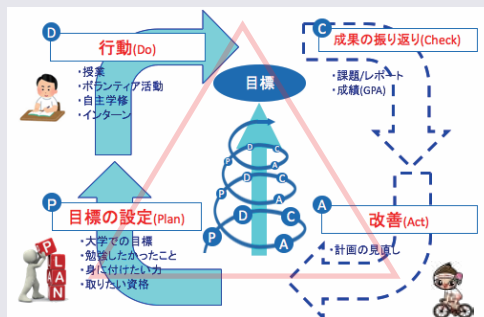


部活動のPDCAサイクル

左の図を覚えているでしょうか。Vol.1で出てきたPDCAサイクルの図です。今回は、部活動に合わせて内容を変更しています。多くの皆さんは日々、目標(Plan)に向かってトレーニングを行い(Do)、動画で動きを確認したり、日誌を書いたりしながら(Check)、技術の修正や、トレーニング内容の再考(Act)をしていると思います。まさに部活動で行なっているサイクルがPDCAサイクルであり、社会に出てからも非常に重要な取り組みです。PDCAサイクルを円滑、継続的に回せることは体育大生の強みとなります。

しかし・・・日々の学修(※)においてはPDCAサイクルを回せているでしょうか。特に授業で、学修の振り返り(Check)や改善(Act)をするところで何を行なっているか、困っていませんか。そこで大学では、学生の皆さんが現在どれだけ授業を通して力をつけているかを簡単に確認(Check)できる仕組み、「学修成果の可視化」を行います。具体的には次のページで説明していきます。

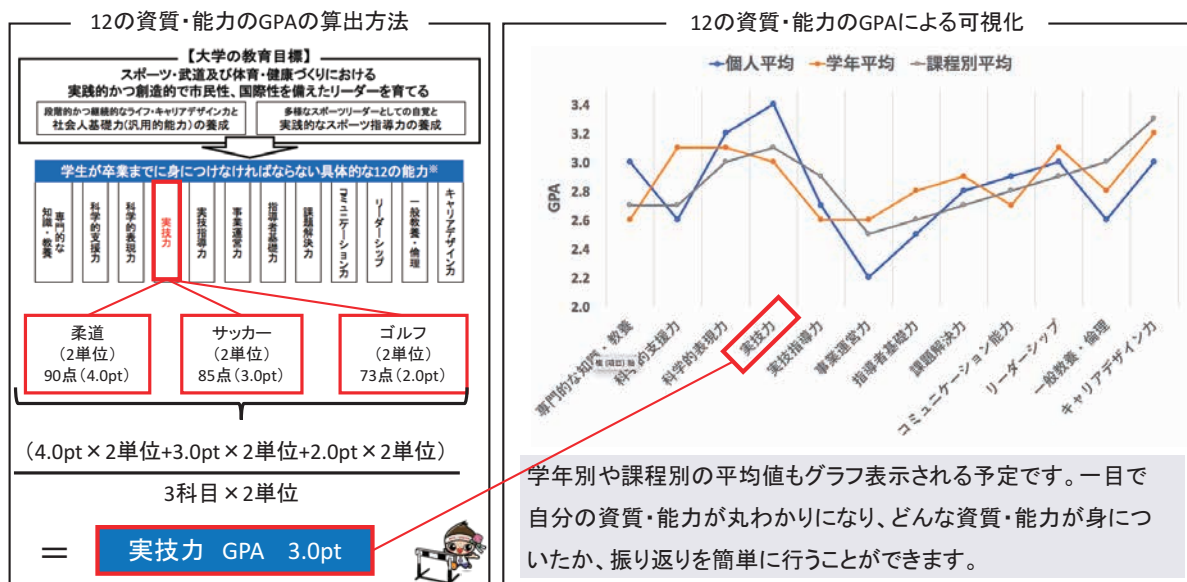
※学修とは・・・学問(知識や技能)を自ら進んで身につけることです。ちなみに「学習」は、学問(知識や技能)を習うという意味です。大学での学びは、「学修」であるとされています。(文科省.2012)



学修(主に授業)のPDCAサイクル

一目でわかる！？ 大学で身につけた資質・能力の可視化

これまでの成績通知書では、科目群毎にGPAが見れるようになっていましたが、来年度から卒業時までには身につけるべき12の資質・能力別にもGPAが表示されるようになります(予定)。授業を通して身につけた資質や能力が明らかになり、何が身につけていて何が足りないのか一目で判断できるようになり、振り返り(Check)が簡単にできるようになります。これに加えて汎用的能力や実践的スポーツ指導力も可視化していきます。

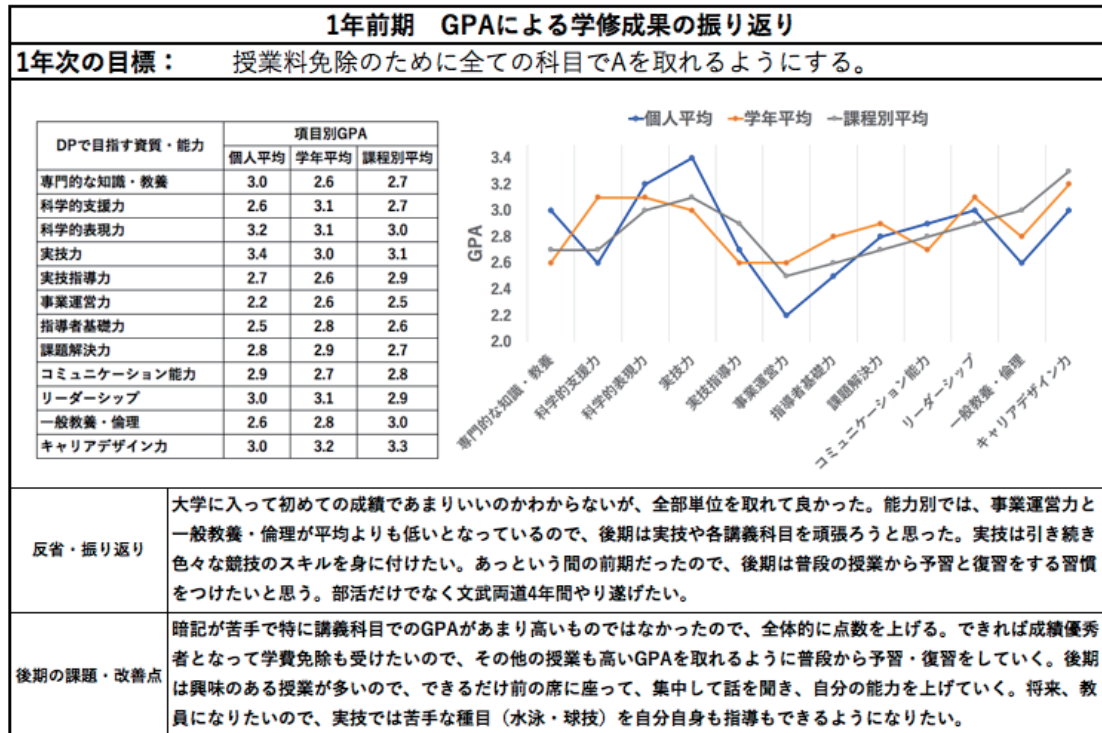


卒業までに身につけるべき12の資質・能力の定義

DPで目指す資質・能力	解説
専門的な知識・教養	スポーツ等の指導者やリーダーに求められる基礎的・応用的な知識ならびに幅広い教養のこと。
科学的支援力	アスリートへの科学的サポート、生涯スポーツにおける健康科学的サポートを行うことができる仮説・企画力、実験・調査力、分析・考察力、説明力を総合した資質・能力のこと。
科学的表現力	スポーツ等の専門的な知識・教養を総合的に活用し、論理的にレポート・論文等を作成できるとともに、他者に伝えるように表現できる資質・能力のこと。
実技力	スポーツ、武道、健康づくりの運動等を自ら学び、その習得・改善過程を理解しながら目指すパフォーマンスを達成することができる(模範できる、身体表現できる)資質・能力のこと。
実技指導力	スポーツ等の指導を行うことができる示範力、評価力、処方力、コーチング等を総合した資質・能力のこと。
事業運営力	市民の健康・体力づくり等をコーディネートし、スポーツクラブ等の事業運営やプログラム開発を行うことができるプログラム等開発力、プログラム等運営力、事業コーディネート力、組織・施設マネジメント力を総合した資質・能力のこと。
指導者基礎力	指導をする相手(プレーヤー)の意思を尊重しながらも、プレーヤーの人間性・関係性・有能さ・自信を育てる指導をするための基礎的な資質・能力のこと。
課題解決力	本質的な問題を発見し、解決策を考え、計画し、それを実行、成果がでるまでPDCA サイクルを円滑に回し、課題解決に向けた取り組みを実施できる資質・能力のこと。
コミュニケーション力	「一方的に意思を伝達する」だけでなく、異なる意見や感覚を持つ人々と交わり、耳を傾け、柔軟に自らの意見を変容させる「対話をする」の資質・能力のこと。また、英語でのコミュニケーション力も含む。
リーダーシップ	集団に何らかの目標を設定し、集団を統率しつつ、人々の意欲を高め、成長させながら、その課題を遂行・先導する資質・能力のこと。
一般教養・倫理	社会で必要とされ、身につけていることが望ましい基本的な知識や物事の良し悪しを判断し、人として守るべき秩序を守れる資質・能力のこと。
キャリアデザイン力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関係を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく資質・能力のこと。

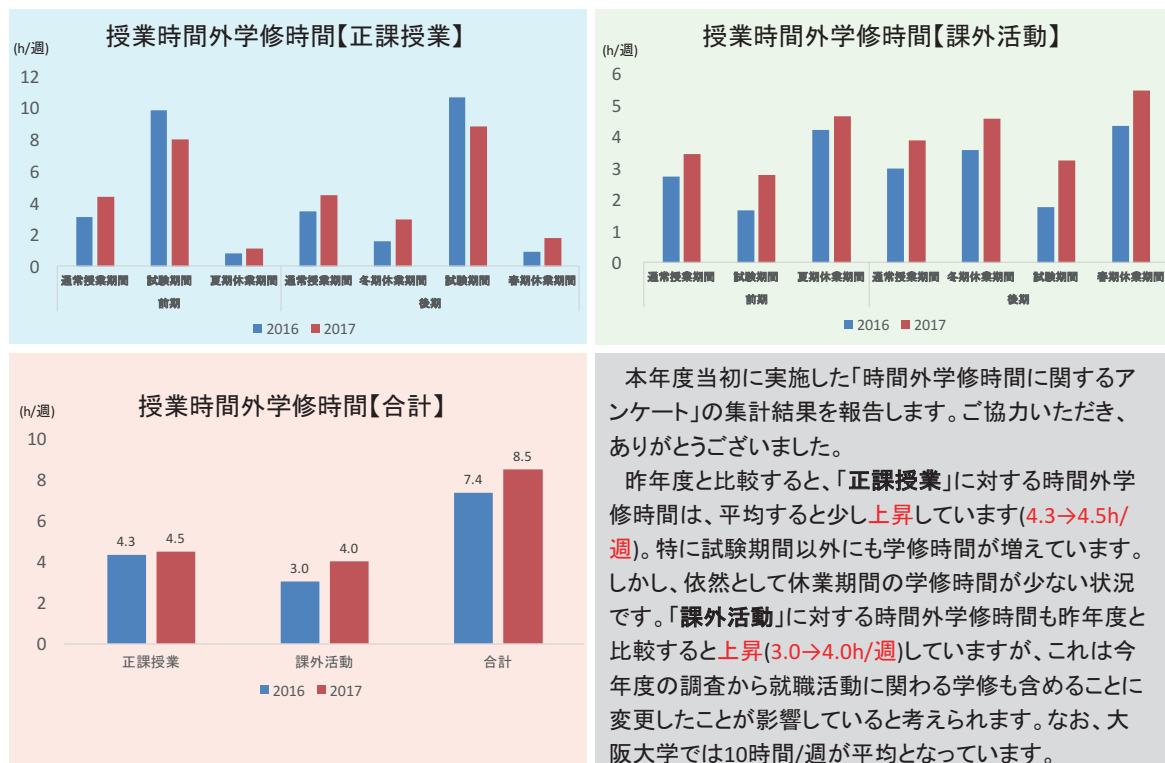
卒業までに身につけるべき12の資質・能力の具体的な定義を確認しておいてください。これらの資質・能力を身につけることで、鹿屋体育大学が目指す「スポーツ・武道及び体育・健康づくりにおける実践的かつ創造的で市民性、国際性を備えたリーダー」となることができるはずです。授業を受ける際にも、「今は何を身につけているのか」を意識するようにしてください。

学修ポートフォリオ：成長の振り返りと展望

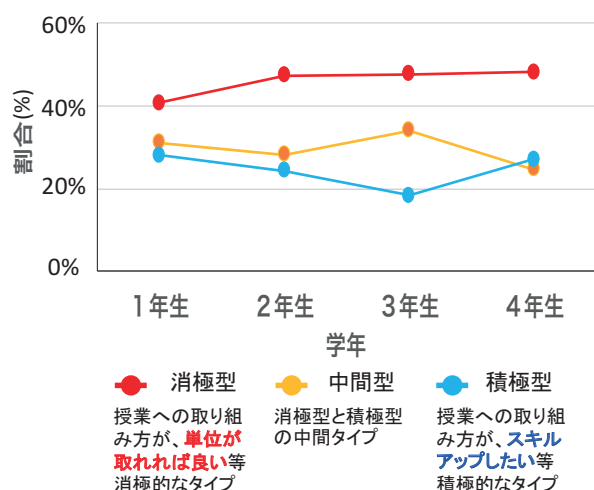


来年度からは、学修成果と振り返り及び展望を記録し、成長の足跡や展望を確認する取り組み(学修ポートフォリオ)を実施する予定です。ポートフォリオとは、紙挟みなど、記録や資料を貯めていけるもののことを指しています。学修ポートフォリオを作成することで、大学で何を学び、どのように成長しているのか、確認することができます。具体的には、年間の目標、半期の目標を立ててもらい、半期ごとに学修の成果(成績)を見て、振り返りを行ってもらいます。学修の成果(成績)も見やすくなるため(p.2上段参照)、振り返りも行いやすくなると思います。学修の他にも課外活動(部活動やボランティア等)での学びも可視化できるポートフォリオも現在検討しています。

授業以外でどう学んでいますか？



授業への取り組み方：2年生・3年生が鍵!?



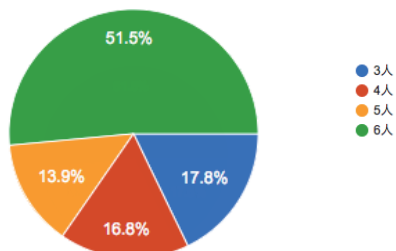
左の図は、本年度始めに時間外学修時間のアンケートと同時に実施した「授業への取り組み方に関するアンケート」の結果をまとめたものになります。結果は、**授業への取り組み方が「消極的な学生が全体的に多い」**結果となりました。また、授業に積極的な学生も2年・3年と学年が上がるにつれて、全体の割合が減り、4年生で増えるという結果になりました。2年・3年と学年が上がるにつれて大学生活に慣れて、授業に対する姿勢が怠惰なものになっている可能性が考えられます。皆さんはどうでしょうか。4年生で再び積極的な学生が増えるのは、卒論や就職活動が始まるからだと考えられます。1～3年生は、自身の授業に対する取り組み方がどんどん消極的になっていないか、以前と比べて見てください。

アンケートの結果とお願い

前回のVol.1を読んでいただき、アンケートに答えてくれた学生の皆さんありがとうございました。8割近い学生の皆さんに読んでいただき、現在行われている大学の教育改革について興味を持ってもらえたようです。バラランの数の正解は6人です。約半数の人が正解という結果でした。今回のVol.2でもバラランが何人いるか探してみてください。今回と前回の両方のアンケートに答えてくれた(バラランの数も正解している)学生の中から抽選でクオカード(500円分)をプレゼントいたします。適当に回答するとわかりますので、しっかりとアンケートに答えるようにしてください。少しでも大学の教育改革に興味を持ってもらえると幸いです。また、大学の教育改革についてもっと知りたい、携わりたいという学生の方がいましたら是非、教育企画・評価室まで足を運んでください。

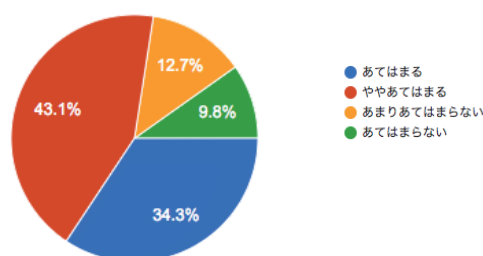
NIFS-AP Newsの中でバラランは何人いるでしょう

101件の回答



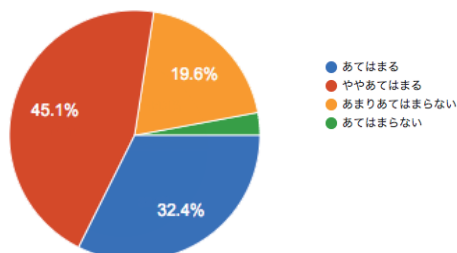
「NIFS-AP News」を全て読みましたか

102件の回答



大学の教育改革について興味を持つことができた

102件の回答



<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyomu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

濱中 良・近藤亮介・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPも更新されているのでご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp>



発行：鹿屋体育大学 教育企画・評価室

NIFS-AP News 2018.5 VOL.3

教員から体育大生へのメッセージ

スポーツ・武道及び体育・健康づくりの分野で、有為な人材となれ！

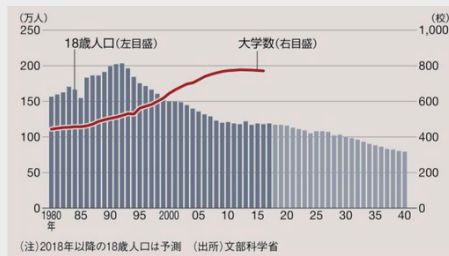
下図にあるように、大学生となる18歳人口は2018年以降、さらに減少傾向に転じます。このことは、本学をはじめ日本の大学のあり方・存在が大きく問われることを意味しています。具体的には、大学の統廃合が待ち構えています。

鹿屋体育大学の卒業生には、スポーツ・武道及び体育・健康づくりの各分野で活躍し、健康で豊かな社会をつくる有為な人材になることが期待されています。それは、日本で唯一の国立の4年制体育大学としての使命でもあります。そのために、本紙のP3にもある本学のディプロマポリシーに掲げている12の資質・能力を大学4年間で着実に身につけ、卒業してもらいたいと考えています。今回の紙面で取り上げている学修ポートフォリオは、そのような「学生の学び・成長・挑戦」を支援するものです。大学生は「生徒」でなく「学生」です。自ら学ぶことによって、新たな何かが生み出されてくると思います。



森 司朗 理事・副学長
(教務委員長)

この大学4年間で、いかに主体的に行動できるかが社会に出て活躍するために大切なことになってきます。そのためには皆さんが、自らの課題を見つけて、挑戦し続ける大学生活を送っていただけることを期待しております。大学は皆さんの学び・成長・挑戦を全力でサポートします。



自己の能力を鹿屋体育大学で開花させてください

体大生の皆さん、こんにちは。心理学系の授業を担当している中本浩揮(なかもとひろき)です。

今回のAP通信から「教員から学生へのメッセージ」という欄が作られました。この企画は、教員が体大生の皆さんに期待することなどを伝えるものです。私が体大生に期待することは「自己の能力を伸ばす」能力を4年間で今以上に高めてほしいということです。私の体大生の印象は、目標を達成する方法を知っている優れた集団、です。おそらく、小さい頃からスポーツを通してその能力を身に付けてきたのだと思います。ただ、大学に入ってからその能力をほったらかしにしている人を見かけるのも事実です。

大人になればなるほど、様々なパフォーマンスの伸びしろは小さくなります。ただし、小さな伸びが大きな結果の差になるのも大人の世界です。心理学の研究では、伸びるためには、「よく考えられた練習」「根性(意志力)」「自分はまだ成長段階だと信じる心」が必要だとされています。「よく考えられた練習」は、このAP通信でよく書かれているPDCAを上手く行うことで達成されます。「根性」には、自分がやっていることに対する情熱や明確な目標、将来構想が必要です。「伸びることを信じる心」は、毎日の小さな変化に敏感になることで培われます。この3つは皆さんが伸びたときに必ずあったものだと思います。これを思い出しさらに自己の能力を伸ばしてください。



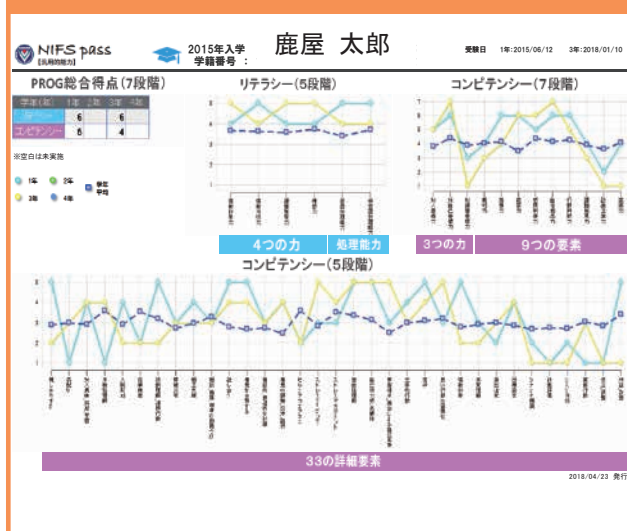
中本 浩揮 准教授

PDCAサイクルを積極的に回そう！

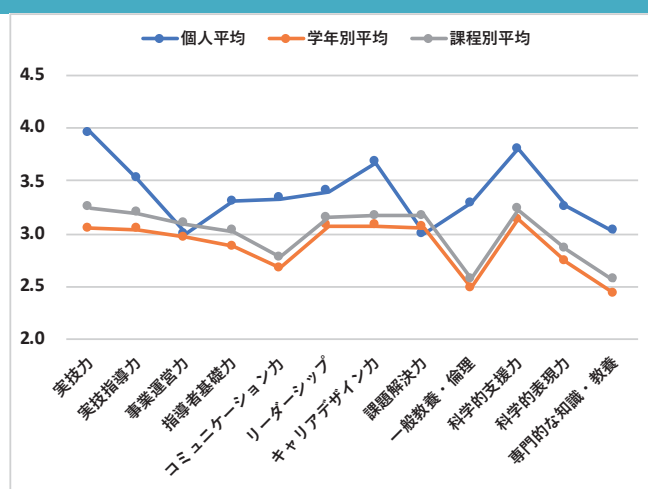
4年生の振り返り例

以下の振り返りは、実際に4年生が振り返りを行なった内容です。成績データを見て、よく振り返りができています。Q3では、具体的な改善について、もう少し詳しく(例：月に一回は自分の振り返り、計画を見つめ直す)書けると、次の改善につながりやすくなります。大学4年間の中で、計画を立てて(Plan)、行動し(Do)、振り返り(Check)、改善する(Act)、PDCAサイクルを習慣化させることは、社会に出てから必ず役立ちます。まずは、半期に一度は、しっかりと自分の大学生活を振り返ってみてください。

GPA



PROG



Q1. データを見て、あなたの**強みや長所**はなんだと思いますか(Check)

A: 情報収集力、課題発見力、構想力、
対自己基礎力、自信創出力

A: 実技力と科学的支援力

Q2. 今後どんな**資質や能力**を伸ばしたり**身につけたい**と思いますか(Plan)

A: リテラシーでは、処理能力が低かったので身につけたい。コンピテンシーでは、対課題基礎力、計画立案力、実践力を身につけたい。

A: 将来、自立した自分で考えて行動ができるようになるために対課題基礎力、計画立案力、実践力を身につけたい。

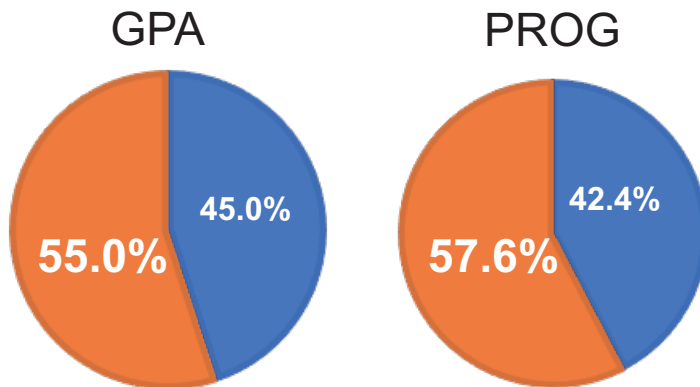
Q3. 具体的に、どんな**手段や方法**で**改善**を目指しますか(Act→Plan)

A: 何に対しても振り返りと、計画をすることがあまりなかったもので、しっかりPDCAサイクルを競技、卒論、就活でやっていきたい。特に、ギリギリまで行動に移さないことが多いので、計画を前もって立てて、早め早めの行動を心がける。

A: これから就活、卒論、競技とやるのがたくさんあるので、しっかり自分のやりたいこと、やるべきことを考えて、計画を立てて、実践していく。また、何もしない時間を減らして、卒論や就活のための勉強時間を創るようにする。

Check → Act → Plan → Do

まだの人は必ず振り返りを！！



はよ！WebClassで
回答しなはれ～！

■ 回答済
■ 未回答

2018年5月8日現在



5/8(火)までの回答率は約45%です。まだ、振り返りができていない人は、必ず振り返りを行うようにしてください。

2017年度の振り返りは、WebClassのアンケート内でしています。今年度中にはWebClass内に、個人毎のレポートを残したり、学修を記録できるe-ポートフォリオシステムを導入する予定にしています。詳細は、次回のAPNewsで紹介します。

卒業までに身につけるべき12の資質・能力の定義

DPで目指す資質・能力

解説

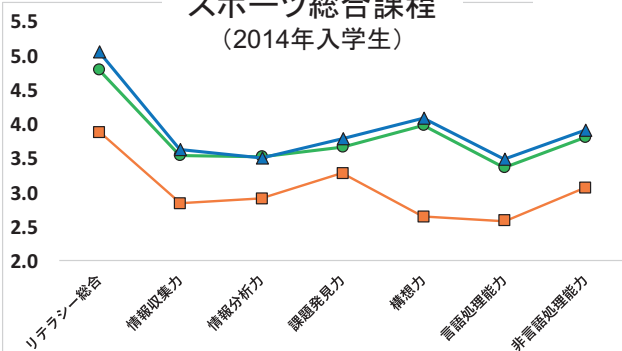
	専門的な知識・教養	スポーツ等の指導者やリーダーに求められる基礎的・応用的な知識ならびに幅広い教養のこと。
	科学的支援力	アスリートへの科学的サポート、生涯スポーツにおける健康科学的サポートを行うことができる仮説・企画力、実験・調査力、分析・考察力、説明力を総合した資質・能力のこと。
	科学的表現力	スポーツ等の専門的な知識・教養を総合的に活用し、論理的にレポート・論文等を作成できるとともに、他者に伝えるように表現できる資質・能力のこと。
	実技力	スポーツ、武道、健康づくりの運動等を自ら学び、その習得・改善過程を理解しながら目指すパフォーマンスを達成することができる(模範できる、身体表現できる)資質・能力のこと。
	実技指導力	スポーツ等の指導を行うことができる示範力、評価力、処方力、コーチング力等を総合した資質・能力のこと。
	事業運営力	市民の健康・体力づくり等をコーディネートし、スポーツクラブ等の事業運営やプログラム開発を行うことができるプログラム等開発力、プログラム等運営力、事業コーディネート力、組織・施設マネジメント力を総合した資質・能力のこと。
	指導者基礎力	指導をする相手(プレーヤー)の意思を尊重しながらも、プレーヤーの人間性・関係性・有能さ・自信を育てる指導をするための基礎的な資質・能力のこと。
	課題解決力	本質的な問題を発見し、解決策を考え、計画し、それを実行、成果がでるまでPDCA サイクルを円滑に回し、課題解決に向けた取り組みを実施できる資質・能力のこと。
	コミュニケーション力	「一方的に意思を伝える」だけでなく、異なる意見や感性を持つ人々と交わり、耳を傾け、柔軟に自らの意見を変容させる「対話をする」資質・能力のこと。また、英語でのコミュニケーション力も含む。
	リーダーシップ	集団に何らかの目標を設定し、集団を統率しつつ、人々の意欲を高め、成長させながら、その課題を遂行・先導する資質・能力のこと。
	一般教養・倫理	社会で必要とされ、身につけていることが望ましい基本的な知識や物事の良し悪しを判断し、人として守るべき秩序を守る資質・能力のこと。
	キャリアデザイン力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関係を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく資質・能力のこと。

体育大生は汎用的能力をどのように伸ばしているか？

-2014年入学生の4年間のPROGテストの変化より-

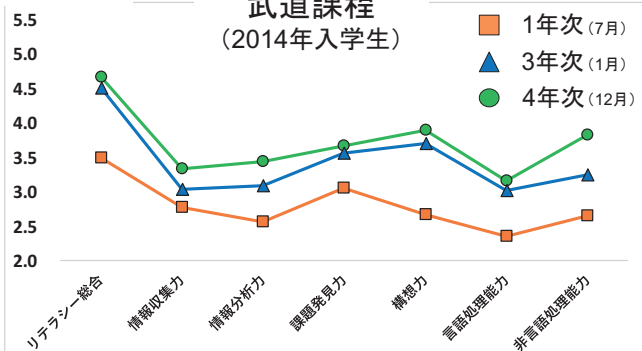
リテラシー

スポーツ総合課程
(2014年入学生)



1年次から3年次にかけての成長が大きいです。特に、構想力が伸びています。しかし、3年次から4年次にはあまり伸びがありません。

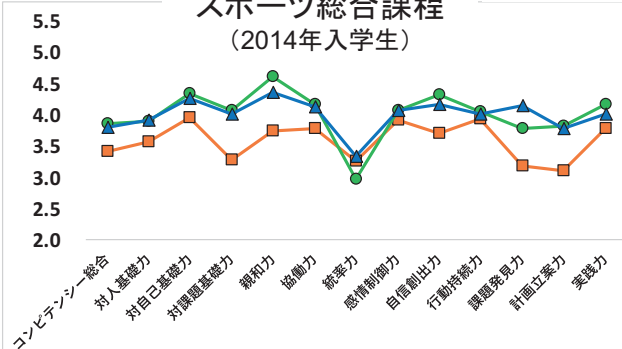
武道課程
(2014年入学生)



1年次から3・4年次と全ての項目で伸びています。特に構想力が伸びています。3年次から4年次にかけては、情報収集力、課題分析力、非言語処理能力が伸びています。

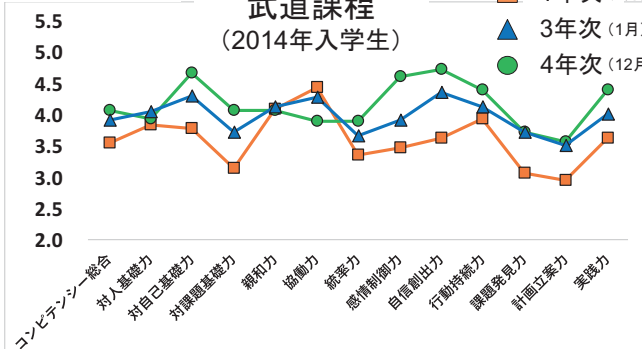
コンピテンシー

スポーツ総合課程
(2014年入学生)



3年次と4年次はあまり変化はありませんが、1年次と比較すると3年次までにほとんどの項目でスコアが伸びています。しかし、統率力は、非常に低い傾向で伸びていません。

武道課程
(2014年入学生)



3年次、4年次とほとんどの項目でスコアが伸びています。しかし、親和力は変化がなく、協働力は学年が上がるごとに減少しています。

SCCOTおよびSCRIT開発協力の御礼

SCCOT(スポーツコーチングコンピテンシーテスト)およびSCRIT(スポーツコーチングリテラシーテスト)の開発にご協力いただきました皆さま、誠にありがとうございました。最終的には、SCCOTでは約1000名、SCRITでは約100名の方から回答をいただきました。現在、回答を元にテストのブラッシュアップを進めています。広く活用されるスポーツ指導者の資質・能力を可視化できるテストの完成を目指します。

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

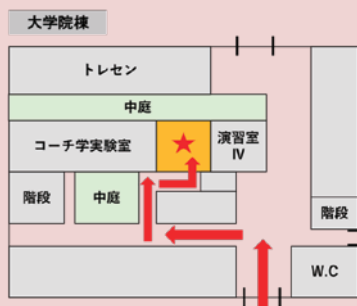
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟 1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

濱中 良・近藤亮介・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPも更新されているのでご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp>



発行：鹿屋体育大学 教育企画・評価室

NIFS-AP News

2018.10
VOL.4

p.1 教員からのメッセージ

p.2-3 学修のPDCAサイクル

p.4 新NIFSpassの紹介

教員から体育大生へのメッセージ

根拠を持ってスポーツを実践できる、人と人を繋ぐ人材を期待して



スポーツ生命科学系

中垣内 真樹 教授

研究キーワード

ヘルスプロモーション・

介護予防・運動習慣化

ヘルスプロモーション関連の研究、授業を担当しているスポーツ生命科学系の中垣内真樹（なかが いちまさき）です。体育・スポーツ・武道とヘルスプロモーション（健康づくり）はかけ離れていると感じている人も多いかと思います。しかしながら、私自身は、スポーツ（競技）の実践、体育系の大学で学んできた知識が現在のヘルスプロモーションに関する仕事（研究・教育・地域貢献）に強く結びついていると実感しています。

自身を振り返り、目標を設定して、それを確実に実践していく、それが正しかったかを再度振り返る。このような作業を皆さんはスポーツに取り組む中で繰り返していると思います。その作業そのものやそれを進めるための考え方はどの分野（体育・スポーツ・武道・健康づくり）でも活かされるはずですが、またこの作業を、根拠を持って実践していくためには多くの学び（知識）が必要です。鹿屋体育大学ではスポーツの実践はもちろんのこと、多くの事を学びえる環境が整っています。スポーツの実践のみならず、体育・スポーツ・武道・健康づくりに関しての知識を得て、将来、体育・スポーツ・武道・健康づくりをけん引する存在になってほしいと期待しています。

最後に、スポーツには不思議なチカラがあります。日頃交流のない人たちでも一緒にスポーツ活動を行った後には、親密感や仲間意識を持つことができます。そのような人間関係（人や地域）の繋がりの誕生は、地域コミュニティの復活など地域活性化にも繋がっていくでしょう。皆さんは人と人を繋ぐリーダーにもなり得るのです。

ワクワクしながら課題と向き合ってください

学生の皆さん、こんにちは。バレーボールの授業を担当している坂中美郷です。

本学が掲げている「卒業までに身につけるべき12の資質・能力」の中に、「課題解決力」があります。これは、「本質的な問題を発見し、解決策を考え、計画し、それを実行、成果がでるまでPDCAサイクルを円滑に回し、課題解決に向けた取り組みを実施できる資質・能力」のことです。本学の学生は、とくに各部活動において、この「課題解決力」を身につける経験をたくさんしてきていると思います。目標達成に向けて一生懸命取り組んでいるからこそ出来る経験であり、皆さんの大きな強みであると感じています。これからも、困難な課題にぶつかることや、思い通りにいかないことが多々あるかと思いますが、自分を成長させる時だと思って、ワクワクしながら課題と向き合ってください。

もし今、夢や目標を見つけれないという場合は、「今」を一生懸命に取り組んでみてください。授業や研究、部活動、就職活動など、目の前のことに一生懸命取り組むことで、新たな道が開けることもあれば、壁にぶつかる場面も出てくるでしょう。壁にぶつかったら、解決できるようにまた一生懸命取り組んでみてください。そうして得られる一つ一つの経験が、社会に出た時にきっと役立ちます。

教職員は皆さんの活動を全力でサポートします。より良い学生生活になることを期待しています。



スポーツ・武道実践科学系

坂中 美郷 講師

研究キーワード

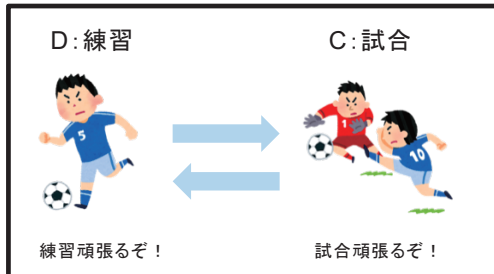
バレーボール・コーチング・

パフォーマンス

学び・成長を加速させる

Question: あなたの部活動のサイクルはどっち？

とにかく練習あるのみ！ふんふんタイプ！



練習も振り返りもバッチリ！スマートタイプ！



皆さんの日頃の部活動での取り組みは、どっちのタイプでしょうか。練習(Do)と試合(Check)ばかりの「ふんふんタイプ」の学生は、振り返り(Act)と計画(Plan)の習慣を身につけることで成長が加速します。そして、目標に向かってPDCAサイクルを何回も回していきましょう。うまくいかない人は、うまくいっている人の考え方や行動を聞いてみるのもいいですね。

Question: あなたの学びのサイクルはどっち？

では、大学の学びにおいてはどうか。右図の中の学修(Do)とテスト(Check)だけになっていませんか？大学での目標がはっきりとしている人は、振り返りと計画作りで、着実に目標に近づいていきましょう。

学修での目標や将来やりたいことがない、という人は、前ページの坂中先生のメッセージのように「今」を一生懸命取り組みPDCAサイクルを回してみましょう。継続することで、本学の目標である「スポーツ・武道・体育・健康づくりにおける実践的かつ創造的で市民性・国際性を備えたリーダー」になれるはずです。

PDCAのサイクルは社会に出ても大切な習慣なので、特に忘れがちなAとPを今のうちに身につけてください。

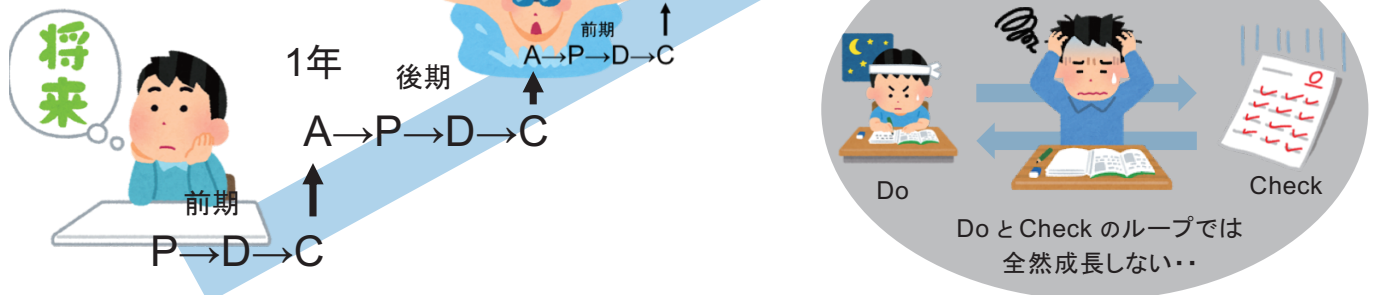


A : 振り返り、改善案の検討(Act)

P : 目標、計画づくり(Plan)

D : 授業、課外活動(Do)

C : 試験、試合(Check)



ポイントは A と P !?

Do : 大学での様々な学び



講義



実験



介護実習



ゼミナール



自主学習



関連実技



指導実習



ボランティア

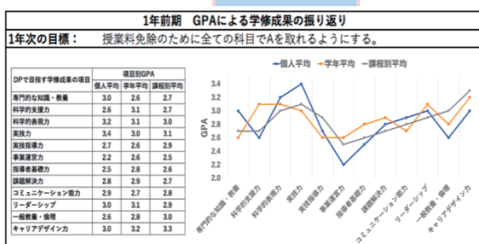


教育実習

Check : 試験・テスト

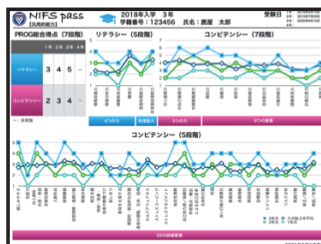
GPA

科目群別と12の資質・能力



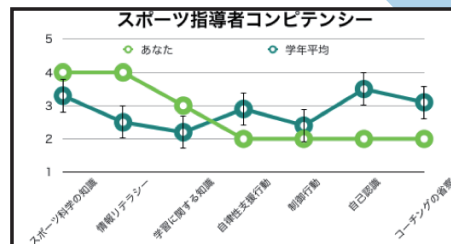
PROG

汎用的な資質・能力



SCCOT

スポーツ指導者基礎力テスト



Act : 振り返り

Q1: データを見てあなたの **強み** はなんだと思いますか?



A.

一般教養・倫理 と 科学的表現力は良かった!
実技指導 と リーダーシップが苦手..

Plan : 目標・計画作り

Q2: どんな **資質** や **能力** を伸ばしたいと思いますか。

Q3: 具体的に どんな **手段** や **方法** で改善を目指しますか。



A.

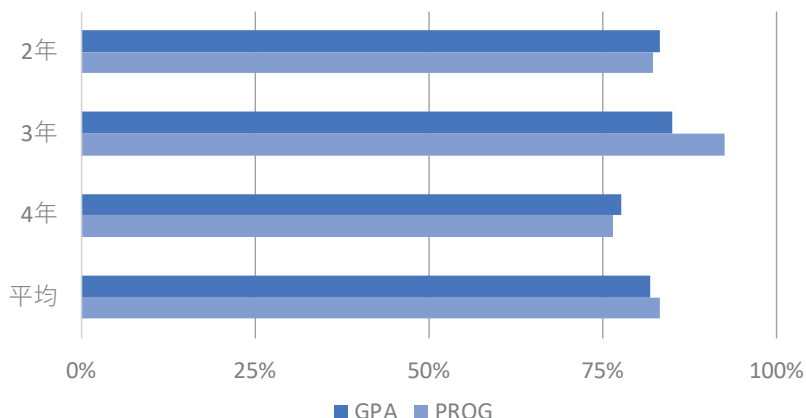
実技指導力とリーダーシップを身につけたい!
そのためには、関連実技 + 指導実習 + ボランティアで指導経験を積むぞ!

Act(振り返り)と**Plan**(目標・計画作り)が**重要**!

10月よりA と PはWebClass内でできるようになります!
次ページにGO!!

2017年度後期のAct（振り返り）とPlan（計画）の実施状況

A(振り返り)とP(計画)ができた学生の割合は約80%

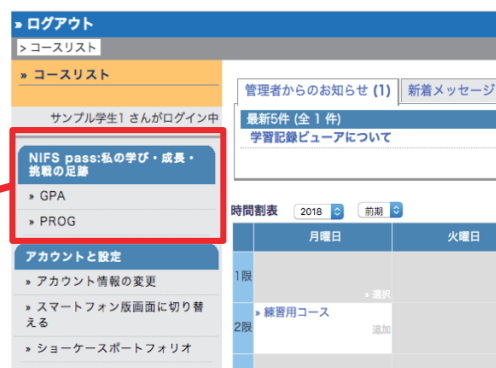
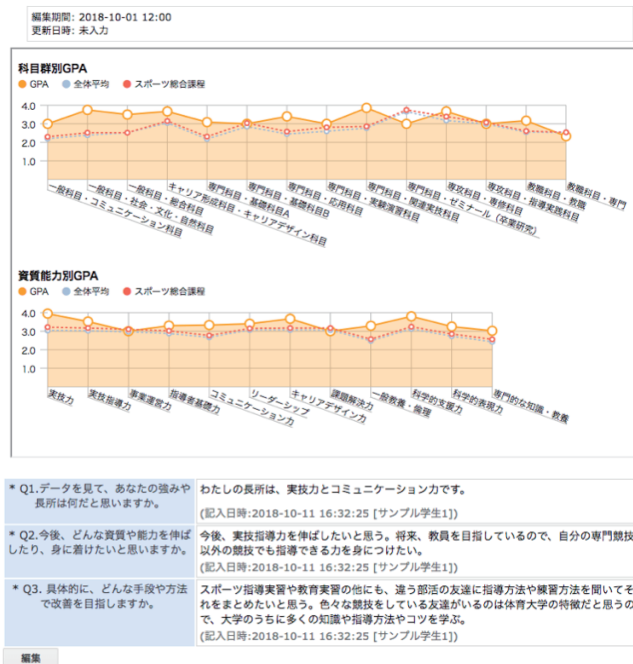


本年4-6月に、2017年度のGPAとPROGテストの結果について振り返りを学生の皆さんに実施してもらいました(1年生はデータがないため未実施)。その結果、80%以上の学生が自分自身の学修状況を振り返り、目標・計画を立てることができました。一方、約20%の学生が未入力となりました。成績をみるだけでなく、もう一歩踏み込んで考えてみましょう。新しい気づきを得るチャンスです。

WebClassに新 NIFS pass の紹介

～WebClass内でGPAやPROGのC(評価)が見れてA(振り返り)とP(計画)ができるように♪～

2018年前期



本年10月からWebClassにログイン後の画面左上に「NIFS pass:私の学び・成長・挑戦の足跡」という表示がされるようになっています。まずは「GPA」と「PROG」の結果を見ることができ、振り返りや次の計画を記入できるようになっています(今回はサンプルを表示しています)。過去の学修成果や振り返りも閲覧することもできるようになります。記入は、半期ごとを予定しています。毎回、学修成果を見て、自分で振り返りを行うことで、より充実した大学生活を送れるようにしてください。

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

大学院棟1階

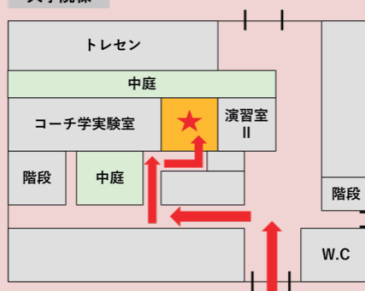
TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyomu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

濱中 良・近藤亮介・岡田あゆみ・金高宏文

大学院棟



教育企画・評価室のHPも更新されているのでご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp>



発行：鹿屋体育大学 教育企画・評価室

2019.3
VOL. 5

NIFS-AP News

p.1 教員からのメッセージ

p.2 SCCOTの結果

教員から体育大生へのメッセージ

優れたコミュニケーターたれ！



スポーツ人文・応用社会科学系
国重 徹 教授

研究キーワード

英語多読・コミュニケーション・
認知能力

英語を担当している国重です。みなさんに在学中に実行して欲しいことをお伝えします。それは、優れたコミュニケーターになるために必要な次の3つです。①快適ゾーンから出て、多くの人と積極的に関わり、様々なことにトライする。②意義のある内容を修得し、分かりやすく伝える。③正確な情報を見極め、それについての意見を発信する。

①については、同じ部活のメンバーだけでなく、他の学生や留学生、他大学の学生、地域の方々、教職員など、様々な人と交わり、多様性を受け入れつつ、自分のアイデンティティを確立してください。また、実行前から「無理だ」と決めつけず、何事にもトライしましょう。

②の意義のある内容とは、例えば、スポーツ・武道に関する専門知識です。みなさんには英語力も高めて欲しいですが、英語が流暢に話せても、意義のある内容を伝達できなければ意味がありません。スポーツ・武道の専門知識を学べる今を大切にしましょう。

③を実現するためには、情報を鵜呑みにせず、その出所の信頼性を確認し、批判的に読み、考えることが必要です。その上で、世の中の事象を自分ごととして捉え、それに対する自分の意見を言語化しましょう。

みなさんがこれらを実行し、身につけるべき12の資質・能力のうち、特にコミュニケーション力、一般教養・倫理、専門的知識・教養、科学的表現力を修め、優れたコミュニケーターとして社会に羽ばたくことを願っています。

短い学生生活、どん欲に学びましょう。

学生の皆さん、こんにちは。スポーツ情報センターの和田です。授業では情報処理関連の科目を担当しています。

このニュースレターを発行している教育企画・評価室では、本学の卒業生を対象に大学の教育に関するアンケートを行っています。幸いこれまでの調査では卒業生の皆さんから大学の教育に対して全体的に高い評価をいただいています。ただし、『本学の教育で不足しているものは？』という質問に対しては評価が低い項目があり、その一つに『一般教養・倫理』があります。一般科目を担当している私としては耳の痛い話です。私自身を振り返っても学生時代にもっと教養を身につけておけばよかったと反省しています。ではどうすればこの状況を改善できるのでしょうか。教養科目をたくさん開講して授業を充実すればよいのでしょうか。ただし、よく考えてみると教養を身につけるチャンスは授業だけというわけではなさそうです。

教養を身につけるためには「読み、書き、考える」ことが重要と言われます。特に「読む」ことについて、最近では苦手と公言する学生も多く見かけます。少しの間スマホを置いて本を読む機会を増やしてはどうでしょう。授業のレポートもしっかり「考え」て「書く」ことができていますか？「頭を使って練習しないと普通に嘘つく（意味がない）」とダルビッシュ選手も言っています。また、本学ではいろんなセミナーや特別講義が毎週のように開催されています。面白そうなものがあれば積極的に参加してみてください。4年間という短い期間ですが、学生の皆さんにはどん欲にいろんなことを学んで欲しいと願っています。

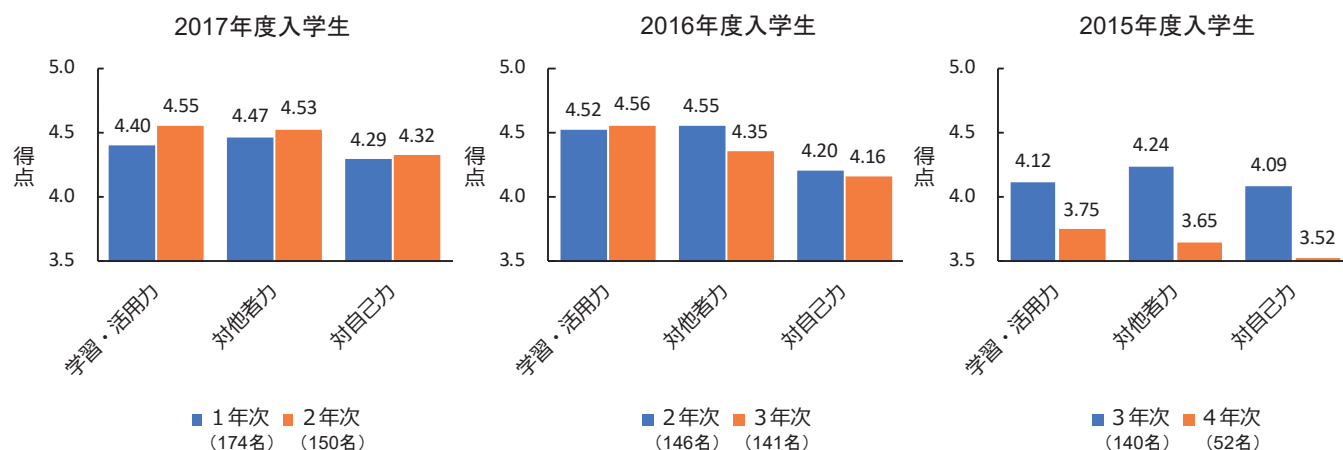


スポーツ人文・応用社会科学系
和田 智仁 准教授

研究キーワード

マルチメディアデータベース・デジタルアーカイブ・メタデータ・動作分析・ネットワーク・分散システム・e-learning

SCCOT（Sports Coaching Competency Test）の結果について



上図は、学生の皆さまに受験してもらったSCCOT(Sports Coaching Competency Test)の結果です。2017年度入学生は、各項目において、スコアが伸びていますが、2016年・2015年度入学生が前回よりもスコアが下がっています。

2017年度入学生のスコアが上がる原因としては、スポーツ指導実習概論やコーチ学概論等で「グッドコーチとはどのようなコーチか」を学修している成果と考えられます。

2016年・2015年度入学生のスコアが下がる原因として、次のことが考えられます。今回は理想の指導者像をイメージして、今回は指導経験(3年次にスポーツ指導実習・4年次に教育実習)をふまえて回答しており、前回と今回では、回答する際に想定する場面が異なっていることが考えられます。また、指導現場では理想と異なる判断や行動をとっていることが考えられます。

「鹿屋体育大学での4年間が充実する秘密の書」が完成!?



今回を含めて「NIFS-AP News」は、5回 (Vol.5) 発行してきました。

これまでの内容をふまえて、よりわかりやすく鹿屋体育大学での学びや大学生活に関する情報を「鹿屋体育大学での4年間が充実する秘密の書」として発行いたします(2019年3月末発行)。

これまでの内容を忘れた、そもそも読んでない、捨てた人も(悲しいですが…)、改めて大学での学びについて考えることができる内容となっています。かのや仙人と勘八くんのストーリー調で読みやすくなっているのは是非、読んでみてください。

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

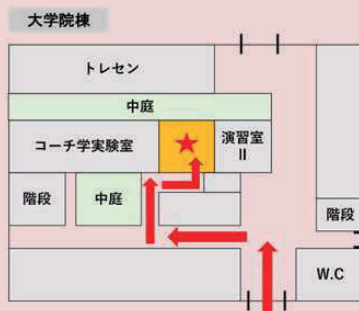
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

TEL/FAX: 0001-10-5000

E-MAIL: kyoumy-ap@nifs-k.ac.jp

＜企画・編集＞

濱中 良・近藤亮介・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPも更新されているのでご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp>



教員から体育大生へのメッセージ



スポーツ・武道実践科学系
竹中 健太郎 准教授

研究キーワード
剣道 武道
指導法 稽古法

「「習（習い）、錬（実践）、工（工夫、改善）」の繰り返しを大切に！」

本学の学生の皆さん、こんにちは。剣道の授業を担当しています竹中健太郎です。

私は実技系の教員として、競技力向上という視点で、皆さんへの期待を伝えたいと思います。私の専門は、日本の伝統文化武道の一つ剣道ですが、実は剣術流派で有名な柳生新陰流では、「三磨の位」という教えがあります。「習（習い）、錬（実践）、工（工夫、改善）」の3つの過程を繰り返しながら、上達を目指すという教えです。これは今でいう「PDCA」、つまり実践して、振り返り、改善するという一連のサイクルを繰り返すことです。今の時代に限らず、人は自己の向上、成長をはかる時、この作業を繰り返してきました。

大学生になると、3つ目の「工」の部分の充実度が、競技力の向上に大きく関わるものと思います。自ら考えて工夫する力が重要です。今や競技の分野においても科学的な研究が充実していることから、様々な情報が拡散しています。したがって、自らが必要な情報を適切に選択、収集する必要があります。

高校までは、それらの作業をすべてコーチ（先生）が行っていたのかもしれませんが。しかし、大学で飛躍する選手は自己のコーディネート力が高い選手であることは間違いありません。競技の上達を目指す過程で、このサイクルが確立さえすれば、必然的に「実践的で創造的なリーダー」となるための資質は保証され、社会で必要とされるでしょう。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。」

スポーツマネジメントに関する科目を担当しております萩原悟一（はぎわらごいち）です。スポーツマネジメントというとビジネス？みたいな印象を抱かれると思いますが、スポーツチームに所属する人のマネジメントについても研究が行われています。皆さんは将来、体育・スポーツ分野におけるリーダーとなり、わが国のスポーツ業界をけん引していく存在となるでしょう。そこで重要なのは、いかに人を惹きつけマネジメントしていくかになると思います。在学中、教室での勉強はもちろんのこと課外活動でも活躍されていると思いますが、ぜひ、本学での学びの中で「どうすれば人を惹きつけ、マネジメントできるか？」についても考え経験していただければと思います。

ところで、皆様はタイトルにある名言をご存知でしょうか？これは山本五十六という海軍の軍人さんの残された言葉です。この言葉には続きがあり、「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」「やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」と続きます。この一連の文章にはどうすれば人を惹きつけ、マネジメントすることができるか凝縮されています。まずは、タイトルにもあるように、自分自身がやって見せること、人をきちんと評価することができているかを考えてみてください。皆様の活躍を期待しています！



スポーツ人文・応用社会科学系
萩原 悟一 准教授

研究キーワード
コミットメント
アイデンティフィケーション
アイトラッキングマーケティング
広告価値測定

学内での学びの時間を充実させよう

2018年度には、学内での“学生の主体的な学び”の環境の充実を図るために、NIFSギャラリーのテーブル、椅子、学生からの依頼の多かったコンセントなどを整備しました。

そして、2019年4月には大学図書館入口横の元事務室に「NIFSラコモ」ができました。自分のIT機器を活用しての学修や、ゆったりリソファーに座って動画視聴や読書ができます。グループ学習やミーティングに使ったりと利用方法はたくさんあります。1コマ空いた時など、積極的に有効活用してください！



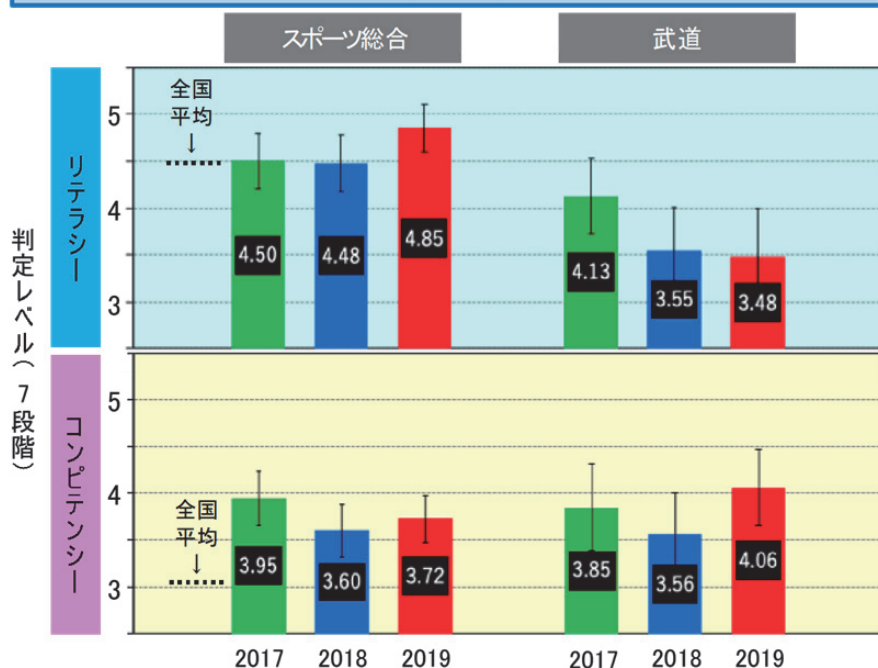
NIFSギャラリー：ソファ入りました！



NIFSラコモ：ホワイトボードやコンセントも使ってOK！



1年生のPROG得点の変化(3カ年比較)



左のグラフは、1年次に受験した PROG テスト（汎用的能力）の過去3カ年度の推移を示したものです。2017 は 2017 年度入学生、2018 は 2018 年度入学生、2019 は 2019 年度入学生の課程毎のスコアの平均値を示しています。

本学学生の強みであるコンピテンシー（課題解決をするための行動力）は、全国平均値よりかなり高く、これまでと同じ傾向を示しています。一方、入学年度で少しずつ平均スコアに違いがあるようです。

2019 年度はスポーツ総合課程のリテラシー（知識を活用した課題解決力）が全国平均をはじめて上回り、武道課程では長所であるコンピテンシーがさらに高くなっています。それぞれの入学年度生に強み・弱みがありますが、それぞれの特性を意識しながら自己の学修を改善して下さい。

次のテストは3年次11月、4年次2月実施されます。色々なチャレンジによって、1年次の強みや弱みが改善されることを期待します。

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟 1 階

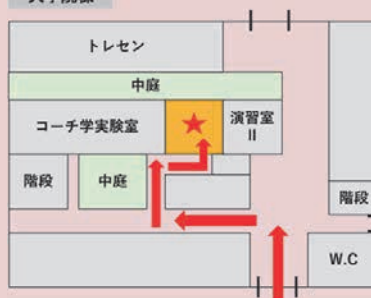
TEL&FAX : 0994-46-5082

E-MAIL: kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

金高宏文・岡田あゆみ・近藤亮介

大学院棟



教育企画・評価室のHPも更新されているのでご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp>



◆教員からのメッセージ
◆自分たちの学びに自信を持とう！
◆AP 特任助教よりご挨拶

教員から体育大生へのメッセージ

「関心を広げることで、ポテンシャルを高めましょう」



スポーツ人文・応用社会科学系
前田 博子 教授

研究キーワード

スポーツ社会学
コミュニティ・スポーツ
ジェンダー フットボール

スポーツ社会学系の授業科目と、就職支援を担当している前田博子です。みなさんの持つ若さの素晴らしさとは、競技力の高さでも、見た目の美しさでもありません。それは、これからどの方向にも進むことができる、大きな可能性があることです。

将来の仕事について尋ねると、入学時点では教員になりたいと答える人が多いです。「体育学」の専門知識を生かせる仕事として、他に思いつかないと考えている人もいます。

実は、スポーツの専門性が求められる場合は、さまざまな分野に存在しています。現行の国のスポーツ政策では、スポーツ振興の対象として「する」ことに加え、「みる」と「ささえる」ことが含まれています。そこから、スポーツに関わる仕事の広がりが見えるでしょう。

体育大学への進路選択は、体育・スポーツへの関心からでしょう。その関心は、自分自身が「する」スポーツから始まっているかもしれませんが、そこに留まらず、視野に入っていなかった分野にも関心の幅を広げてください。大学では、体育・スポーツに関する幅広い分野の科目がおかれています。在学中は貪欲に学んで欲しいのですが、3年生、4年生になると、履修する科目を一気に減らす傾向がみられ、とても残念に思っています。幅広く学ぶことは、間違いなく将来の可能性を広げることに繋がります。

本学の卒業生は、すでにさまざまな場で活躍しているのですが、みなさんも幅広い学びから、さらに新しい道を拓いていってください。

「わかる」「できる」「上手くなる」は、ある日突然やってくる」

教職科目を担当します、栗山靖弘(くりやまやすひろ)です。教職科目は、教育学をベースにして、中学・高校の教員免許を取得するのに必要な知識や技能を伝達する科目です。

私自身、教育学を研究していて感じることは、何かが「わかる」、「できる」、「上手くなる」というのは、ある日、突然やってくるということです。

例えば、教師という仕事は、子どもの成長を促す仕事ですが、そのためには非常に忍耐を要します。「1つのことを教えたから、1つのことができるようになる」という印象を持っている方もいるかもしれませんが、実際は「3つ教えて1つできるようになる」くらいなのだと思っています。しかし、このことは、成長していないとか、停滞しているということではありません。一見すると停滞しているように見えても、目に見えないところで経験をストックしています。その経験のストックが、何かのきっかけで、突然、活性化することがあります。

みなさんにも経験があるのではないのでしょうか。突然、数学ができるようになった。突然、プレーが上達した。人間の成長は、階段を登るようなイメージではなく、溜めておいたエネルギーを不定期に放出するようなものなのかもしれません。

「努力や継続が大事」と言われますが、それはきっと、不定期にやってくる突然の成長の幅を最大化するための準備なのだと思います。

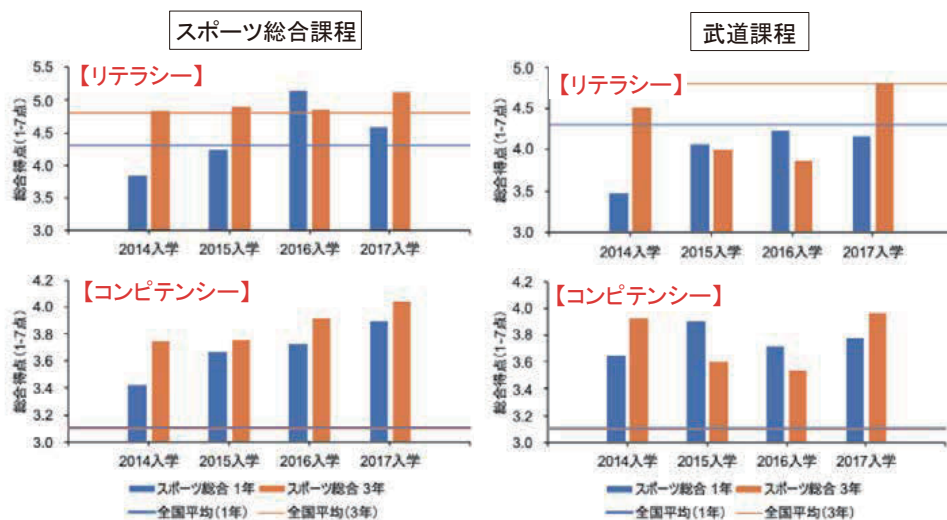


スポーツ人文・応用社会科学系
栗山 靖弘 講師

研究キーワード

教育社会学
進路形成
スポーツ推薦入試

3年次のリテラシー、全国平均値を上回る！ 自分たちの学びに自信を持とう！



(注) 入学年によって3年次に伸びていないことも見受けられます。
それらはテスト実施の方法や時期、さらに受験者数が影響している可能性もあります。

体育大生のコンピテンシー(下図)は、入学時から全国平均値よりも高く、3年次でも高いことが特徴です。

一方、リテラシーは、これまで低い傾向が続いていました(上図)。しかし、新教育課程3年目に入学した2017年入学(新4年生)の3年次の平均値は、初めて全国値(大学3年次)を上回りました。武道課程の学生も初めて平均値に並びました。

これは、本学の教育や学修によって課題解決する資質・能力が向上したことを示しています。それ故に、本学学生は自分たちの学びにもっと自信を持ちましょう。

◇学部2・3・4年生へお知らせ◇

NIFS passで、今身につけている力を確認し、
次の学びの方向性(改善点)を決めよう！

Web Classからログイン
＜4/6(月)～4/19(日)まで＞



3年間、お世話になりました。

2016年12月から始まった教育企画・評価室での職務も、3月で任期満了となりました。

学部・大学院時代を合わせると約10年間、鹿屋体育大学でお世話になりました。

僕のように一度外に出てから鹿屋に戻ってくると、自由で、自然豊かで、食べ物が本当においしくて、学びやすい環境であることを実感します。やりたいことがあれば、様々な経験ができます。自分のやりたいこと、今できることを見極めて、将来に向けて鹿屋体育大学の環境をフル活用してほしいと思います。また、運動やスポーツ・武道から学んだことを自分の将来や社会に活かしてほしいと思います。

最後になりますが、4月からは兵庫県立大学総合教育機構の特任教員を務めることになりました。

鹿屋を離れることにはなりますが、これからも鹿屋体大生のみなさんを応援しています。

これからもがんばってください。



教育企画・評価室 特任助教 近藤亮介

＜発行＞

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

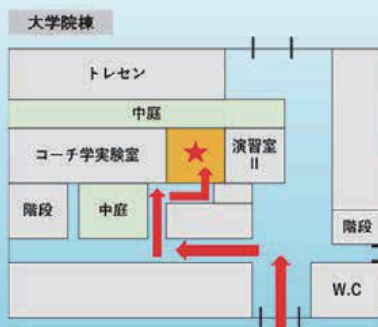
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyomu-ap@nifs-k.ac.jp

＜企画・編集＞

岡田あゆみ・金高宏文・近藤亮介



教育企画・評価室のHPもご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp/>

NIFS-AP News

2020.10
VOL.8

◆教員からのメッセージ

◆APの4年間における成果データ

◆教員表彰（優秀授業科目担当者）

◆教育企画・評価室メンバー紹介

教員から体育大生へのメッセージ

「ジンザイ」



スポーツ人文・応用社会科学系

浜田 幸史 准教授

研究キーワード

これからの保健体育授業

これからの運動部活動

教員養成・採用・研修

学生の皆さんから「教職の…」と言われている方のハマダコウジ（浜田幸史）です。保健体育科教育法などの教職科目を担当し、教育実習、教員採用選考試験、教員免許取得に関する指導等を行っています。

さて、皆さんは「ジンザイ」と聞いて、どのような字を思い浮かべますか。実は「ジンザイ」には、一般的に4つの表記があるとされています。

「人罪」他者に迷惑をかけ、組織にとってお荷物の人。「人任」成長が期待できない、組織にただいるだけの人。「人材」才能があり、組織にとって必要な人。「人財」かけがえのない、組織の中核を担う人。現時点のあなたは、どの「ジンザイ」でしょうか。

私は、学校や教育行政の場において、活力ある言動で人の心と体を動かすことのできる「人財」となっている本学卒業生を何人も知っています。対話してみると、皆さん様に、体大卒業生であることにプライドを持ち、とてもエネルギッシュであること、学生時代にはムチャもしたものの、学業や課外活動、他者との交流に盛んに取り組んでいたことがわかります。

本学学生の強みは、全員が競技に打ち込んできた経験を有することにあります。その経験から「人材」たる素地を、皆、持ち合わせています。体大で、今、これから、何をどうするかで、近い将来、社会において「人財」となり得るかどうかが決まるのではないのでしょうか。皆さんの「主体的・対話的で深い学びの実現」を期待しています。

「興味の赴くままに」

スポーツトレーニングや陸上競技の授業を担当している永原です。研究では、スプリント走の機序解明、スポーツのパフォーマンス決定因子および向上方略の究明・評価法開発などを行っています。

大学は、知に関する教育、研究、社会貢献を柱とした最高学府です。競技とともに、知に関することでも世界一を目指してはいかがでしょうか。勉強という意味ではありません。自らが取り組んでいるスポーツに関する知についてです。大学は、自由であることを特徴の一つとしています。やりたいことがあれば、信念をもって、興味の赴くままに取り組んでください。他人から批判や否定をされるかもしれませんが、それはどうでもよいことです。責任を負うのは自分です。大抵はうまくいきませんが、初めからわかることはありませんので、気にしてはいけません。何が役に立つか、将来につながるか、見通すことは困難であり、時間は資源として有限です。時間を無駄にせず、自分の直観を信じて、興味のある目の前のことに全力を傾けて気合と根性で取り組んでください。何かを成すにはそれしかありません。注意することは一つだけ、他人と違うことをすることです。最後に、若者はしばしば能力が低いのに自己評価が高いなどと言われ、それはダニング＝クルーガー効果と呼ばれたりします。しかし、私はそれが悪いことだとは思いません。それだけ無謀な事にチャレンジできるということです。ぜひ、興味の赴くままにチャレンジしてみてください。



スポーツ・武道実践科学系

永原 隆 講師

研究キーワード

スプリント走

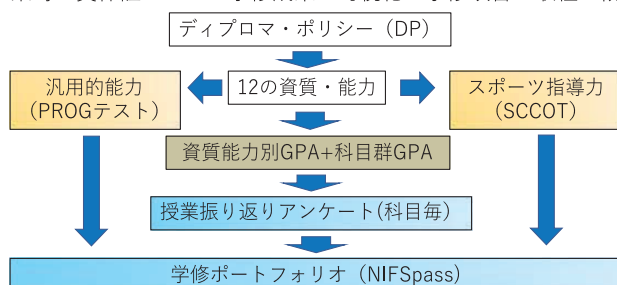
トレーニング

評価法・テストの開発

体育大生の学びの変化

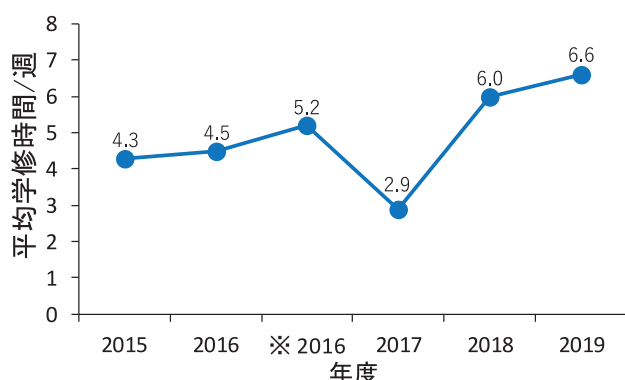
本学では「卒業時における学びの質保証の取組の強化」を2016年度より文部科学省の競争的補助金の支援を受けて、全学的に取り組んできました。特に、ディプロマポリシー(DP)を担保する「多様なスポーツリーダーとしての自覚と実践的なスポーツ指導力の養成」及び「段階的かつ継続的なライフ・キャリアデザイン力と社会人基礎力(汎用的能力)の養成」の状況を、学修行動や学修成果の可視化から確認し、継続的に教育改善が行える教学システムを確立することを目指し、以下の4点(右図参照)に取り組んできました。

【卒業時の質保証のための学修成果の可視化と学修改善の取組の概要】



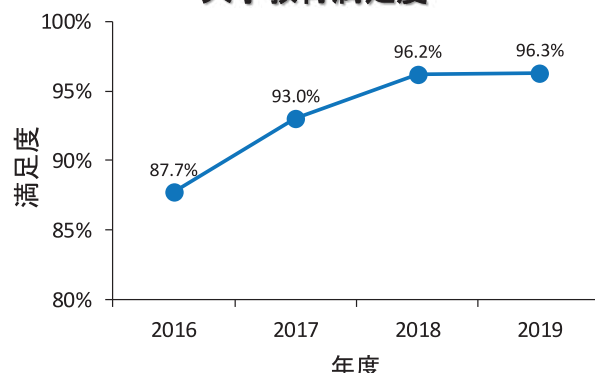
- ①科目群毎に加え、DPで目指す12の資質・能力別の修得度を授業の成績評価(GPA)を活用して可視化すること
- ②「汎用的能力(PROGテスト)」、「スポーツ指導力(プロフィール型テスト: SCCOT)」、「学修行動(授業振り返りアンケート)」等を可視化すること
- ③「学修ポートフォリオ(NIFSpass)」を構築し、運用すること
- ④教育改善に向けた教学マネジメント機能を強化すること

授業外で学ぶ時間が増加中



※計算の簡便化のため、各カテゴリの中間値の時間を用いている。
 なお、前後が2倍ずつ増えているため、「30h以上」には「45時間」を用いている。
 参考資料: 国立教育政策研究所 (http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_digest_h29/gaiyou.pdf)

卒業時の教育の満足度向上中 大学教育満足度

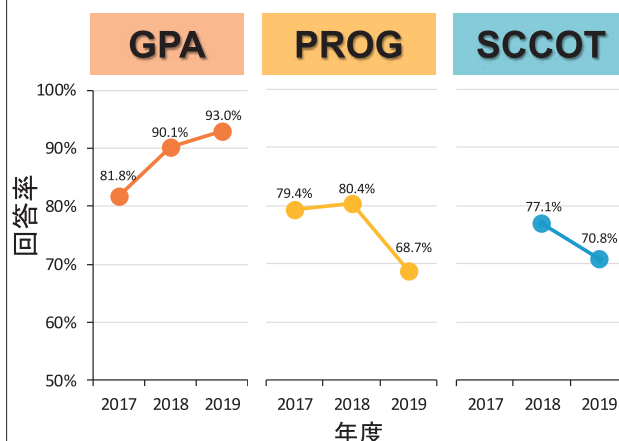


学修成果の振り返りは、7割の学生で定着。全学生の定着に向けた取組が必要！

～学修ポートフォリオ(NIFSpass)の回答率: GPAは増加、PROG・SCCOTは低下～

NIFSpass : 学修ポートフォリオシステムの構築

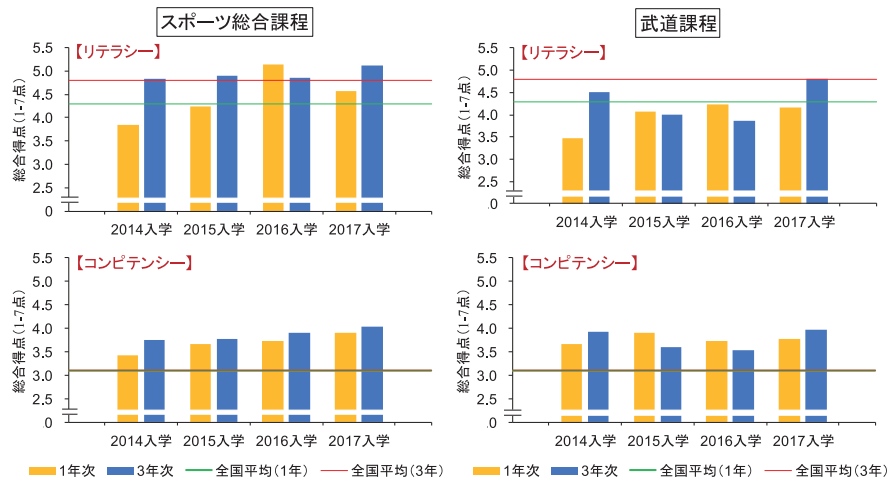
GPA	PROG	SCCOT
* Q1. データを見て、あなたの強みや長所は何だと思いますか。 * Q2. 今後、どんな資質や能力を伸ばしたり、身に着けたいと思いますか。 * Q3. 具体的に、どんな手段や方法で改善を目指しますか。	わたしの長所は、実技力とコミュニケーション力です。 (記入日時: 2018-10-11 16:32:25 [サンプル学生1]) 今後、実技指導力を伸ばしたいと思う。将来、教員を目指しているので、自分の専門競技以外の競技でも指導できる力を身につけたい。 (記入日時: 2018-10-11 16:32:25 [サンプル学生1]) スポーツ指導実習や教育実習の他にも、違う部活の友達に指導方法や練習方法を聞いてそれをまめめたいと思う。色々な競技をしている友達がいるのは体育大学の特徴だと思うので、大学のうちに多くの知識や指導方法やコツを学ぶ。 (記入日時: 2018-10-11 16:32:25 [サンプル学生1])	



(2016～2019年度)

汎用的能力(PROGテスト)のリテラシーは3年次までに大きく向上！

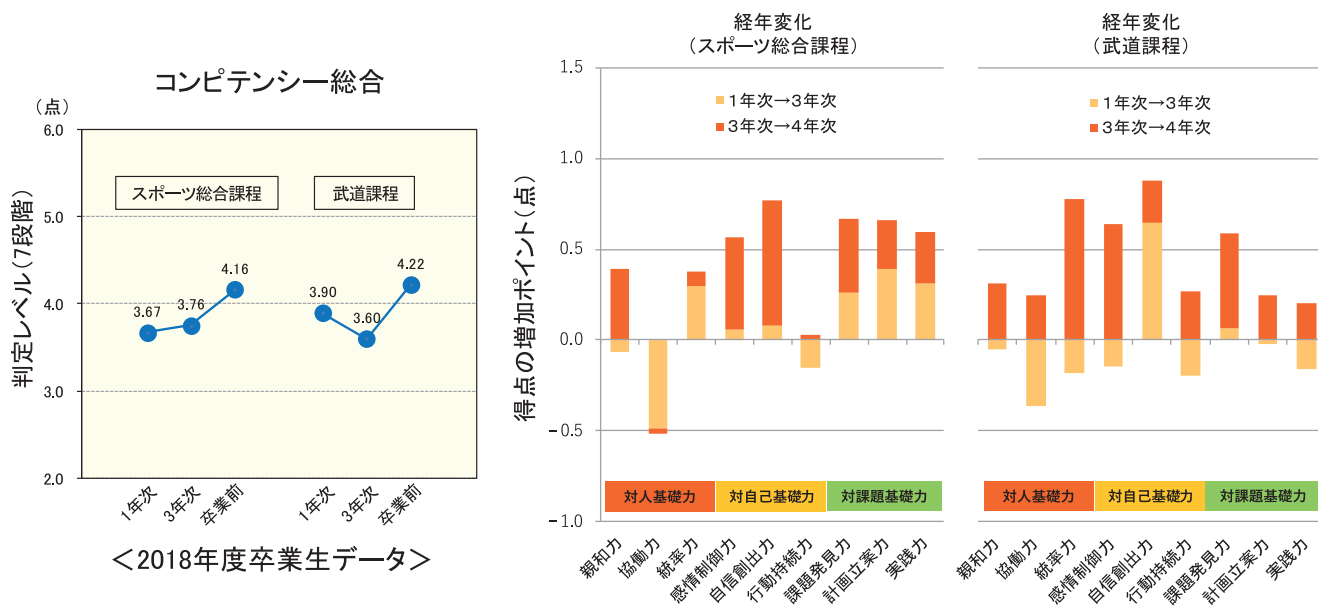
(注:リテラシーとは、知識を活用した課題解決力のこと。数理処理や言語処理力も含む能力のこと。)



体育大生のコンピテンシーは、入学時から全国平均値よりも高く、3年次でも高いことが特徴です。一方リテラシーは、これまで低い傾向が続いていました。しかし、新教育課程3年目に入学した2017年入学(新4年生)の3年次の平均値は、初めて全国の値(大学3年次)を上回りました。武道課程の学生も初めて平均値に並びました。これは、本学の教育や学修によって課題解決する資質・能力が向上したことを示しています。それ故に、本学学生は自分たちの学びにもっと自信を持って、様々なことにチャレンジしましょう。

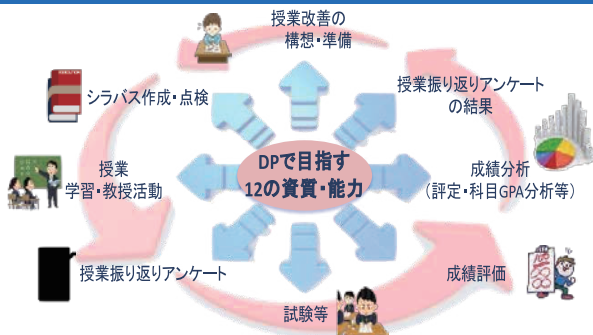
汎用的能力(PROGテスト)のコンピテンシーは4年次卒業研究等でさらに向上する

(注:コンピテンシーとは、課題解決をするための行動力。人と協力して課題解決を行うことや活動を継続する能力等を含んでいます。)



★学びの質保証の基本は、授業科目毎で学修・授業改善サイクルを回すこと！

以上のように4年間の取組で、本学学生の学びの変化を確認するとともに、課題も明らかになってきました。しかし、学びの質保証の基本は、授業科目毎での学びが基本となります(右図)。DPで目指す資質・能力がどのように学ばれているのかを学生、授業担当者が毎回確認しながら、よりよい学びへと導く学修・授業改善サイクルを継続的に回すことが大切といえます。今回は紙面の都合で「スポーツ指導力」の学びの変化について紹介できませんでしたが、次号ではそれらについて紹介したいと思います。



授業振り返りアンケートの結果は教員表彰にも活用されています！

2018年度より、授業履修者による「授業振り返りアンケート」の授業得点から、優秀授業科目を決定しています。優秀授業科目の担当教員は、教員表彰規則に基づく優秀授業賞候補者(注1)として推薦されています。下記は2018年度から2019年度における優秀授業科目の担当教員の一覧(注2)です。「授業振り返りアンケート」は、受講学生のより充実した学びを促進するとともに、教員の授業改善の取組を加速させることにも寄与しています。毎学期のアンケートは大変かもしれませんが、学生自身の率直な振り返りが本学の教育の質を向上させることにも繋がっていることを理解し、取り組んで頂ければと思います。

(注1)教員表彰は、常勤の教員が対象となっています。(注2)氏名に「*」が付している方は、現在、非常勤での担当もしくは退職された担当者です。



優秀授業科目担当者



講義・演習科目	
前田 明 体育学実験Ⅱ -バイオメカニクス-	荻田 太 体育学実験Ⅰ -運動生理学-
高井 洋平 体育学実験Ⅱ -バイオメカニクス-	與谷 謙吾 体育学実験Ⅰ -運動生理学-
竹下 俊一 スポーツ産業論	前田 博子 社会学
森 克己 国語・文章表現法	国重 徹 英語Ⅱ(初級B)
北村 尚浩 社会学	浜田 幸史 保健体育科教育法Ⅰ 保健体育科教育法Ⅳ 特別活動論
中村 勇 キャリアデザインⅠ 武道文化論	隅野 美砂輝 スポーツ産業論
梶 ちか子 保健体育科教育法Ⅰ 特別活動論	栗山 靖弘 国語・文章表現法 生徒・進路指導論①
幾留 沙智 スポーツカウンセリング論	日下 知明 社会学
鶴木 親志* 保健体育科教育法Ⅰ 保健体育科教育法Ⅳ 特別活動論	藤坂 由美子* 国語・文章表現法 生徒・進路指導論① 教師論②
宮本 直和* 体育学実験Ⅱ -バイオメカニクス-	伊藤 るみ子* 国語・文章表現法
柿木 正敏* 国語・文章表現法	小路 由美子* 国語・文章表現法
山田 恭久* 国語・文章表現法	

実技科目	
瓜田 吉久 体カトレニング	濱田 幸二 バレーボール①② ソフトボール①
前阪 茂樹 剣道② 専修武道論・実習Ⅳ -剣道-	高橋 仁大 競技スポーツ論・実習Ⅱ -テニス-
木葉 一総 バスケットボール② 競技スポーツ論・実習Ⅰ、Ⅱ -バスケットボール-	三浦 健 バスケットボール② ソフトボール① バドミントン① 競技スポーツ論・実習Ⅰ、Ⅱ -バスケットボール-
中村 夏実 海洋スポーツ①②	竹中 健太郎 剣道② 専修武道論・実習Ⅳ -剣道-
松村 勲 体カトレニング	塩川 勝行 バドミントン①
榮樂 洋光 海洋スポーツ①②	下川 美佳 剣道②
坂中 美郷 バレーボール①②	小森 大輔 体カトレニング
青木 竜 ソフトボール①	村上 俊祐 競技スポーツ論・実習Ⅱ -テニス-
北村 尚浩 夏季山岳 レジャースポーツ実習	坂口 俊哉 夏季山岳 レジャースポーツ実習
梶 ちか子 ダンス②	日下 知明 夏季山岳 レジャースポーツ実習
小山 公彦* 夏季山岳 レジャースポーツ実習	鈴木 國男* 弓道①②
富山 浩三* 夏季山岳 レジャースポーツ実習	藤坂 由美子* 夏季山岳 レジャースポーツ実習
森下 大輔* ラグビー②	古田 洋一* 夏季山岳 レジャースポーツ実習

★2020年度 教育企画・評価室の専任スタッフの紹介★

藤井雅文(特任助教)

はじめまして。4月から新たに着任しました。学生の学びの可視化を通じて鹿屋体育大学がより良い大学になるように頑張ります。よろしくお願いします！

岡田あゆみ(非常勤職員)

教育企画・評価室に入り、5年目となりました。皆さんの活躍や成長を間近に感じられる職場で、学生の皆さんに関われることを誇りに思います。皆さんの活躍と爽やかな挨拶・態度を励みに、微力ながらサポートさせていただきます。

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

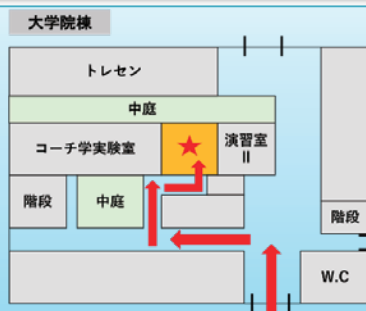
大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

藤井雅文・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPもご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp/>

NIFS-AP News



◆教員からのメッセージ

◆コロナ禍における授業形態と理解度・満足度

◆2020年度入学時の意識調査

◆PROGテストの経年変化

2021.4 VOL.9

教員から体育大生へのメッセージ

「学生の皆さんへの期待」



スポーツ・武道実践科学系

小澤 雄二 教授

研究キーワード

武道

教材開発

柔道コーチング

柔道や武道学概論などの授業と柔道部の学生支援を担当している小澤雄二です。研究の方は、安全な武道指導を目的とした用具の開発、柔道授業のための教材開発、柔道のコーチングなどを主なテーマとしています。

さて、昨今のコロナ禍においてさまざまな制約があるなか、皆さんも苦勞の多い学生生活を過ごしていることでしょう。このような状況ではありますが、大学生になって「自分のやりたいこと」は見つかりましたか？ 即座に「はい」と答えられる人は、本当に幸運かつ素晴らしいことですから、迷わず、真っすぐに努力をしてください。

しかし、多くの人は想い、迷い、悩みながら、「自分のやりたいこと」を見つけていくのかもしれませんが、たとえ今、それが明確でなくても、その時々「そのためにやるべきこと」に向き合えること自体が幸せなことであり、かけがえのない日常なのではないでしょうか。

そんな日常において、心掛けてほしいことがあります。それは日々のさまざまな決断に際して、何事もまずは自分の頭でしっかり考えて判断し、そして行動することです。その先に、皆さんにしか見えない未来があるのかもしれません。

皆さんのかけがえのない学生生活が、充実したものになることを期待しています。

「競技力向上」のその先へ

学校と教育の歴史や教師論などの教職科目を担当している山本一生（やまもと いっせい）です。本学の教職課程は、中学高校の保健体育の教員免許状を取得し、教師となることを目指す課程です。

まず、教職課程履修者のみなさんに伝えたいことは、「先生を目指す」ことだけに絞るのではなく、教職での学びを幅広く活かしてほしい、ということです。部活動やアルバイト、今後の生活などでぶつかる困難に対してヒントとなる学びが、教職科目にはあるはず。教職を通じた教養教育こそ、教員養成系大学ではない本学教職課程の重要なポイントだと思います。

次に、本学学生のみなさんに伝えたいことは、「生徒」から「学生」へ、「教わる」から「学ぶ」へ、「参加」から「参画」へという3点です。それぞれ似たような文言ですが、みなさんはどう違うと考えますか？

私は、「指示を受けるという消極的な在り方から、主体的に行動するという積極的な在り方へ」という点が重要と考えております。部活動においても、指導者の指示を受けるだけでなく、自分たちで競技力向上のためにトレーニングやパフォーマンスを考えていこう。さらに様々な体験を言語化することを通して、「競技力向上」のその先を、自らの力で切り開きましょう。

ついでですが、「教授」などは職階名、「先生」は敬称です。レポートなどで「山本准教授」と書かないようにしましょう。せめて、「山本先生」にして下さい。



スポーツ人文・応用社会科学系

山本 一生 准教授

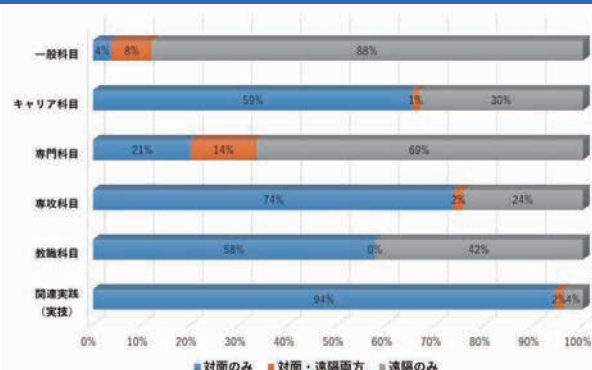
研究キーワード

日本教育史・中国教育史・都市史（中国青島）

コロナ禍における授業の状況

2020年度は、当初東京オリンピック・パラリンピック大会を想定して、変則的な学事日程となっていました。そこに、春先よりコロナ感染症の拡大により、入学式の中止や授業開始が約1ヶ月遅れ、例年とは異なる授業となりました。これまで誰も経験したことのない状況でしたが、どうにか2020年度予定されていた授業を概ね終えることができました。本学の事務職員並びに教職員の臨機応変な対応もさることながら、学生諸君の協力・努力なくしては、この危機を乗り越えることができなかったことを実感します。そこで、実際にコロナ禍にあった2020年度前期と、そうでなかった2019年度の前期授業でどのような違いがあったのかについて検証してみました。どんな状況でも、「学び続けることをやめない」「学びの質を保つ・高めること」を念頭に取り組んできましたが、その点をご確認下さい。

2020年前期の授業の実施方法：遠隔授業の実施率は？

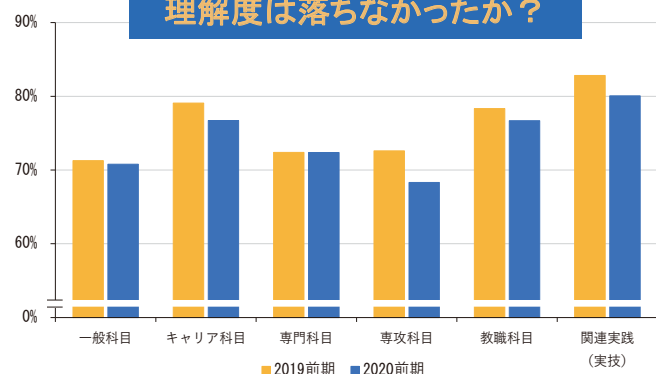


講義科目を多く含む「一般科目」「専門科目」では、WebClassやWebExを使った遠隔授業が大半を占めた。一方、講義科目の中でも「キャリア科目」「教職科目」は対面が半数の割合を占めた。また、実技を要する「専攻科目」や「関連実践科目」の多くは対面形式であった。コロナ禍であるが、体育大学としての授業の質を保証するためにも対面授業が実施されたといえる。

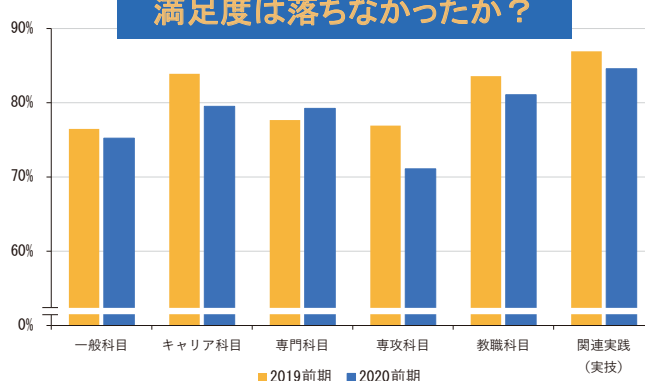
今後は、対面と遠隔の両方を使いながらの授業形態が増えていくと思われる。教職員が授業形態を工夫しながら授業の質を保証するのは当然のことであるが、学生も如何なる授業形態になっても自発的に学修できるように準備と態度の形成が期待される。

2019年前期と2020年前期の授業の理解度、満足度、授業時間外の学修時間

理解度は落ちなかったか？



満足度は落ちなかったか？



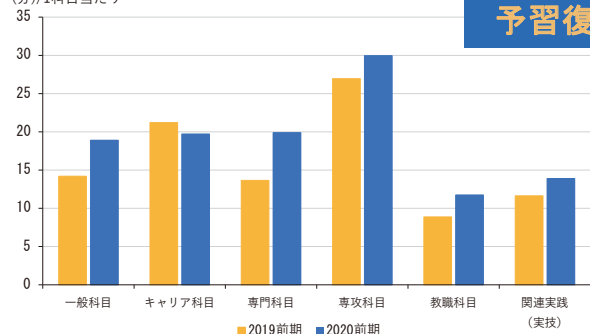
2019年度と同様に2020年度の**授業の理解度**が維持された科目は、「一般科目」「専門科目」といった遠隔授業を多く実施した講義科目の授業であった。一方、少し低下した科目は対面授業で演習を多く行った「キャリア科目」「教職科目」、さらに低下した科目は実技を多く含む「関連実践」「専攻科目」であった。

これらの違いの原因は、前述した科目群の授業形態が影響していると予想される。「一般科目」「専門科目」では、効果的に遠隔授業が実施され、理解度の維持に繋がったと考えられる。一方、「専攻科目」「関連実践」等では、感染予防の観点から、十分に実習や演習ができなかったことが理解度を低下させたと考えられる。

また、**授業の満足度**は、理解度とよく似た傾向を示した。「一般科目」はほぼ維持、「専門科目」では向上していた。これらの科目は、遠隔授業等が適切に実施され、学生の学びが充実し、満足度が維持・増加したと予想される。一方、「キャリア科目」と「専攻科目」については、例年通りのグループワークや実技実習ができないこともあり、他の科目と比較して大きく低下したと推察される。これらの科目については、対面形式、遠隔形式を含めて、なお一層の授業改善や学修の改善が求められていると考えられる。

(分)/1科目当たり

予習復習時間は増えたか？



授業時間外学修時間は理解度や満足度とは異なり、全体的に僅かではあるが増加傾向にあった。授業での課題等が増えたこと、部活動の時間が制限され、不要不急の外出できない分、授業外での学修に時間を割けた可能性がある。

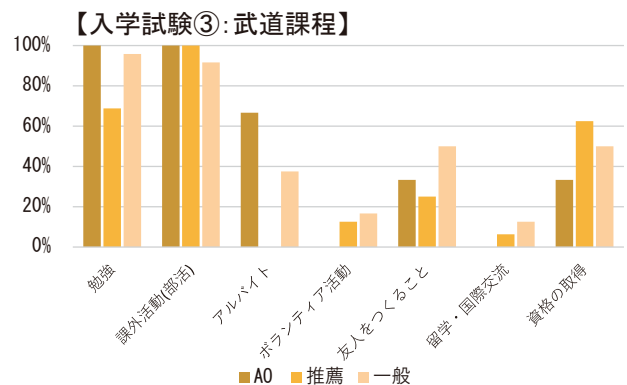
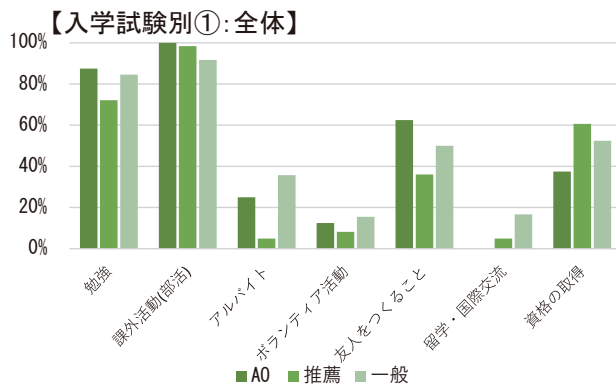
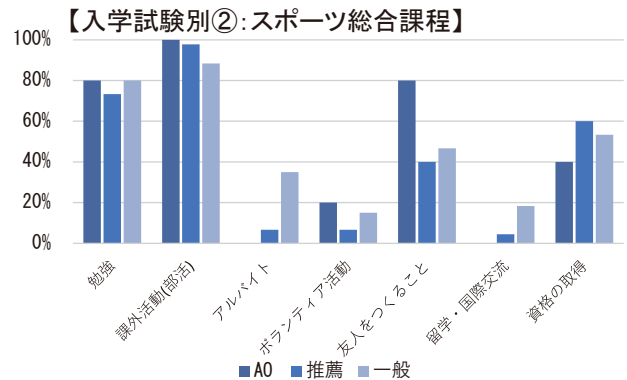
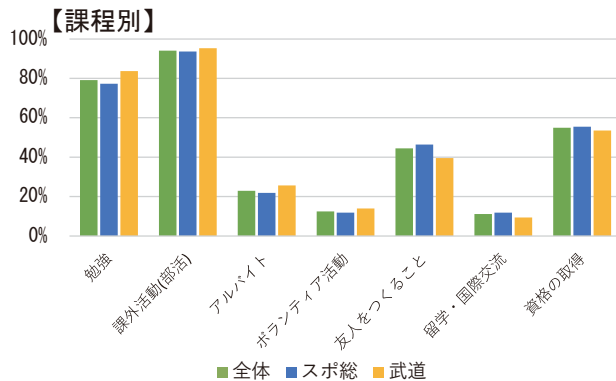
特に、「一般科目・専門科目」では5分以上長くなり、1科目当たり平均20分の学修時間になった。1科目で60-80分の授業科目もあることを考えると、予習や復習、さらには授業等で学んだことから派生した調べもの学修や友人との三密を避けたディスカッションなどの時間が増加することが期待される。

2020年度入学時アンケート調査

毎年、新1年生については、4月に志望動機や就職希望なども含む「入学時アンケート調査」をアドミッションセンターが実施しています。これまで、この調査結果について在学生や教員にはあまり公開されてきませんでした。しかし、「どんな思いを持って、本学に入学してきたのか」「どうして運動部に入りたいのか」などを、教職員学生が相互に理解しておくことは、学修や教育・支援を進める上で重要になると考えます。

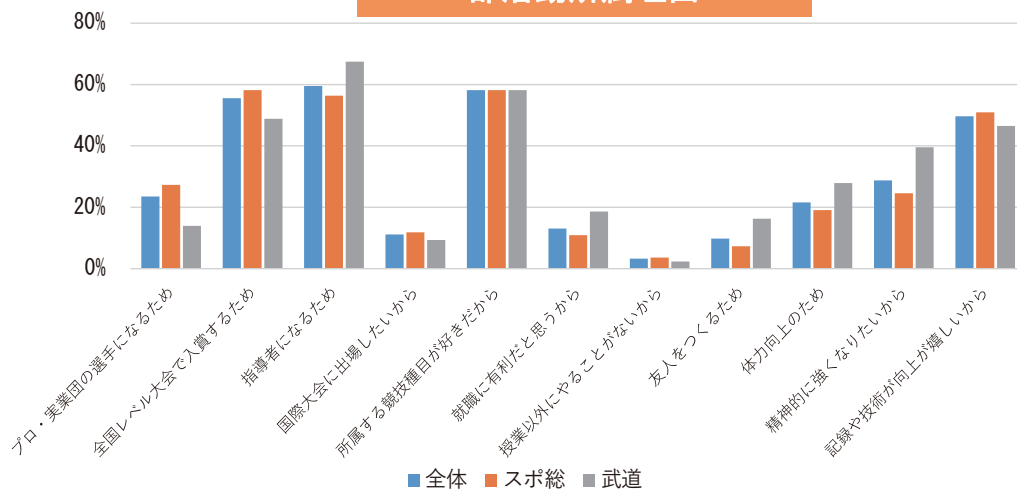
色々なアンケート項目がある中、今回は新1年生の「大学でやりたいこと」「部活動所属の理由」について紹介します。2年生以上にとっては、「どんな思いで体育大に入学してきたのか」を思い出し、初心に戻る良い機会になるかもしれません。自分とは違う思いや考えを持った仲間も居ることも意識しながら、データを観るとよいでしょう。

大学でやりたいこと



入学時においては、「勉強」よりも「部活動」をメインに考えていることが見て取れる。特に、大学であるにも関わらず、「勉強」と回答しない学生が20%も居ることに注目したい。さらに、一般入試で入学した学生よりもAO入試や推薦入試で入学した学生の方が「勉強」や「部活動」への意識が高いことがうかがえる。また、その他の項目で見ると、「友人をつくること」、「資格の取得」については半数の学生が入学時の希望として掲げている。

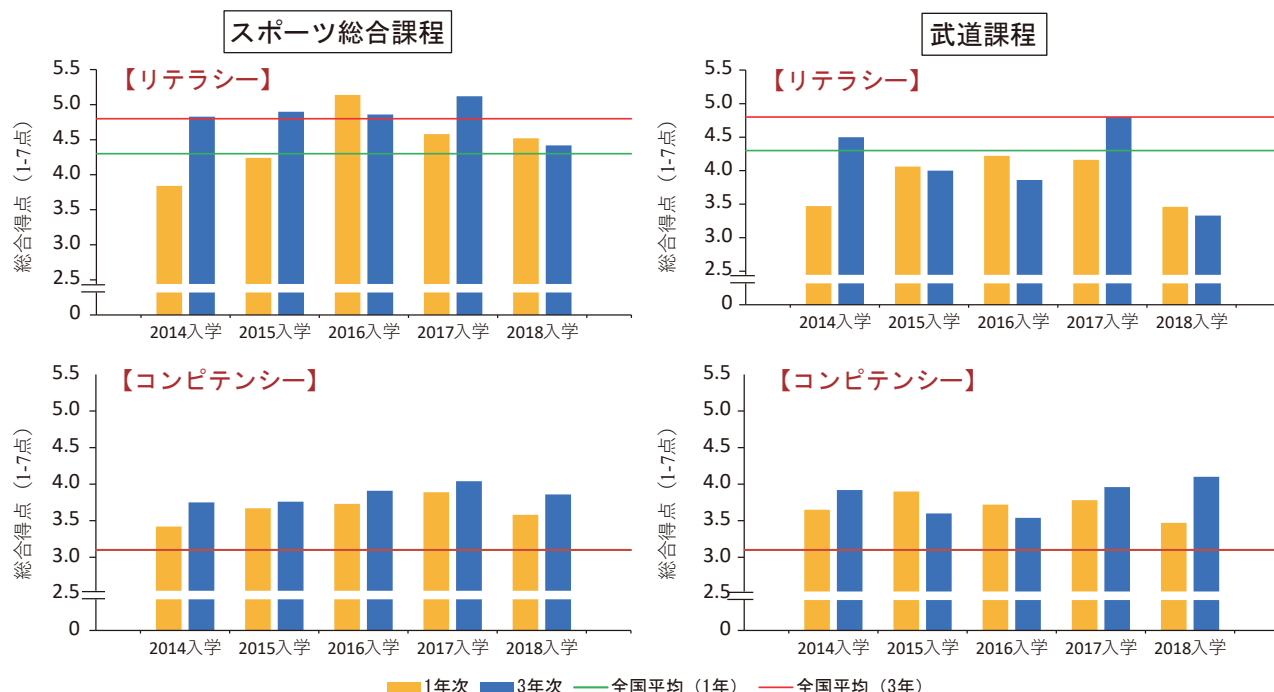
部活動所属理由



全体・両課程に大きな傾向差はなく、競技が好きなので目的意識(全国大会で入賞など)がはっきりしていることが分かる。入学時には、「自らの競技力を高める」と同時に「指導者になる」ことを意識して加入していることが注目される。また、自分自身の「記録や技術の向上」にも大きな意味を見出している。この傾向は、2年生以上の在学生の入学時と同じ傾向を示した。

在学生における学びの軌跡：汎用的能力編

汎用的能力(PROGテスト)における1年次から3年次への経年変化



図は、体育大生の入学時(1年次)の4月から3年次の11月までの汎用的能力(PROGテスト)の入学年度ごとの変化を示したものです。また、リテラシーとは、知識(数的処理力や文脈理解力など)を使つての課題解決力を示します。コンピテンシーとは人と協力しながら問題解決を行うことができる能力を示しています。

体育大生のコンピテンシーは、入学時から全国平均値(赤いライン)よりも高く、3年次でも高いことが特徴です。現4年生の平均的な学びの軌跡をたどると、過去の先輩と同様に3年次でも伸びており、特に武道課程の学生の伸びが大きいことがわかります。

一方リテラシーは、両課程ともに1年次からの伸びが認められませんでした。この結果は、3～10分程度でテストの回答を行った数名の学生の得点が少しばかり影響していることもありますが、全体的に基礎学力や一般教養の学修、さらには課題解決に関わる演習(例えば総合演習やゼミナールでの活動)が不足していることが考えられます。コロナ禍の影響で、対面でのグループワークや演習が不十分なことが影響したかもしれませんが、この点の改善は、本年4月からはじまる新教育課程でも対応しますので、乞うご期待を！

1年間ありがとうございました

2020年4月からの教育企画・評価室での業務について、3月で1年間の任期が満了となりました。在任中は、これまでとは違った立場から鹿屋体育大学の教育に携わることで、本学の素晴らしさと魅力を再確認することができました。また、業務を通して学生の修学のために多くの方々が動いてくださっていることを実感することができました。学生の皆さんは、これから鹿屋体育大学の素晴らしい先生方や職員の方々からサポート受けながら、自己実現に向けて一生懸命活動して欲しいと思います。私事ですが、4月からは本学のスポーツ・武道実践科学系の講師(コーチング学(野球))を務めることになりました。これからさらに鹿屋体育大学の学生の教育・研究に貢献できることを楽しみにしています。立場は変わりますが、これからもよろしくお願いします。



教育企画・評価室
特任助教 藤井雅文

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

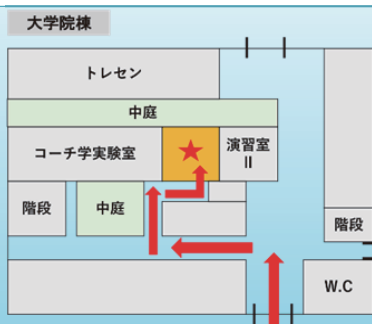
〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

藤井雅文・岡田あゆみ・金高宏文



教育企画・評価室のHPもご覧ください



<http://ap.nifs-k.ac.jp/>

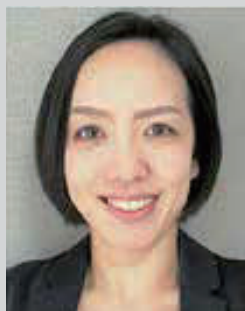
NIFS-AP News

VOL.10

◆教員からのメッセージ

◆新教育課程の理解度：指導力に加え、研究力を高める！ 2021.10

教員から体育大生へのメッセージ



スポーツ人文・応用社会科学系

梶 ちか子 講師

研究キーワード

体育：保健等の授業づくり
学修成果・評価

「知る」楽しさ、「分かる」楽しさ、「学ぶ」楽しさ

保健体育科教育関連科目やダンスの授業を担当している梶（かこい）ちか子です。体育や保健等の授業づくりや学修成果・評価等を、研究・教育のテーマにしています。

私が小学校に入学する前、アニメ「ドラえもん」を見ていた際、いつものようにのび太くんが、“宿題が嫌だ～、勉強なんて大嫌いだ～”，とドラえもんに，“何とかして～”と泣きついている場面がありました。その時、一緒にテレビを見ていた母が、ボソッと「本当は勉強って楽しいのよ。新しいことを知ったり、知らなかったことが分かったりすることって、結構面白いのよ。」と独り言のように呟きました。当時は「ふーん」としか感じなかったのですが、小学校に入学し、授業が始まると、事あるごとに母のその言葉が頭に浮かび、「知る」こと、「分かる」こと、「学ぶ」ことが「楽しい」と思えるようになりました。

もちろん、苦手な教科もありました。受験勉強も本当に辛かったです。いつも勉強することが楽しいわけではありませんが、それでもどこか自分の根っこ部分に、知って分かって学ぶことは「楽しい」ことだという感覚があります。特に大学は、自分の興味・関心に従って、ひたすら探求できる貴重な場所です。知的な刺激に溢れたこの場所が私は大好きです。皆さんも、是非、大学で「知る」「分かる」「学ぶ」楽しさを実感してください。

ちなみに母は、現在、「私、そんなこと言ったっけ?」と、まるで覚えていません・・・。

「知恵と知識 ～2つの三角形と魔法の呪文～」

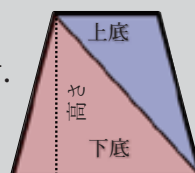
主にスポーツバイオメカニクス関係の授業を担当している村田宗紀です。研究では、様々な身体運動の機序解明や、分析手法の開発などを行っています。

さて、皆さんは小学校で台形の面積の求め方を学んだと思います。

台形は三角形（青色と赤色）の組み合わせなので「赤い三角形の面積＋

青い三角形の面積＝（上底×高さ÷2）＋（下底×高さ÷2）＝（上底＋下底）×高さ÷2」となることがわかります。つまり、三角形の面積計算ができれば台形の面積計算もできます。このことに気が付いた瞬間は、私にとって出所がよくわからない魔法の呪文（ジョウテイタスカテイ・・・）が、確かなイメージ（2つの三角形）と結びついた瞬間であり、とても記憶に残っています。そして、苦労して覚えた魔法の呪文は忘れても、このイメージは今でも消えません。

ここで言いたいことは、理解せずに何かを覚えることは苦行ですし、時間と共に知識も失われるでしょう（投資対効果最悪です）。一方、理解することは楽しく、一生残る知恵になるということです。近年では、インターネットの普及に伴い、“誰でもいつでもアクセスできる知識”に価値が見出しにくく、他の誰かができないことを実現する知恵が求められているのかもしれませんが、大学は教育研究機関であり、答えの定まっていない問題に得られた知識を前提に議論することで、知恵を得るのに最適な場です。是非、どんな課題も答えを他者に求めるのではなく、自分なりの解釈や主張を一生懸命考えてみてください。そして、皆さんの大学生活が、卒業後のはるかに長い人生を豊かにする知恵を得る機会になることを願っています。



スポーツ生命科学系
村田 宗紀 講師

研究キーワード

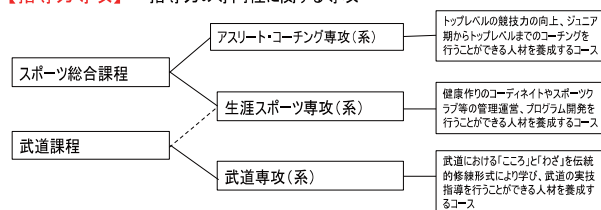
スポーツバイオメカニクス
動作分析 シミュレーション
分析手法の提案

新教育課程の理解度：指導力に加え、研究力を高める！

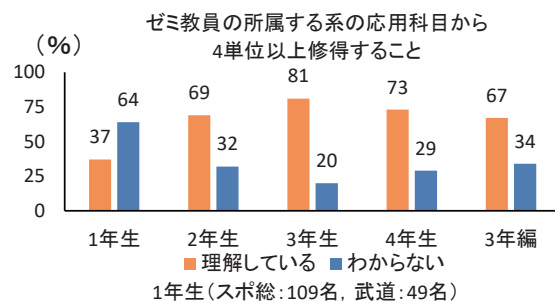
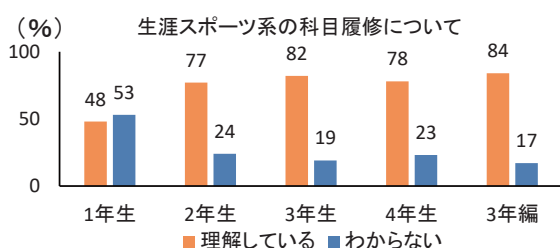
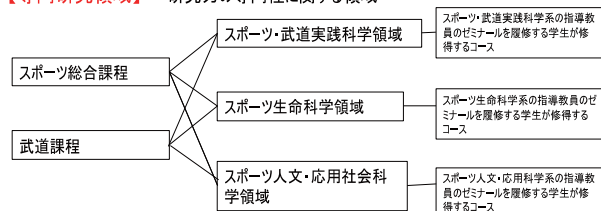
■本年4月より教育課程が、本学の教育研究のミッション、学修の現状、将来を見通して7年ぶりに変更されました。大きな変更のポイントは、これまでの専攻科目を中心とした「指導力専攻」によるスポーツ等の指導力の修得に加えて、応用科目・ゼミナール科目を中心とした「専門研究領域」による研究力の専門性を高めることを強化しました。学生は「指導」と「研究」において、自らが目指す「専攻」と「領域」を選択し、修めることが明確になりました（右図）。

■この変更に伴う科目履修について、2021年前期にどれほど理解されているかについて調査したところ、指導専攻に関わる「生涯スポーツ系の履修（左下図）」と研究領域に関わる「応用科目の履修（右中図）」における理解不足が認められました。

【指導力専攻】…指導力の専門性に関する専攻

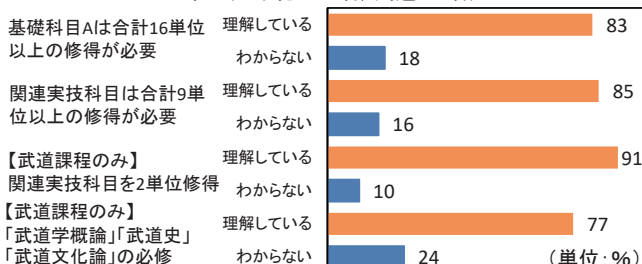


【専門研究領域】…研究力の専門性に関する領域



■1年生の調査（右図）からは、2割前後の学生で必要な単位数や科目についての理解不足があるようです。大学としては、全学生が理解できるように、オリエンテーションのあり方や説明をさらに改善する必要があるといえるでしょう。

★研究力も高めようとしている新教育課程では、授業以外にも学修の支援をするために「**体育・スポーツ教育強化プログラム**」を立ち上げました。興味のある人は教務課へ相談してください。



半年間、お世話になりました

2021年4月から半年間、教育企画・評価室で業務に携わせていただきました。本業務では、教育の質保証に向けて、学修行動およびその成果の可視化に取り組んで参りました。これらの業務を通して私は、学生の皆さんが学業に集中できる環境が整っているのは多くの先生や職員の方々の支援のおかげであることに気がつきました。学生の皆さんは、本学の環境を最大限活用し、目標を達成できるようにして欲しいです。私事ですが、9月からは本学のスポーツ・実践科学系の講師（コーチング学（自転車競技））を務めることになりました。教育企画・評価室からは離れますが、鹿屋体育大学の学生の教育・研究に貢献できることを楽しみにしています。今後ともよろしくお願いします。



教育企画・評価室
特任助教 山口 大貴

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地
大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyoumu-ap@nifs-k.ac.jp

<http://ap.nifs-k.ac.jp/>

<企画・編集>

青柳唯・山口大貴・岡田あゆみ・金高宏文

あとがき（10月末退職のご挨拶）

2018年11月から約5年間、教育企画・評価室で勤務させていただきました岡田と申します。普段は皆さんにお目にかかることはなかったのですが、PROGやSCCOTのテスト、NIFSpass等で関わってくるお母さん的な立場の人です。笑（しつこいメール等すみませんでした・・・）

大学教育再生加速プログラム（AP）というプロジェクトで学修行動の可視化、皆さんが学びを得やすい環境を考えたり、ニューズレターを作ったり、また何よりSCCOTのテスト開発・運営に携われたことは、私にとって特別な経験でした。

多岐にわたる仕事を通して皆さんの成長を間近で感じることができ、本当に幸せです。これから家族とともに1番のファンとして皆さんを応援しています。



- ◆教員からの授業メッセージ
- ◆卒業後アンケート集計報告
- ◆SCCOTテスト・PROGテストの経年変化
- ◆教員表彰

教員から体育大生へのメッセージ

「大学は大人の小学校」



スポーツ人文・
応用社会科学系

関 朋昭 教授

研究キーワード
組 織 クラブ
チー ム 部活動

スポーツマネジメントなどを担当している関 朋昭(せき ともあき)です。私は、クラブやチームなどの組織の問題を主に研究対象としていますが、研究の守備範囲は広い方です。さて、そもそも研究とは何でしょうか？ そのヒントは小学校にあるのではないのでしょうか。

まずは小学校の頃を一緒に思い出してみましょう。私は好きだった女の子のことを真っ先に思い出しました。なぜ思い出したのか？ 本気でその子を考えていたからです。「覚えたことは忘れるが、考えたことは忘れない」ある偉い学者が言っていたような。スポーツの話をしします。小学校時代、私はサッカー少年団に入っていました。そこそこ強いチームでしたが、全国大会の一手手前で必ずライバルチームに負けていました。その時に考えていたことは「ライバルチームはなぜ強いんだろう」逆説的に「自分たちはなぜ弱いんだろう」と真剣に考えていました。これは立派な研究テーマです。この疑問を当時の先生(監督)へ聞いてみたところ、先生は「相手チームはウチ(自分たち)よりもたくさん練習しているからだ」と答えました。「嘘だ」と思いました。

小学校の話へ戻りましょう。授業中、先生の説明が理解できない時には、私も友達も素直に「わかりません!!」と言える雰囲気でした。「わからない」ということを真面目に考えていた小学校の授業は、楽しかった思い出しかありません。皆さんも授業中に関わらず、先生の説明がわからない時は「わかりません」と堂々と言ってみてはいかがでしょうか。ちょっとの勇気が自分や周りを変えるはずですよ。皆さんの大学生活を応援しています。

「常に疑問を持ち、探求する心」

スポーツ医学を担当している廣津匡隆です。

私が皆さんに伝えたいことは「常に疑問を持ち、探求する心」を持つことです。

アスリートが自分の信じられるものを信じ続けていくことは大事ですが、信じるだけでなく今の自分に疑問を持つことも同様に大事だと思います。

私は整形外科医となって20年以上経ちますが、医療において20年前と現在で変化したことは山ほどあります。スポーツ界においても、トレーニング方法や考え方など変化したことは多いと思います。このような変化はなぜ起こったのか？ まさしく、誰かが疑問を持ち、探求し、説明していった証です。

そう考えると、現在の傷害予防やパフォーマンス向上のトレーニング法などは最良の方法なのではないでしょうか？ もっと良い方法があるかもしれません。「常に現状に疑問を持ち、更に良い方法などを探求する」ことが、皆さん自身の成長だけでなく、今後のスポーツ界全体の成長に繋がるのではないのでしょうか。

スポーツは集中すると、周りが見えにくくなりがちです。体育大学に入学し、スポーツについて勉強する機会を得たわけですので、有効に学生生活を利用し、もう一度自分の競技スポーツを客観的に見つめ直してほしいと思います。

大学生活はあっという間です。漫然と過ごせば、楽しい大学生活にはなるでしょう。しかし、身になる大学生活にしてほしいと私は願っています。要は、自分のやる気次第です。教職員は全力でサポートします。みなさんの頑張りを期待しています。



スポーツ生命科学系

廣津 匡隆 准教授

研究キーワード
膝関節
整形外科

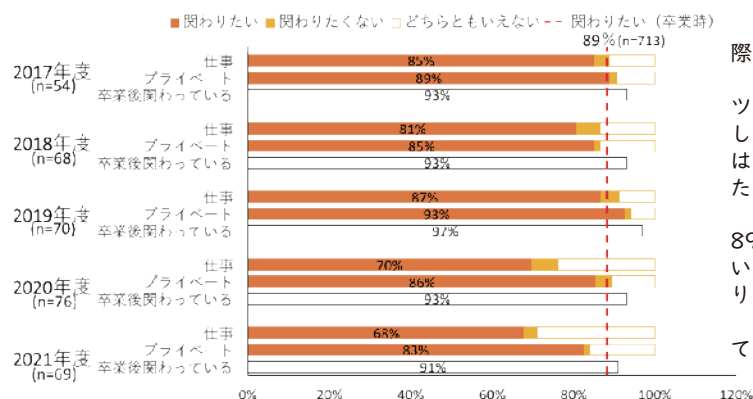
卒業後アンケート5年分

(2017年度～2021年度)

卒業後アンケートは、本学学生が卒業後にスポーツ・武道・健康づくりにどのように関わっているのかなどを調査しているものです。2017年度から5年間に渡り、卒業後3年・10年経過した卒業生を対象にアンケートを実施しています。教職員や在学生が卒業生の状況を相互に理解しておくことは、大学における教育や進路・キャリアデザインを考える上で重要になると考えます。

様々なアンケート項目がある中、今回は卒業後、スポーツ・武道・健康づくりに「どのように関わったことがあるか」「どのような目的で関わってきたか」「今後、関わりたいか」について紹介します。

Q. 今後、スポーツ・武道・健康づくりに関わりたいですか？



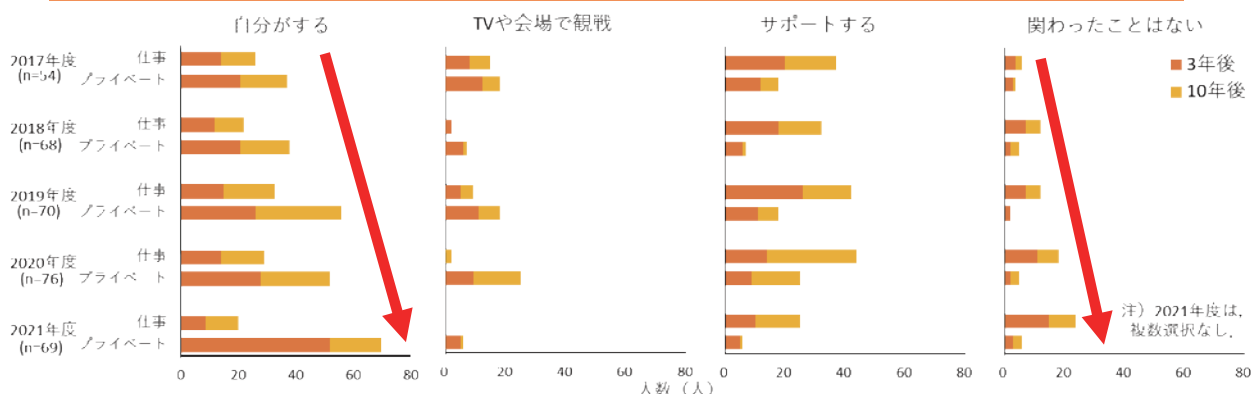
右の図は、本学を卒業後の回答（■）と卒業する際に回答した結果（---）を比較したものです。

卒業後3年・10年経過した卒業生は、「今後、スポーツ・武道・健康づくりに関わりたいか」という問いに対して、仕事としては約68%以上、プライベートとしては約83%以上の人が「関わりたい」と答えていました。

一方、卒業時に「関わりたい」と答えた人（---）は約89%、卒業後、仕事やプライベートで実際に関わっている人（■）は約91%以上いることから、卒業時よりも実際に関わっている人が多くいました。

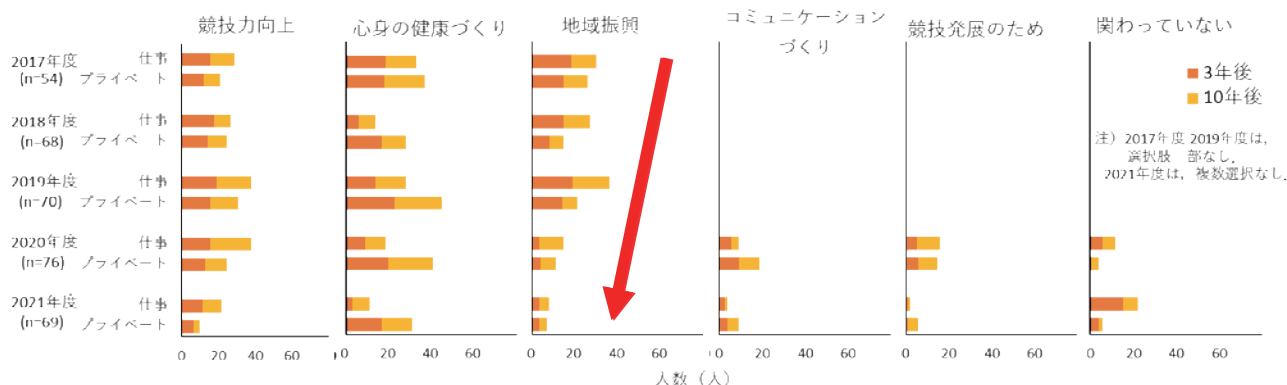
では、「関わりたい」と答えた人はどのように関わっているのか以下で見ていきましょう。

Q. 卒業後、スポーツ・武道・健康づくりにどのように関わったことがありますか？



「スポーツ・武道・健康づくりの関わり方」を調査した結果、「する」や「支える」スポーツで関わっている人が多いことがわかりました。特に、プライベートで「自分がする」人が増加していました。しかし、仕事で「関わったことはない」人も微増していました。

Q. どのような目的で関わってきましたか？

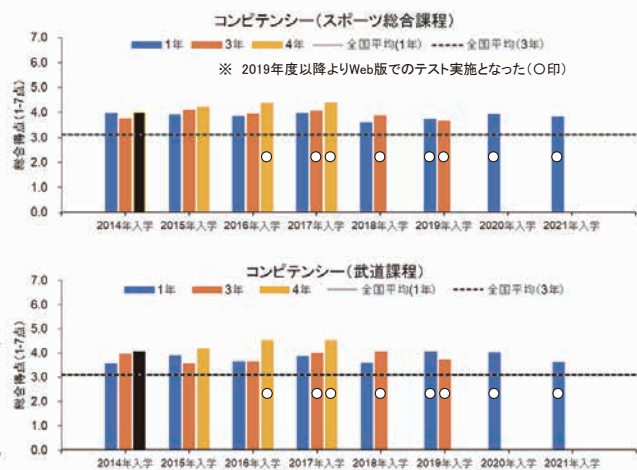
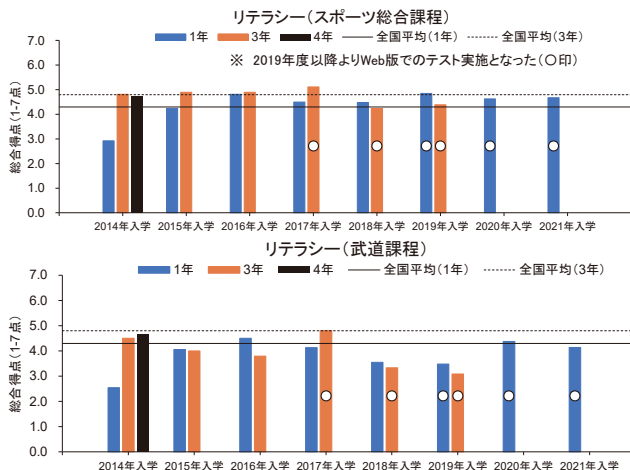


「どのような目的でスポーツ・武道・健康づくりに関わってきたか」をみると、競技力向上や心身の健康づくり、地域振興を目的に関わっている人がほとんどでした。しかし、5年間で、地域振興を目的として関わっている人が減っていることがわかりました。本学の卒業生は、卒業時よりも実際に関わっている人が多くいること、仕事やプライベートでの競技力向上や心身の健康づくりを目的として「する」スポーツに関わっている人が増えている傾向にあるといえるでしょう。一方、本学の理念のスポーツ・武道文化の振興・発展への関わりである「地域振興」は、少なくなってきたので、教育改善が期待されます。（文責 青柳）

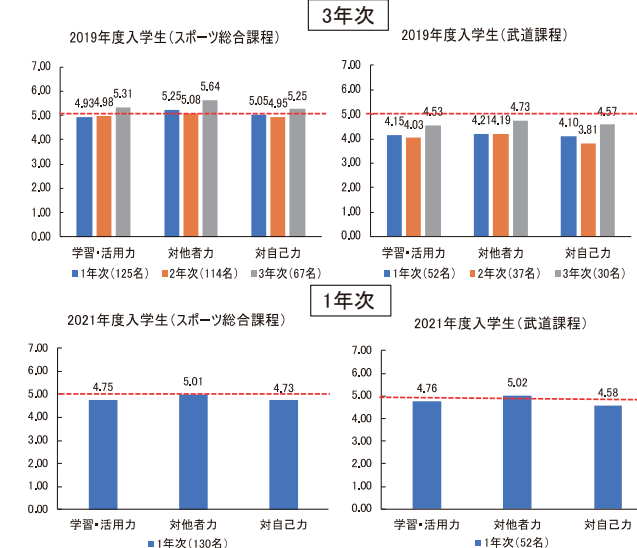
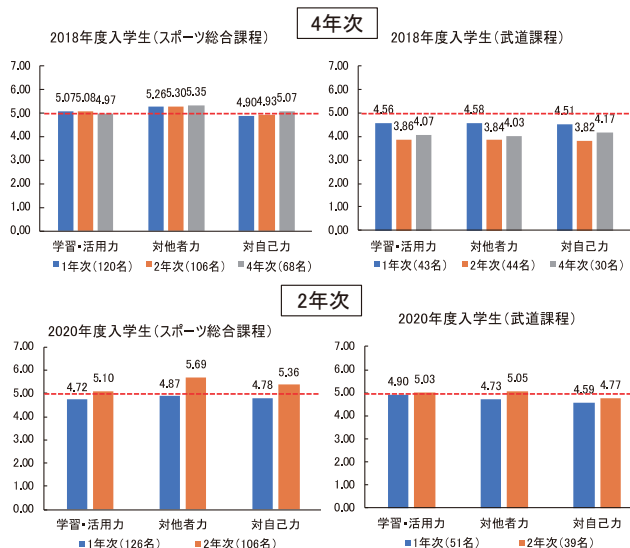
PROGの経年変化 (2014～2021年度入学生を対象に)

PROGは、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（＝ジェネリックスキル、社会人基礎力）を測定するテストのことです。リテラシーは知識を活用して問題を解決する力（情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力）、コンピテンシーでは自分にベストな状態をもたらそうとする力（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）を測定しています。本学では、1年次前期と3年次後期に2つのテストを、4年次の卒業論文提出後にコンピテンシーのテストを実施し、それらの能力が本学の学びによりどのように伸長しているかを確認しています。下図の横線は全国の大学生の1年次（実線）と3年次（破線）の平均値を示しています。

コンピテンシーは、両課程、学年ともに全国平均値を大きく上回っています。4年次の卒業論文提出後にテストを実施するようになった2015年度以降では、3年次後期から大きな伸びを示していることを確認しております。卒業研究による教育効果を実感しているところです。一方、リテラシーについては2018年度入学生以降、3年次での伸びがあまり観られないのが気になるところです。コロナ禍によりWebでのテスト実施などが影響しているのかも知れません。今後詳しく分析し、対応策を検討します。（文責 金高）



SCCOTの経年変化 (2018～2021年度入学生を対象に)



SCCOT（スコット）は、日本のスポーツ界が目指している「**プレーヤー中心の考えに基づいたコーチングを行うための行動・判断力**」を可視化するテストです。2015年度に本学が開発し、2018年度までテストの実施時期を含め、試験的・段階的に実施してきました。現4年次生（上図の3年次生）からは、1年次：6-7月、2年-4年次：1-3月と実施時期も固定され、スポーツ指導に関わる専門的知識・技能・態度の修得度、実習の体験により、この行動・判断力をどのように変化させているかを経年的に把握できるようになりました。

2019年度入学生以降では、学年進行とともに上昇する傾向が確認できます。特に、専門的知識の学びが増える2年次、スポーツ指導実習を終えた3年次に大きな伸びがあることが確認できております。また、5ポイント（赤破線）は、スポーツ指導歴を3年以上有する指導者の平均レベルを示します。そのレベルにも到達するようになっていきます。今後は、“コーチのコーチ”と言われるコーチデベロッパー（日本スポーツ協会指導者養成講習会の講師の名称）の平均値である6-7ポイントにもなれるように、学びや教育の充実を図ります。

なお、SCCOTは山梨学院大学・スポーツ科学部でも1年次と3年次に実施され、徐々に体育系大学やスポーツ指導者が関わる団体でも活用されてきています。今後、色々な場面で耳にするテストになるかも知れません。「鹿屋体育大学発のテスト」ですので、各自の結果とともに、その意味についてもより深く理解し、行動・広報できるようになることを期待します。

（文責 金高）

授業振り返りアンケートの結果は教員顕彰にも活用されています！

令和元年度より、授業履修者による「授業振り返りアンケート」の授業得点から優秀授業科目を決定しています。優秀授業科目の担当教員は、教員表彰規則に基づく優秀授業賞候補者として推薦されています。下記は、令和2年度の授業において優秀授業賞で顕彰された教員の一覧です。「授業振り返りアンケート」は、受講学生のより充実した学びを促進するとともに、教員の授業改善の取組を加速させることにも寄与しています。毎学期のアンケートは大変かも知れませんが、学生自身の率直な振り返りが本学の教育の質を向上させることにも繋がっていることを理解し、取り組んでいただければと思います。



優秀授業科目担当者



講義・演習科目		実技科目	
青木 竜	教職実践演習 (中・高)	青木 竜	ソフトボール①
荻田 太	運動生理学	梶 ちか子	ダンス②
金高 宏文	キャリアセミナー	坂中 美郷	バレーボール① 卓球①
栗山 靖弘	教職実践演習 (中・高) 教育方法・技術 国語・文章表現法	下川 美佳	専修武道論・実習Ⅳ－剣道 専修武道論・実習Ⅱ－剣道 なぎなた
坂中 美郷	教職実践演習 (中・高)	永原 隆	陸上・体操・水泳②
高井 洋平	トレーニング科学概論	前阪 茂樹	専修武道論・実習Ⅳ－剣道 専修武道論・実習Ⅱ－剣道
田巻 弘之	運動生理学	三浦 健	バドミントン② ソフトボール①
中本 浩揮	教職実践演習 (中・高)	村田 憲亮	陸上・体操・水泳②
浜田 幸史	教職実践演習 (中・高) 保健体育科教育法Ⅱ 特別活動論 保健体育科教育法Ⅱ 保健体育科教育法Ⅰ		
森 克己	教職実践演習 (中・高) 国語・文章表現法		
山本 正嘉	トレーニング科学概論		
幾留 沙智	スポーツカウンセリング論	瓜田 吉久	陸上・体操・水泳②
梶 ちか子	教職実践演習 (中・高) 保健体育科教育法Ⅱ 特別活動論 保健体育科教育法Ⅱ 保健体育科教育法Ⅰ	小森 大輔	陸上・体操・水泳②
国重 徹	キャリアセミナー	塩川 勝行	バドミントン②
小森 大輔	教職実践演習 (中・高)	竹中健太郎	専修武道論・実習Ⅳ－剣道 専修武道論・実習Ⅱ－剣道
隅野美砂輝	スポーツマーケティング論 スポーツ産業論 キャリアセミナー	濱田 幸二	バレーボール① 卓球① ソフトボール①
竹中健太郎	教職実践演習 (中・高)	松村 勲	陸上・体操・水泳②
中村 勇	武道史	村上 俊祐	卓球①
濱田 幸二	教職実践演習 (中・高)		
松村 勲	教職実践演習 (中・高)		
山本 一生	教職実践演習 (中・高)		
吉田剛一郎	運動生化学		



半年間ありがとうございました

2021年9月から半年間、教育企画・評価室の業務に携わらせていただきました。学部・大学院・実業団選手時代を合わせると約10年間、鹿屋体育大学でお世話になりました。

本業務を通して、体育・スポーツを中心とした鹿屋体育大学の熱心な教育に、ハッとさせられることが多くありました。学生の頃は、当たり前のように大学の授業や教育を受けていました。しかし、職員の立場で学生のことを考えると、多くの場面で学生生活が充実するよう工夫されていることを実感しました。学生のみなさんは、自分のやりたいこと、今できることを見極め、鹿屋体育大学の地の利を生かして充実した学生生活を送られることを願っています。最後になりますが、室長の金高宏文先生、室員の先生方、業務を共にした日高嘉代子さん、教務課の皆さん、ご迷惑をおかけしながらも半年間ご指導いただき、ありがとうございました。



教育企画・評価室
特任研究員 青柳唯

よろしくお願いします

2022年4月より、教育企画・評価室に配属になりました大澤啓亮と申します。

出身は東京で昨年の9月から鹿屋体育大学に着任し、半年が過ぎました。鹿屋市に来ることは初めてでしたが、ようやく慣れはじめ、自然が豊かで食べ物が美味しくとても恵まれた環境だと日々感じております。

筑波大学大学院を卒業後は約5年間、日本スポーツ振興センター (JSC) で働き、国内外における競技力向上に関する情報の配信や競技団体の競技力の分析といった、競技力向上に関わる業務に携わっておりました。大学教育に関わることは初めてですが、皆さんの学生生活がより充実したものになるようサポートできればと思います。



教育企画・評価室
特任研究員 大澤啓亮

<発行>

鹿屋体育大学 教育企画・評価室

〒891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町1番地

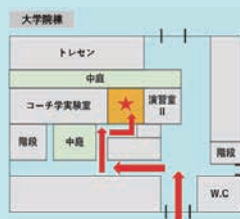
大学院棟1階

TEL&FAX: 0994-46-5082

E-MAIL: kyomu-ap@nifs-k.ac.jp

<企画・編集>

青柳唯・大澤啓亮・日高嘉代子・金高宏文



「忍者パンフレット」が新しくなりました！



【謝辞】

金久博昭学長には、3年もの年月を経て本事業の報告書の印刷・広報となりましたことにご理解と後押しを賜りましたことに深く感謝申し上げます。

また、AP 補助事業及びその後の本学の教育の質保証に関する取組について、教育企画・評価室の特任助教の近藤亮介さん（現、兵庫県立大学・特任助教）、藤井雅文さん（現、鹿屋体育大学・講師）、山口大貴さん（現、鹿屋体育大学・講師）、特任研究員の濱中良さん（現、鹿児島国際大学・助教）、青柳唯さん（現、鈴鹿工業高等専門学校・助教）、大澤啓亮さん、非常勤事務補佐の岡田あゆみさん、日高嘉代子さん、玉山由佳さんのご協力を得ながら粛々と進めることができました。

さらに、いつも本室を支えて頂いてる教務課課長の元明勇二さん、副課長の鈴木拓朗さん、教務課教育企画係、支援係の皆様にもここに記して感謝申し上げます。ありがとうございます。

2023 年 3 月

教育企画・評価室長 金高 宏文

[学長補佐(教育担当)]

平成 28 年度 大学教育再生加速プログラム テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」報告書作成

＜教育企画・評価室＞

- ◎金高 宏文 スポーツ・武道実践科学系教授〔学長補佐（教育担当）〕 ※
前田 博子 スポーツ人文・応用社会科学系教授〔キャリア形成支援センター長〕
和田 智仁 スポーツ人文・応用社会科学系教授〔スポーツ情報センター長〕
中本 浩揮 スポーツ人文・応用社会科学系准教授〔アドミッションセンター長〕
沼尾 成晴 スポーツ生命科学系准教授
梶 ちか子 スポーツ人文・応用社会科学系准教授〔FD 推進専門委員会副委員長〕
元明 勇二 教務課・課長
楠原 良成 経営戦略課・副課長
大澤 啓亮 特任研究員 ※
〔◎：室長, ※：編集〕

＜教務課＞※

鈴木拓朗（副課長）、富田成彦（教育支援係長）、山元康暉、黒木あゆみ（教育企画係）

平成 28 年度 大学教育再生加速プログラム
テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」報告書
**体育系大学における学修成果の可視化と
卒業時における質保証の取組の強化**
：鹿屋体育大学における 4 年間の教育改革の取組と今後の課題

発 行 日：2023 年 3 月 20 日
編 者：金高宏文、大澤啓亮、鈴木拓朗
発 行 者：鹿屋体育大学 教育企画・評価室
〒 891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1 番地
Tel：0994-46-4111（代表）
デ ザ イ ン：株式会社 新 生 社 印 刷

本書の内容を許可なく複写複製することを禁じます。

本事業は、文部科学省の大学改革推進等補助金による平成28年度 大学教育再生加速プログラム
テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」の受託を受けて実施したものです。

